

に反して田島に向へり。地、人の之を耕し、之より麴麩を得るなる其地こそは彼が風景の全題目なりけれ。彼の世に宣傳したるは平原の詩なり、自然の詩なり。打ち見たる所、空濶の延長は虚なり。深く耕され、畝の間より蒸氣の發揚するなる島地は、滿目涯もなく廣がりて地平線の一線を以て空と接合す。何處も空虚なり。その間には耕耘具たる鋤、熊手、バケツその他の點在するあるのみ。肥料の堆大なる教會の塔、樹木の茂り、是等が僅に地平線を破るあるのみ。ミレーは是等の農具を前景にも、し、背景に天を衝く塔を描出してその遠景をして大なる幻影の力を有せしめたり。レムブランドや印象派の畫家は、地よりも寧ろ空に、より多く注意したるに、ミレーは地に重きを置き、彼の描く人物の立ちて動くには確乎なる踏臺なかるべからずとせり。之に依りて彼の惹起せし印象は二つあり。一は無涯及び無限の印象にして、一は之と同時に宇宙の凡ての力もて脈打つなる地の重々しきことなり。彼の繪を見ては吾人は地の精靈の平原を跋渉しつゝあるが如きを感じざる能はざると共に、又最も無意義に見ゆる是等の耕地も、素と幾代となき古よりして力耕せる人類の汗によりて豊饒になりたるものなるを

思念せざる能はず。

禽獸も亦ミレーが風景の節奏中に其地位を占む。動物畫家中にてミレーは畜群及び禽群の描寫を以て顯る。彼が食を漁る羊、或は夕暮其畜舎に歸る様を描くや吾人は是等の動物の唯一の本能、唯一の精靈を有する一の全體の部分に過ぎざるにあらざるを感じざる能はず。

此地よりして人も生ず。彼は嘗つては地の一塊なりき。されど最初の彫刻師たる神は、己れの像に模りて人間を造りたれば、人は起立して地を耕さざるべからず。其手の力により、其智力によりて彼は自然物質を征伐す。これミレーが象徴主義なり。彼の描きし農民は一八六〇年に於てバルビゾンに住せし農民其者にあらざして、寺の鐘の音をも知らざる輩なり。時の子にあらずして、永世の空氣を呼吸すなる人間の大きな象徴なり。

ミレーは實に時代を超越するものなり。されば彼は家庭生活を描く畫人に列せらるべくもあらず。其描ける洗濯桶の傍に立てる女子、兒に肉汁與ふる女子は、皆何等家庭的趣味を暗示するものにあらずして却つて壓迫の感情を吾人に鼓吹

す。何となれば吾人は此處に婦人の大なる運命、即ち其子の爲め、彼等の生活の爲めに勞苦せざるべからざる婦人の天職を見ればなり。されど之あるが爲めに此處には眞の人性のみならず、最高の詩は成立し得るなり。訴へもせず、不平がまじき顔もせずして人間の法則に耐へ忍びし其人生の負擔を荷ふなる是等の母親の上には神聖なる何ものかの存するなからんや。ミレーが簡易なる形の一點張を以て、是等戸内生活にも族長的にして神々しき偉大を賦するに至れるは實に驚嘆するの外あらざるなり。

此見地よりすれば彼の色彩觀もまた確に是正せざるべからず。素より職業的畫家の之を見たらんには、何人もミレーの畫に於てフランツ・ハルス (Franz Hals) やヴェラスケツ (Velasquez) の如き眞の大油畫家に對するが如き驚嘆賞美を頌つには至らざるべし。されど彼の畫には粗にても性格の驚くべく活現せられたるを認めざることは能はず。彼は往々にして明るき色彩を避けたり。夕の祈禱の如き是なり。女牧夫の多くの作の如きも然り。これ快活にして陽氣なる明るき色は彼の畫題の土性を帯びたる其重々しき所に不釣合なればなり。こはミレーが題目なり。

ミレーは世俗なるもの、取るにも足らぬものよりして、崇高雄美を描出したる。彼は貧にして無智なる農民に從來古代希臘の神々にのみ特有なりし壯大の幾分を付せり。奇なることには十九世紀の初めに於ては多くの美術家は其作に古代の藝術に存する如き美を與へんと努めたりき。ダヴィッドは古代の立像を摸し、そのホラチー兄弟とサピラ婦人とに希臘の立像に見ゆる働を與へたる時には、自ら得々として古代の精神を捕捉し得たりとなりき。レオポルト・ロバートは是等の主義を其田舎生活を描く時に發揮したれば、彼の描ける伊太利の農民は、男女共に古代のサチルやニムフやムーゼーの如くに躍り戯れたり。吾人は之に依りて彼がワチカノ宮殿の何れの立像を己れのモデルとして使用したりしやを一々指摘する事を得。されど之が爲めに彼の畫は又自然に對して不信なり。ダヴィッドもロバートも共に精神なく生氣なき摸倣を試みながら、尙且つ古代の傑作の壘を摩し得たりとし其精神を捕へ得たりと妄想せり。

ミレーの進路は、大に是等所謂畫人のそれとは異れり。彼は古代の作を徒に摸することなくして、恰も文藝復興期の大家が己れの立脚地よりして自然を歎びた

りし如くに古代に學べり。これ彼の近代の畫人に比してより多く古代に近遜するを得たりし所以なり。之を外貌よりして批判せんには雲の冠に被はれたるオレムボスに住むなる裸體の希臘の神々と穢き顔に襤褸を着け勞働に専事するミレノが畫幅中の人物との間には、雲泥の相違あり。されど此不似合は却つて其技巧をして相合致せしめ、ダウソドやロバートの繪は、唯其舉止の古を摸したるのみに止まれども、ミレノの作は同一の事情の下にありながら直ちに希臘の彫刻に類するに至れるなり。ガウシェーは三人の落穂拾ひを評して「貧のバルケイ」(バルケイは希臘羅馬の神話にありて運命の三女神なり)と云ひき。牝牛番の一人は木履を穿ちたる古代の「キベレ」(オリムボス諸神の母)の如く「薪背負ひ」は薪を頭上に載せたる「カネフオリ」の如く、萬能草搔を持てる男は、ミケランジェロがスチン殿堂の肖像にその暗示を得たり。ミレノは又聖書よりして其精神を得しこと尠からざりき。次の如き逸事あり。畫人の一團がミレノの畫室を訪ひしことありたるが、時にミレノは不在にして室内には「子を搖かせる母」が畫架の上にありき。此畫の一團に與へたる印象は深大にして何れも感に打たれて少時默然たり。稍あ

りて「デアスは靜に云へり、嗚呼諸君よ、これ聖典的なりと敬虔にして畫事に志あるの徒を以て之を見たらんには彼の畫の聖典を回想せしむること古代の神々に於けるが如くなりしや亦疑を容るべきにあらず。ミレノの母を描くや直ちに聖母を思ひ、牧女をものせんとするや、腦裡巴里の女神なる聖ジュヌウヱーヴを浮び出づ。吾人は又彼の描ける母と子との馬に乗りて夕の家路を急ぐを見る時は出埃及記の光景を聯想せざる能はず。

ミレノは彼の藝術を聖者及び古代美術家に結び付けたり。彼の青年時代は敬神の外圍の間に遇されき。當時彼の手にしたりし最初の書は彼の一家に十六世紀より傳來せし繪入りの古き聖書なりき。この聖書こそはバルビゾンにて彼が耽讀したるものにして彼の友人は屢これを實見しき。ミレノはダヴィデの詩編をば巨大の紀念物と思ひなせり。彼の自白する所によれば彼の希望は預言者の語るが如くに繪畫を描くにありしと云ふ。彼は古典の記者及び聖書とは幼馴染にして農家に生れたりしとは云へ、グレヴァールの牧師たる彼の大叔父は夙に彼に授くるにウルギリースの牧草歌を以てしたりしなり。後年に及びては彼は凡ての

近代の詩人よりもテオクリス及びホメロスを愛好し、その書をものすに當りては古代記者の書中の句に之が鼓吹を受けしこと少なからざりき。接枝者を描く時には彼はウリギリウスが「ダフネスよ、梨木を植ゑよ、後昆はその實を摘み得べけんなり」の句を記し、又その「羊園」を以ては同じくウリギリウスが「高き山の頂より長き陰落つ」の句を読みたる如き印象を得んことを欲しき。彼の作物のみならず、彼自らの風采、その質素の生活にも亦古代人及び聖書を回想せしむるものなきにあらず。テオフィル、ガウシェは彼を「木履つけたるユピテルの神」と評し、米國の書家ウリアム・モリス・ハント(William Morris Hunt)はバルビゾンに彼を訪ひて「宛ら聖書の中より生れ出てたる人の如し」と云へり。ミレの父には九人の子ありたるがミレにも亦九子あり。夕に彼が湯氣立てる肉汁皿持てる彼の多くの家族の間に卓布もなき長き食卓に坐せし様は如何にも族長時代の簡古なる神に近き人類を聯想せしむるものありき。

これミレと古代人及び聖書との關係なり。されど吾人は決して之を吹聴するの大に失することなかるべし。何となれば藝術の士の偉大は彼と過去の時代と

を結合するの聯鎖に存するにあらずして、新時代の子たる彼の言はんと欲する新事物其物にあればなり。故に吾人は思ふ、聖書によりて鼓吹せられたりとしてミレを賞揚する人々は確に誤れる考に陥りつゝある事を、吾人を以て之を見れば彼の「夕の祈禱」の此大畫伯の作物中にありて最も持離されたるは聊か不思議の次第なり。何となれば此畫は獨り技巧の上よりしてミレが最も拙なる作の一たるのみならず、其畫題も亦彼の作に珍しき情操的のものを取扱ひたればなり。二人の男女の祈禱、ミレの作には一として斯くの如き所作をなしつゝあるものなく、農夫は何れも勞役せり。而して彼の畫人として偉大なるは正しく此點にあり。彼は初めて天國も地獄も知らず唯地と勞働との外、何物も辨へざる人種を描出し、茲に新なる宇宙觀を宣言したり。彼は耶蘇の説教したる苦痛の福音に對して勞働の新福音を説きたり。されば彼の「夕の祈禱」は彼が新なる宇宙觀の除外例なり。彼は概して至つて狭き範圍に其畫題を擇びたり。一八四八年の革命の年に彼は左官や其他都會の勞働者に其手を染めたりしことはあれども、後年に至りては唯一意、地と其耕夫とを描くに止まりたり。是に於て彼の後輩は彼の後を

襲ひ、ミレーの藝術は今やバルビゾンの開野より出て熱間繁華の都に齎され、機械室、鑛山、工場等に入るに至れり。此勞働者の畫題こそ、これ豈に今代に於て最も高き題目となりしものにあらざらんや。ミレーは繪畫の此新方面をば初めて開拓したり。彼に取りては勞働其物は實に神聖にして侵すべからざるもの、種を蒔くこと、收穫すること、接枝すること及び草を刈ることは、彼を以て之を見れば、神に近きの大事業なり。古代の大藝術家は其神々の爲めに紀念物を建設して其神々しさの極致に達し得たりしが、ミレーも亦之と同一の自然的行程によりて莊嚴熱誠の筆致を極め、其繪を勞働の爲めに捧獻し、往古の大藝術家と同じく、之をして今世に大なる宗教的の効果を持ち來さしめたり。彼や實に十九世紀の文明史を飾る最も價値ある巨大の一人たるを失はざるものと云ふべきなり。

マクス・ノルダーはミレーを論じて曰く、ミレーは一八三〇年の大風景畫家の後繼者にして同時に又完成者なり。ミレーは根本的に風景畫家なり。されど彼の畫は人間を以て動かさる。但し彼の人物はコロイの場合の如くに副産物ならで、畫中の最も重要なる部分なり。風景畫家の描く樹木や雲よりは一層品位ありて且

の靈的なるものなり。彼に依りては、人間は其周圍の田園と共に長じたるもので、それ自らが自然の中の自然の一片なり。是等の人物が墮落の人なるか、將た地球をして向上せしむるの人なるかを決することは容易ならざれど、ミレーは思ふ、自然には活ける生々たる元氣ありて、こは千殊萬態の形體を採り、幾多の仕方によりて表現せらるゝを得べきものなり。但し其形の異れるにも拘らず、同一のものなりと。彼がこの宏大なる汎神的恣態によりて彼のものせし繪畫はジャンル(Genie) 風俗畫よりして高き靈的藝術に高められたり。自然は滑稽的のものにあらざれば、ミレーのものせし農民も亦自然の一片として決して吾人を笑はしむるが如きことなく却つて哀傷せしむ。彼の偉大なるは實に其人格に存す。其實實に存す。其田耕の勞働をものせる熱誠に存す。こは藝術に於て別に新奇なる題目にはあらざれど、之ぞ個性の表現なり。畫人としては彼に優るもの少からざらん。されど靈に至りては、彼に比すべきなし。彼の精神は無量大なりと。

第二十四章　　ロセッチ

一　ロセッチの幼時

ダンテ・ガブリエル・ロセッチ (Dante Gabriel Rossetti) は、ラファエル前派の畫家にして又詩人なり。ラファエル前派とは、Pre-Raphaelite Brotherhoodの義にて略してP.R. Bと云ふ。ラファエル以前の古大家の作風を憧憬せる美術の一團體なり。名詮自性ダンテ・ガブリエル・ロセッチは、伊太利人の後裔なり。ナポリ王國の中風光明媚なるアドリア海岸のアブルツィ市の小仙郷ヴェスト・ダムモンこそはロセッチが父の故郷なれ。ロセッチと名のれるもの多し、而してデルラ・ガルヂアを以て嚆矢とす。ロセッチとは赤髮の義なり。されば初め赤毛の子供の綽名なりしが、後には一般の人名となりき。詩人ロセッチの祖父ニコラ・ロセッチは、故郷にありて、鐵の貿易を營みたり。其子即ちガブリエルは、燕趙悲歌の士にして自由の泰斗、學者として令名噴々たりき。ヴェスト・に生れ、後ナポリの都に移り、ボルボン博物館の古物の番人となり、愛國の志士と交り、一八二〇年、シチリア國王フェルデナンドを強ひて、

憲法を發布せしめたる革命家の一人なり。王は埃太利の大軍を率ゐて、馬を陣頭に立て、ナポリを指して、レ・パッパより進軍せるを以て、ガブリエルは埃國議會に召集せられ、同時に革命軍の領袖間にも、恐怖時代來れり。ガブリエルが赤誠をもて、悲歌を作りて慷慨し、人心を鼓舞せるも、亦此秋なり。天は高く地は廣きも、ナポリは踟躕の地なれば、少時一身を隱惹し、後に英國士官の服裝して、折しも灣内に碇泊せる英國軍艦に便乗し、恙なくマルタに逃れき。時に一八二二年なり。この處には、一八二五年まで滯留し、敢て遷客にはあらねど、流離漂泊の志士として、孤島の月に憂國の至誠を訴へし折もありき。此年島司フレールが庇蔭にて、英京倫敦に轉じき。次の年ガブリエルは、英伊の混血婦人ポリドリ嬢と結婚しき。新夫人の處女名をビーエルスと云ひて、戯曲家アルフィエデエの秘書を務め、又ミルトンの作品を伊譯せる才媛なり。一八一六年詩人バイロン卿の侍醫となりて、共にジェネヴァ湖畔に清遊を試みたりしポリドリ博士の令妹なりといふ。

一八三一年ガブリエル、王立大學の伊太利文學教授に任ぜられき。同じき四十五年視力衰へたるを以て辭職しき。散文韻文の著多きが中にも、最も有名なるは

「神劇注解」(Comente Analitico sulla Divina Comedia)、「反法王思潮」(Sullo Sperito Anti-Papale) プラトンの戀愛」(Ministro dell'amor Platonico) の三篇なり。夫人四子を生む。何れも文壇に芳名あり。宋の三蘇、我國の頼家の如き、文筆の家として、和漢に有名なれど、書家詩人の一門に彬々たる所より見れば、ロセッチ一家は或は文晁の一家に似て、而も是よりも品位あり、學殖あり。文晁の父麓谷は、當時詩壇の放翁を以て目せられ、騷客の推重する所たり。詩集あり、麓谷集といふ。

心遊浮世外、齡出衆人先、一棹如江海、三杯到聖賢、漫吟難得句、拗體不成聯、究竟求何事、祇應稱醉仙。

の如き駘宕の致あり。其子文晁は、南北合法にして、狩野以外に一派を開き、文晁の弟元且、養子文一、長男文二、妻幹々、娘舜英、紅藍、何れも藝苑の名花なりき。而してロセッチ家は文晁一家よりも、更に文學的なり、詩的なり。

ガブリエルの長女マリア・フランセスカは、ダンテの片面影。(A Shadow of Dante) の著者なり。次はダンテ・ガブリエル・ロセッチにして、一八二八年五月十二日、倫敦市大ポートランド區、シャロット街二十三番地に生れき。初めの名はガブリエル・チャー

ル・ス・ダンテなり。次はウィリアム・ミケールとて詩人兼評家として有名なり。ロセッチ傳「ラファエル前派書簡集」及び其父の自傳等を出版せり。次は少妹にて名をクリスチナ・ジ・ジナと云ふ。才藻容姿双絶の嬌名あり。長兄ロセッチは、テニズンの作「モリト・ダ・アーサー」(Morte d'Arthur) に依りて、皇后の愁然として物思ひに惱める姿を描きし折、其モデルとなれる淑女なり。ガブリン・マーケット」(Gabriel Market)「王子の行進」(The Prince's Progress) 其他韻文に才女の面影を現せり。

ロセッチはポートランド區のフォーレー町の私立學校に學びて、一八三七年の秋、王立大學に入學し、少しく拉丁語、希臘語、獨逸語を研究しき。伊太利語は母國語なれば、頗る熟達し、又文才は幼少の時より煥發し、五歳にして既に「奴隸」と題する戯曲を作り、十三歳の折には「ロデック」と「ローサルバ」てふ荒唐なる散文の物語を作り、學校生活を終る頃には「史談サーヒュー・ゼ・ホルン」(Sir Hugh the Horn; a Legendary Tale) を草しき。一八四三年青春十五歳、此夏歸省して、樂しき家庭に三伏の炎暑をも忘れ、カーレ・アカデミーにて藝術の修養を始めき。此學校はブルームスベリーにあり。

ロセッチは母を愛すること甚しく、芝居を見ては其場面や人物のこと、動物を見れば其形状、行爲、音聲、色彩等を詩的なる筆致をもて描寫し、或は旅行せる折などは美しき花を送りて色香を忍ばず。ロセッチが少年時代の書翰は才藻、知見、性格の凡ならず、恰も群鷄中の一鶴の如く、超然として俗兒と異なるものあるとを示す。ロセッチ家は伊太利人なるを以て世々舊教を信奉したりしが、父のガブリエル・ロセッチは羅馬法王に反抗して信仰の自由を得しが、母は英國人にして新教徒なるを以て、ロセッチ兄弟は父の宗派に、姉妹は母の宗派に屬しき。これ當代の習慣なり。母は世を終るまで熱心なる新教徒なりしが、ロセッチは居常母の宗教を尊敬せり。此頃ロセッチに教會史編纂の企もありけらし、其才能の早熟驚くべきものあり。スコットのウエヅァリー物語、又は沙翁、バイロンの作などの繪どきをなして研究しつゝある間に其歳も暮れて、明くれば一八四四年ロセッチ一家はシャロット街三十八番地より、五十番地に移轉せり。ロセッチが骨髄の研究を終へて、解剖學的の繪畫を描かんなど云へるは、蓋し此頃の事なるべし。時にウエストミンスターに兩院議員の爲めに開會せる紋形展覽會あり、少年畫

家ロセッチも太く駭目せるらしく、熱心に「一美觀」など評したり。程經て小品會の會員となり、二小品を作為せり。一は「マイミオンの死」にして、他は主題をゴールドスマスの傑作「荒村行」より取りし「老兵士」となり。時に母は佛京巴里に漫遊して、旅寢の夢も冷かなりしに、ロセッチは一書を送りて、第三の圖案を告げ、最高の筆致にて二情人が河梁の情を表す別離の畫をものするよしを報せしかば、母も其熱心を喜びしとか。

斯くも一方に繪畫に熱心なりしと同時に、文學の研鑽をも怠らざりき。ロセッチの言に因れば、この頃彼は「ソルレンチン」(Sorrentine)といふ傳奇に筆を染めきと云へど、今傳はらず。翌年の終より一八四五年の始にかけて、ロセッチはポロロンにありき。不幸にして痘瘡に罹りしが幸にも菊露面たるを免れき。それより熱心にガヴァルニ、トオニ、ジハンノ、ナントイユ等の作を蒐集せり。當時彼が研究せるは、當代の佛國小説にして、其或る物は迷蒙、踈拙、猥褻、汚穢と稱せられき。されどもリメーの「コロバ」をば非常に賞揚して、英國古代の詩歌と極似せる二三の「コルシカ」物語ありと云へり。是等の或る物は、零碎取るにも足らぬものとはいへ、他日ロ

セッチが之を英譯せるより推すに、當時は深く趣味を感じたるが如し。ラヴェンティ
ン(La Venus d'Ile)は不思議なる物語の如きは、云ひ知らず美しさものとの評あ
り、又のローム・メモリー(Rose Mary)王の悲劇(The Kings Tragedy)「シスター・ヘルン」
(Sister Helen)の諸作を作るに至りしも全く此篇に負ふ所あり。
此頃より文學美術に大活動をするまで、ロセッチより母及び愛弟等に送りし書簡
なし、恐らくは家居團欒せるなるべし。一八四六年ロイヤルアカデミーの古典科
に入學を許され、職業的の方には出席せず、藝術的の方にのみ規則正しく出席し
き。毎朝町内の飲食店にて朝食を認め、六時には教場に出席せり。剩へ同時に作詩
を怠らず、穠鮮清雅なる運詞もて創作し、或は伊、獨の詩歌の翻譯をも試みき。これ
大に後年の作風に影響せるものなり、中には、ニール・ゲンリッド「ア・メモ・ハ
インリヒ」その他二三の作あり。其親友にして小説家たるホル・ケ・イン氏に送れ
る書に、幼にして勇氣に乏しく、校戲競争をなすを好まざりき。そは寛恕ならざる
が爲めにはあらず、資性主として利己的にして、又隱匿孤棲の習俗に因ると。孤棲
主義の人たるは言を待たざれど、其校戲競争を好まざりしは危きを好まざる内

氣なる性分に因ると辯解するものあり。ロセッチの一生を大觀すれば、彼は散策を
好みたれど、烈しき運動を好まず、されど思はざる危険に遭遇するも驚かず、恐れ
ず、沈勇を示したりといふ。

二 ラファエル前派

魏文帝嘗つて其賢弟陳思王曹植を縛して七步に詩を作らしめ、詩若し成らずん
ば、刻下に國法に従つて處斷すべしとぞ申されける。是に於て陳思王瞑目一番、忽
ち才藻は湧き來りて、雲の岫を出づるが如し。即ち口吟して曰く、
煮豆持作羹、漉豉以爲汁、其在釜底燃、豆在釜中泣、本是同根生、
相煎何太急。

と。王の文豪なりしのみならず、文章は不朽の盛事と道破せる文帝も、月明星稀、烏
鵲南飛と歌へる武帝其人も亦盛名あり。或は三蘇の如き、俊成、定家の如きを見れ
ば、天才には遺傳的なる、驕嶮獨角のなる、あり。而してロセッチの如きは、遺傳的
なるもの一人なり。

前にも陳べたる如く、ロセッチが父は錚々たる愛國の士なれば、朝夕出入する詩人、學者、愛國者も多かりき、ロセッチは幼より是等の名士に親炙して、談笑の間に其感化を受けたること少からず、父より伊語を學び、ダンテ並に其周圍の文藝を精研せり、これ纏てラファエル前派の搖籃なりしなり。

ローヤルアカデミーに在學中、彼はホルマン・ハント (Holman Hunt) サージン・ミル (Sir John Millis) トーマス・ウールナー (Thomas Woolner) 等と交り、互に得る所あり、當時ロセッチは文學美術の何れを専門とすべきかに就きて苦心せるらし、ハントがラファエル前派を論じたる一節に、或る時ロセッチはレー・ハントに一詩を送りて詩人として騷壇に立たんと思ふが如何、貴意を乞ふと云へるに對して、ハントは詩歌は冷血漢に擇まれては餘りにみじめなるものなりと答へたりといふ。

一八四八年の三月頃ロセッチはマードックス・ブラウンの畫室にて研究する事となり、

時ハントは其傑作「リエンツイ」を描き、ロセッチ其モデルとなる。圖はリエンツイが其弟の殺されたる時、死骸に對して復讐を誓ふ所なり。又ミレリの佳作「ロレンゾ」とイサベラにては、ロセッチは杯を舉げて痛飲せる客となり、弟のウィリアム・ロセッチは主人公となりぬ。是等青春の藝術家の會合は主として繪畫と詩歌とにありて、彼等の愛好する藝術を再興し、遂にセナークルを設けたり。此セナークルは羅馬人が晚餐會食の風より脱化せるものなれば、時に高歌放吟して無禮講的のものなりき。當に一種の俱樂部なり。同好の集會所なり。こはヴィクトル・ユーゴーを首領と仰ぎて、佛國のロマンチズムを形成せる、サント・ボワヴ、ド・シャムブ、ゴーチエリ等のセナークルを學びしなり。此セナークルにて各自の製作を陳列し、批評し、時に世の白眼を得しかど、なか／＼に興味ある業なりき。ラファエル前派の創立せられしは一八四八年の秋なり。此創立は青春客氣に逸る青年等が、櫻草頃の彌生の鳥の如く飛揚せんが爲めに工夫せるものにはあらず。些々たる動機よりして、藝苑の一春を領することとなりぬ。

詩才の富贍なるは、ロセッチの天賦なり。さればシャーロット町なる僑居にありては其

弟妹と共に韻箋 (Lous rimes) に因つて押韻を試み、又種々なる風格を作爲し、或はダンテ並に其周囲の詩人の佳作を翻譯せり、我妹が眠 (My Sister's Sleep) 成佛せる侍女 (The Blessed Danozel) 等を作り、運詞清艶、押韻典雅、彫蟲の技大に見るべきものあり。

十九世紀は藝苑に於て、實に第二の文藝復興をなしたにき。此復興に就て最も注意すべきは、ラファエル前派の運動なり。されば大小の論客之を品隲せるが中に、セオドル・ワットが大英百科全書中の論議は最も明晰なるものなり。ワット曰く、ラファエル前派の運動は「驚嘆の復古」(Renaissance of Wonder) なり。摸倣性散文的受納、擬古主義と家庭的唯物主義より「荒唐尊重、畏敬性に復古するものなり」と。ミルトン時代の特色は、文藝が政治と神學との包圍攻撃に會へることなるが、ブレック時代に至りて再び復活せり。ミルトンとブレックとの間、凡そ百五十年、詩歌は傳説を屬綴するに過ぎずなり。又形式の爲めに精神を犠牲に供して、荒唐神奇は公然蔑視せられき。よしや年所は短少なりとも、詩歌の精神は寂滅せるなり。此反動が應て巨浪となりて、滔天の凄じき勢を呈しぬ。

少くとも沙翁後の英文學に惡感化を及ぼしたるは佛文學なりき。エリザ朝及びチャコピン派の戯曲全盛の反動は街氣と自負とに陥りしを以て、復位期の文學は、藝地に佛國的色彩を帯ぶるに至れり。佛國に心醉せる國王の下に、佛國才子に對する義務なるかの如く、御用詩人を置きたるも怪むに足らず。這般の惡風去ると同時に、チートニク並にスカンディナヴィア文學の影響の現れたるは、十九世紀英文學の特徴なり。伊太利語に圓熟せるロセッチは亦少しく獨逸語の知識あり、彼は古代の歌謠又は傳奇に精通せり。これ其文學を豊富にする爲めなりといふ。ユーゴは其小説に社會の各方面の言語をば、其眞義を研究せずして使用せるを以て、字典の中に見出すべからざる言葉あり、これユーゴ一研究者の困難とする所なり。斯かる事のあるべしとは露知らず、ロセッチも英國博物館(博物館内に圖)にて武者物語を讀みたるは、蕩心駭魄の文字を詩中に撰定せんが爲めなりき。一詩を作爲する毎に、獺祭魚を學ぶは、詩人としては好ましからぬ業なれど、佳句強辭を得て風格を高尙にし、奇趣あらしむるは、沈涵汪洋ならしむるものにて、必ずしも博識を衒はんが爲めならじ。詩人の周匝なる用意と見るべし。ロセッチは、數語を發見せりと云

ひ且つ傳奇を讀みて非常に興を得、或る物は、非常に華麗なり」と公言しき。ロセッチは想像富麗又精緻而して各種の文學に精通しければ、各國文壇の名花を移植し、自家藥籠中のものとなすに長ず。彼は十九世紀の英詩人中バイロンに私淑し、又ブラウニングの影響をも受けたり。加ふるに一派の作物を熱心に鼓吹して、他人をして改宗隨喜せしむる魔力あり。人と爲り博覽強記、人の作物に對しては毫も猜疑の念なく、所説は大膽に忠實に、而も博愛的悅樂を有すると同時に鑑賞力もありき。

斯くの如く陳べ來れば、詩歌の方面にてはロセッチがラファエル前派の設立に偉大なる影響を與へたることを想ふべし。ホルマン・ハントが、セント・アグネスの夕」と題する一書は、ラファエル前派の出立點となりしは、ハントの談話又は其他の事實に徴して明白なり。ハントが古代伊太利の後素に私淑し、醇潔なる作品を得んとせること、又同人よりも前に其愛好せる畫家の眞摯を再生せんとせることも、亦全般に承認せられたり。後年彼等の有力なる左袒者なりしジョン・ラスキンが曰へるが如く、ラファエル前派の一目的は、近世科學の援助によりて、自然をば彼等の周

圍にあるが如くに描寫するにありしなり。而してラスキンが此批評はラファエル前派の一端を道破せるものなることを注意せざるべからず。

蓋しラファエル前派の目には二あり。而してワット及びラスキンは、各、一隅を見たるなり。即ち其社の目的の一は中古主義にして、他は自然主義に立脚せり。二者は到底調和すべき性質のものならじ。さればラファエル前派設立後三年にして、ロセッチは早くも其性情の赴くがまゝに荒唐を復古して遂に中古主義に歸れるなり。

三 ロセッチの詩

この傳の主とする所は、畫家としてのロセッチにあるを以て、詩人としてのロセッチに關しては、極めて短評を下して止まんのみ。

ロセッチ等が發行せる文藝雜誌「若芽」(Germ)は同好に配布せるものなるを以て、普く世人に知られざれど、逸品に乏しからず。此雜誌は、一八五〇年一月一日の發行にて、昇る旭日と共に文壇に初陣せるなり。三號にて「美術と詩歌」(Art and Poetry)と改題せり。自然に參して藝術の革新を計ると云ふが、此派の宣言なりしかど、中に

は自然主義に反對なるが多し。

ロセッチは此雜誌に十有二篇を記載しぬ。手と魂と (Hand and Soul) 我妹が眠 (My Sister's Sleep) 成佛せる侍女 (The Blessed Damozel) 絶壁より (From the Cliffs) 海の端 (Sea Limits) 「カリーホン (Carillon) 世の宵 (World Worth or Pax Vobis) 等は叙情詩にて「處女と聖兒と」 (A Virgin and Child) 「聖カザリンの結婚 (A Marriage of St. Katherine) 海神の踊 (A Dance of Nymphs) 「ヴェニス」の牧歌 (A Venetian Pastoral) 「海より救はれたるアングリカ (Anglica rescued from Sea) の二篇は十四行體の短詩なり。此雜誌は四年の四月廢刊せり。眞に三號雜誌なれども佳作逸品を満載せるを以て、倒れても亦光榮なきにあらず。左にロセッチの詩風の一斑を髣髴せしむる爲めに、成佛せる侍女」の説明を試むべし。

侍女 (Damozel) とは未婚の童女を指す。此處にては死して天國に行き、聖母に侍する童女を云ふ。舊は侍臣 (Baron) なども稱して、男性にも使用しけるが、ロセッチは後世の使用法に従ひて女性とせるなり。

この詩は死して天國にある處女が浮世の戀人を想うて、戀しの情に堪へ兼ねた

る意中を歌ひしものなり。侍女一日天城の金欄に倚りて、遠く下界を望む。彼女の眼は、夕暮の水の靜に且つ深きよりも深く、手には三枝の百合花を持ち、頭には七の星を翳して、身には中世風の袍を着けたり。飾なき衣にも、唯聖母メリーの賜ひたる白薔薇を着けて身の清淨を表したり。金髪花やかに背にかゝりて、阿郎の來るを一日千秋の思して待ち居たり。かゝなへば白雲に乗じて天國に昇りしより唯一日なるに、下界の郎は早や十年の心地にて儚がれ居るなり。郎が下界にありて、亡き戀人を慕ひ、木の葉のさやぎにも、梯子の音の響にも、戀人來ると怪むあたり、情人の意中を描いて遺憾なきに近し。其神秘的、中古的戀愛の高雅にして、音調の流麗なる大に玩味すべきものあり。全篇金玉の文字なるが、中にも第二句目、

Her hair that lay along her back

Was yellow like ripe corn.

背にかゝれる髪の毛は、

熟せし穀のそれに似て

黄色かりけり。

又第十句目の

The sun gone now; the midnoon

Was like a little feather

Fluttering for down the gulf; and now

She spok through the stiff weather.

Her voice was like the voice the stars

Had when they say together.

日は今入りぬ、

遠く下界を見渡せば

弓張月は羽毛のごと

遙に深淵に懸るなり。

斯かる景色を眺めつゝ

童女はみ空に獨語つ

聲は宛ら石上

昔の星の歌のごと。

原詩の聲調の婉轉たる、大珠小珠玉盤に落つとも評しつべきもの、ロセッチが青年時代の完璧なり。

ロセッチは沙翁、バイロン、スコット等の作を愛讀しき。されどこの詩には彼等の影響なし。彼は又キーツとダンテとをも研究せしかど、亦其面影もなし。こは正しく古代伊太利畫家の繪畫より得來りし着想なり。其戀愛の高潔なるは、一は家庭の感化にして、母及び妹の優美高潔なるより得たるものなるべし。成佛せる侍女一篇、天界を憶定して空前の佳作と云はる。ロセッチ傳の著者ナイト氏は、ダンテ風よりも寧ろミルトン振りなりと評せり。三枝の百合花と云ひ、七つの星と云ひ、聖母と云ひ、神祕の樹と云ふ、何れも中古の基督教的にて、他の宗教詩に見るべからざる言葉遣ひは、蓋し拉丁語の聖書より脱胎せるなり。彼は詩篇と哀歌とに負ふ所ありしなり。一言すればロセッチは、浮世の人にして、天界の風態を描けるものなり。我等は東洋の詩歌中に、此詩の如く神韻の縹緲たる作を見ず。古今女史中の小水人の作は、荒唐なれども天界を憶定せず。止むなくんば、それ樂天が「長恨歌」か臨功

の道士が、上は碧落より、下は黄泉を窮め、遂に海上に仙境あるを聞き、君主展轉の思を陳べしは、稍、この詩に似たり。されど樂天の「は東洋的荒唐にして、ロセッチのは中世基督教的なり。

ロセッチが作にて「巡禮」「我妹が眠」「妹エレン」「ローズメリー」「白船」「王の悲劇等何れも有名なり、又短詩にも捨て難き珠玉あり。

四 ラファエル前派の同人及びシンダール嬢とロセッチ

ラファエル前派の同人とも見るべき人々を擧ぐれば、

一、ミラー(John Millais) 彼は一八五五年まで運動を共にせり。尙云へば、同六年より七年にかけて順慶流に風雲を觀望し、其後は自由行動を取れり。ラファエル前派としての彼の作品には「ラスキンの肖像」「盲目の處女」「墳上の傷兒」「安息の谷等あり。

二、ハント(Holman Hunt) 彼は一派の勇將にして名畫「リエンツィ」の作家なり。後の附録に別傳あり。

三、ステューヴンス(E. G. Stephens) 彼は美術批評家として有名なり。當時はラファエル

前派の忠臣なりき。ハントの親友なり、其關係よりして贊成者となれり。彼初めは畫家たらんとせるも、其澎湃たる思想は、到底繪畫に表白し得べくもあらねば、遂に斷然刷毛を投じて麵麩を取りぬ。

四、デヴェレル(Walter Deverell) 彼はロセッチの雄辯、ハントの巧妙なる畫に誘引せられ、遂に熱心なる歸依者となれり。此少壯畫家の作は、率直にして而も自然には、極めて忠實なりしが、惜いかな天死せり。

五、コリンズ(Charles Allston Collins) 彼は一時ラファエル前派の藝風を愛慕せしが、決して社中に入らざりき。後文學に轉じて令名あり。

六、コリンソン(James Collinson) 彼は美術家にして又詩人なり。舊教を信奉して、其信心の熱度の上騰するや、黒染の衣を纏ふ身となれり。

七、ウーナルナ(Volner) 彼は彫刻家なり。若芽に寄稿し、さて後入社せり。ラファエル前派の影響は、彼が當時の詩歌以外に及ばざりしが、此派の人々と交情は親密なりき。

八、スミス(Bernhard Smith) 彼も亦彫刻家なり。此社中の人々と親交ありし人なる

が、一八五二年濠洲に渡り、遂に不歸の客となる。

九、ホーンス(Arthur Hughes) 彼も亦社中の人と親交ありき。

十、ベルスコット(W. Bell Scott) 彼はロセッチ並に同人と親しく、暖く而も變らぬ友垣を結びし一人なり。最初の展覧會以來、九年間絶えず出品せしが、社員にはあらず十一、バーン・ジョーンズ(Burn-Jones) 彼はロセッチと交るまでは畫家ならざりき。されどロセッチに感化せられて、初一念たる僧侶志望を捨て、遂に畫家となれり。

以上十有一人中、純然たる社員はハント、ロセッチ、ミレー、ウーヴルナリ、コーリンソン、ステュヴンスの六人、他にブラウン、ラスキン、ウィリアム・ロセッチ等あり。ウィリアム・ロセッチは今尚生存して社中の製作整理又は傳記編輯などに苦心す。著す所「ロセッチ傳」(Memoir of D. G. Rossetti) あり。一八九五年の作。ラスキン、ロセッチ、ラファエル前派主義「Ruskin; Rossetti; Pre-Raphaelitism」は一八九五年の著なり。「ガブリエル・ロセッチ傳」(G. Rossetti or A. verified autobiography) は、父が作れる韻文の自傳なり。一九〇一年一千部限出版。

此他モリス、スウィンバーンの二人も、後日に至りて此派の色彩を帯ぶるに至れ

り。ラファエル前派の流風餘韻は、今や再び復興せんとするものゝ如し。

一八五二年ロセッチが三十歳の折なりき。ラファエル前派の一人デヴェレールが母とともにオックスフォードなる、とある小間物屋に行きぬ。その店の仕事場にて、一人の若き娘等が仕事をなしつゝありしを見たり。中に一人際立ちて美しく、赤褐色の髪の毛房々として、如何にも見事なる娘あり。赤褐色は當時ラファエル前派の最も喜びし色彩なり。デヴェレールは一見大に喜び、直ちに母の耳に口を寄せて、「あの髪の毛赤き娘に、モデルになり呉るゝやう頼み給はれ」と云ひぬ。母は暫時躊躇らひしが、我子の頼を容れて、其娘に尋ねたり。此一小事件が、端なくも近代藝苑に、最も悲惨なる出来事を生ずるに至れり。

斯くて此美しき娘は、デヴェレールのモデルとなり、後デヴェレールの紹介にて、ロセッチのモデルとなりぬ。此娘は非國教派の一寺院に仕ふるオルガニストの子にて、その名をエリザベス・エリーノル・シダール(Miss Elizabeth Eleanor Siddal)と呼び、父と共にシニフィールドより、倫敦に轉居せるものなり。シダール嬢は天資伶俐、モデルとなりてより幾くもならざるに、早くも繪畫に對する非常なる天才を發揮せり。嬢は

ラファエル前派の諸士の知過を受けたるが中にも、ラスキンは有福の身なりしかば、シッダルが賤業に従事せるを憫み、之を救はんとの婆心より、而も彼女の自負心を害はざらんとの用意を以て、必ずロセッチの門下生たるべしと云ふ條件にさへ不服ならずば、彼女の作品は今後凡て購求すべしと申込みぬ。此申込には何等の不服なかりしのみか、寧ろ彼等が天來の福音として大に喜びしものなるべし。何とならばシッダル嬢に對するロセッチの興味は、早く既に成熟し、熱烈なる變愛とし居たればなり。斯くてロセッチは、シッダル嬢と婚約を結びぬ。左のラスキンの書簡は當時の消息を示すものなり。

君が近頃の御不幸疾くに御弔問差上べきを、此いと重き一事の御見舞も申上ざる儀に就ては、御驚き又御立腹ありしならん。されど疾くの御聞及びの如く或はさらでも速に聞き給ふべし。先週は心あわたりしく、日々の義務をさへ得果ざりしを、時々御芳書に接して、御安否やら、御事業やら御考やらを承るを得ば、眞に感謝の至りに御座候。出遊以前君が香容に接し難きを恐るれば、生は如何に悲めばとて——申すも如何はしけれど——君が妙技の練習に干渉し得ざるを眞に悲む者に候。君若し余をして時折君が思想の友人とし、君が目的に同情せしめ給はば、余の大幸何物か之に過ぎんや。

御参考の料になるまじとは思へど、余は拙著、悉皆御送附致すやう發兌の書林に命じたり。君の小

畫と交換するに足れりと思召さば——恰もグラウカスが其企腕と、ダイオムドが黃銅のとを交換せるが如くなし給はば——余はわが最も珍藏物の一となすべし。そは兎まれ、その他に小生の爲めに、ポイス氏の如き畫をば願はくば十五ギニアにて製作し給はれかし。斯くせば小生は御高作二幅を愛玩する譯に候。題目は何なりと適宜に御選び被下度候。御約束の猫眼石、本日午後通運にて御送附致候。そは美ならねど、時々御眼を休め給はば、おかしかるべく、その色には之ぞと云ふ特質はなきも、蟲眼鏡をば其紫端に据ゑ給はば、奇觀なるべくと存じ候。八月中浣頃、倫敦に歸り直ちに御門人の繪畫拜觀可致候。當所——テンマーク岡、チャムパーヴェルに宛て給ふ御玉章に「出先へ」と記入し給はば、正しく落手致すべく候。頓首再拜

一八五四年五月二日

ジェーラスキン

ロセッチ様 下

ラスキンとロセッチとの交遊は一八五三年に始まる。右の書中、君が近頃の御不幸とあるは、ロセッチの父の歿まかりし事を云ふ「御門人の繪畫」とあるは、即ちシッダル嬢其人を指すなり。

シッダルは頗る人目を牽く女性なりき。ロセッチが描きし所を見るに、彼女の顔はいなく聰明と鋭敏とを表現し、而も一味の哀調あり。されど彼女を知れる人々曰く、シッダル嬢は其處女期にありて、活潑とは云ふを得ざれど、而も快活にして陽氣なる女性なりきと。

二人が婚約前後の幸福は、他所の見る目も羨まじき風情なりき。彼等は共に書き共に読み、又共に詩文を草しなどして、楽しく暮しぬ。嬢はロセッチの薰陶に依つて、色彩に對する鑑賞力の恐るべく、布局に關する手腕の恐るべきものあり。加之、作詩の技を能くし、又之を鑑賞する力ありき。ロセッチも亦當時は美人シッダル嬢傍にありて、ふ一事に刺激せられ、且つ其熱烈なる初戀に鼓舞せられ、純潔完美なる幾篇かの傑作を出したり。こはロセッチの作物の内面を洞察すれば明かなり。されど二人の和合は久しからずして、別離の止むべからざるに至りぬ。其理由は明白ならざれど、案ずるにシッダル嬢は美人にして、而も快活なる女性なりしも、教育ある婦人にあらざりければ、嬢は自ら進んでロセッチの言にも耳傾けて、或る學校に入學することとなり、それ故二人は一時別離せりといふ。或は二人の間に不和の生じたる折、ラスキンが謀らひにて、一時歸國せしめしなりとも云ふ。そは兎もあれ、シッダル嬢は遂に倫敦を去つて、久しく歸來せざりしなり。シッダル嬢と別れて後、ロセッチは作詩を廢して、繪畫に全身を捧げたり。ロセッチ曰く、作詩は他の目的をば妨げ、生計を營むに苦痛なればなり。彼は三十八歳の折、他の

二三の青年畫家と共に、行きてオックスフォードの聯合討論の壁畫を描きぬ。其處にて一團の學生と知己となり、彼等の姓名は永くロセッチと共に藝林に傳唱せらる。即ちバーン・ジونس、スウィンバーン、ウィリアム・モリス及び後にモリスに嫁せる一女性なり。此女性こそシッダル嬢と同じく、其始めモデルを務めたるものにて、ロセッチの一生に最も純潔なる、最も永續せる感化を與へたるなれ。

さる程にシッダル嬢は再び倫敦に歸り、愈々ロセッチと結婚せるが、一友人は彼等の極めて幸福なりしを説き、特に後日夫婦の間に、忌しき風聞の傳へられたるを打消し、ロセッチが當時其妻に對する、周匝なる注意ほど、人目を惹きたるはなしと云へり。さもあれ、婚後幾程もなく、シッダル嬢即ち新夫人は神氣阻喪し、繪筆とる事もなくなり、家庭の和樂の大部分は失はるゝに至れり。彼女は健康を失し、神経痛を病み、其痛みを忘るゝ爲めに、遂に阿片丁幾を服し、後には多量に服用せり。

然るに新夫人は妊娠し、流産し、終に憂鬱症に陥りぬ。此頃ロセッチはブラック・フライアース・ブリッジに住居しき。一夜午後六時半、招きに應じて一輛の馬車を驅り、レストアース・コーアの料理店に友人と會食しぬ。シッダルは此夜、氣分勝れず、ストラ

ンドあたりまで来りし頃には、神経の痛み甚しく、ロセッチは切に歸宅を勧めしかど、聴かず、推して會食に列しき。宴半にして九時頃歸宅せしを以て、痛みの漸次猛烈となりしを知るべし。

歸宅後ロセッチは就寢の仕度をなし、る妻を後に残して、獨り散歩に出て、十一時半頃に歸宅すれば、室内は強烈なる阿片の臭氣に満ちたり。妻は呻きながら寢臺に横はりぬ。人事不省なり！蒼皇として醫を迎ふ。醫一見其睡眠劑の過用なるを知り、二三の醫師を増聘し、種々に介抱せしが、死生の間に、彷徨すること數時、遂に翌朝六時半頃に永眠せり。

斯くて七年の歳月は過去りぬ。其間ロセッチは友人の詩を見論を聞き、名聲の頓に揚れる者あるを見るに附けて、往年一朝にして放擲し去りし詩人の生活に戻り詩に専心向上せんとするの念勃然として起りぬ。其妻を葬るに當りて、潜々たる涙と共に、親ら棺中に藏めたりし詩集を回顧せざるを得ず。蓋し棺中の詩は其完美の作にして、残れるは未定稿なるが多ければなり。茲にロセッチは沈思の後棺中の詩を取出さんと決意し、官許を得て之を墓中に瘞むるに至りて、悲痛、悔恨、懺悔

の情憫むべきものあり。彼が金玉の詩歌を墓中に埋没せりとして、シッダル何ぞ喜ばん。寧ろ之を天下に發表し、芳名を千歳に傳へて青史を照すこそ、人生及び神明に對する義務ならめ。

詩集の發掘は、友人等の發起にて、ロセッチの同意を得、遂に舉行せられぬ。發掘後十二年にして、ロセッチがホール・ケーンに物語りし所に依れば、發掘するには官の認可を得、ハイゲート墓地なるシッダルの墓は、埋葬後七年半にして、或る夜竊に發掘せられ、燈火墓中を照して、柩は地上に引上げられぬ。而して埋められたる詩集は取出されぬ。芳魂空しく去れるシッダルの俤は生けるが如き様なり。詩集を取り上げ見れば、幾筋の美しき金髮纏ひ着きぬと。これロセッチがシッダルの頭髮中に、詩集を入れしを以てなり。

發掘中ロセッチは主任者たる友人の家に獨座し、事の餘りに悲哀なるに驚き、或は神意を瀆すの怖を抱きて胸安からず、夜半過ぐる頃、友人等歸り來りて、事の滞りなく了りしを告ぐるまで、肅然悄然として冥想沈思に耽りつゝありきと。

ロセッチには傳ふべき逸話も多けれど、今之を略す。一八八二年四月九日に易筮す。

ランドリア自撰の碑文は、其第一句と其後半を去れば、全くロセッチの爲めに作れるが如し。

我は何人とも争はず、そは何人も争ふ價なければなり。

我は自然を愛し、次いで藝術を愛す。

我は人生の火の前に兩手を暖めぬ。

情熱衰へて我は將に死なんとす。

吾人は既にロセッチを傳し終れり。以下少しく彼の繪畫を論ぜしめよ。

五 ラファエル前派の繪畫觀

十九世紀前半に於ける英國の畫界は、萎靡衰頹の極點に達したり。かのレーノルズの如き、ゲイムズボローの如き、若くは其後繼者の如き、或は其同時代の畫家の如き、何れも熱心なる自然の研究者なりき。彼等は技巧に耽溺して、其描寫の均衡と調和とを過重したりとは云へ、尙その眞を害せざりき。其繪畫は色彩の調和と布局の完成と、描寫の正確とを保ち、其眞摯なる畫風と、沈靜なる描寫とは、尤も能

く自然の寫實に適當せるものなりき。されど是等先人の美的信條と、繪畫の眞精神とは、十九世紀前半に於ける繼承派の閑却曲解する所となり、纖弱にして無意味なる空想に奔せ、奇怪なる形式に走り、漫りに空想と智力とを偏愛し、遂に不自然なる抽象的描寫に陥るに至れり。斯くの如く英吉利の畫界は、漸次邪道に馳せつゝあれば、此不自然なる俗趣味を打破せざれば、新藝術の曙光は得て望むべからざるなり。此傾向を看破せるは、ラスキンにして、彼はラファエル前派の同人の結ばるゝ五年以前に、其著美術講話に於て、自然に則れと喝破して、自然主義を鼓吹しき。

此時に當りて、アントワーブ、羅馬及び巴里に遊學し、胸に輝ける希望を持ち、孤影悄然として故郷英吉利に歸り來れる一個の青年畫家あり、ラファエル前派の父と呼ばれし、ハドクスブラウン、即ち其人なり。彼は故國に歸りて故國の畫壇と戦ひ、幾度か展覽會に出品したれども、常に反對派の嘲笑と輕侮とに逢ひ、時としては陳列せらるゝことなく、制衡器とせられ、或は額縁なくして陳列せられぬ。されば、さしにも堅忍なるブラウンも、遂には出品を控へ、時機の至るを待つに至れり。

然るに英國國會議事堂壁面裝飾用の下畫は、競技法にて募集せられたる折ダラ
ウン當選し、此當選評判となりて遂にロセッチと相知るに至り、此に沈滞せる英吉
利畫界刷新の萌芽は萌えて出ぬ。

當時ロセッチの親友にホルマン・ハントあり、ハントの友にジョン・エベレット・ミレ
ー、共にロイヤルアカデミーの同窓にして、繪畫の見解を等うし互に相往來して
研鑽を共にしき。ハントとミレーとは早くより其繪畫を展覽して、社會の好評を
博し、技巧の點にありては、遂にロセッチを凌駕せり。さればハントの精緻なる描寫
の實例と、ミレーの華麗にして技能の圓熟せるとは、ブラウンの教訓及び其眞摯
なる自然主義と相待つて、ロセッチの畫風を涵養大成するに與つて力あり。

是等有爲の青年が奇抜なる着眼を得、嶄新なる方針を選びて、自家の主張を立す
るに至りしは、洵に偶然の事に屬す。一八四八年八月四日の夜、三人の朋友はミレ
ーの家に相會して古今の美術を品評せり。此時席上偶、ラシニオの摸寫に係る伊
太利ピザの名利、カンボサントの壁畫帖あり、抑、此壁畫は伊太利の古大家、ベノゾ
ゴッゾリ、オーカニア、ピサネロ、アレチノオ等、即ち文藝復興期の初めに於けるフイ

レンツ派諸大家の手に成り、古雅の中に眞摯純朴の氣を藏し、深く當年の研究精
神に充ち、精緻なる觀察に富み、技巧未だ熟せずと雖、自然に對する忠實なる情趣
を表現せり。彼等は此繪畫が、永劫不滅の眞を保有し、衰頹の影を留めざるを認め
奮然として自覺し、畫運復活の途は唯中世紀に於けるラファエル以前の古大家が
精研詳察の精神に則り、忠實なる畫風と純潔古朴なる描寫とを學び、以て不朽な
る畫風を起すにありとし、茲に新主張の大方針を認め、ラファエル前派同胞盟社 P.
R. B. の組織を見るに至れり。ラファエル前派の主張は、要するにラキスンの云へる
が如く、十三四世紀の人々の熱心を以て、近世科學の援助によりて、彼等の周圍に
見るが如き自然を描寫するにありしなり。

六 ロセッチの繪畫を論ず

父より南歐伊太利の系統を受け、母よりサクソンの血を繼ぎたるロセッチは多數
の批評家の一致するが如く、最も詩的傾向を有する畫家にして、又同時に最も畫
的傾向を有する詩人なりき。彼は性頗る恬淡不羈、想像豊かにして、情熱燃ゆるが

如く情と美との國、詩と畫との國に常住して、憧憬と渴仰とに耽り、豊麗なる自然の美に打たれては、没我の境に逍遙して、無限の情感に馳せ、幽玄なる宇宙の神秘に接しては、銷魂失神して、絶對靈美の裏に融合する彼は、特に人間美、肉體美に關する驚くべき多感の性質を有したりき。婦人の容貌に現れたる玄妙なる神秘の影と肉體の上に現れたる、艶麗なる色と、其女性美の謳歌と、神秘の愛とは、彼が中心性格より來れり。さればラ・メキシは嘗つて其著に論じて曰く、ロセッチは、眞に英國人士にあらずして、倫敦イン・ハアノオ中に呵責せられたる大伊太利人なりと。蓋し十九世紀の英國に於ける伊太利人士の好典型にして、其感情的、空想的、神秘的素質は、彼が夢幻の生涯を貫き、繪を飾り、詩を彩り、茲にロマンチックの詩人として、畫家として、永く芳名を竹帛に垂るゝに至りしなり。

ロセッチが文藝に對する見解は、比較的狹隘にして、深く古今の文學美術を咀嚼し、盡したりと云ふにあらねど、天才卓絶の人にして、又非凡なる創作の才能を有し、奇警なる着眼と優れたる先見とを以て世人を指導し、一世を啓發せし所甚だ多く、古より埋没し來れるアーサー王朝の事蹟を復活し來り、中世紀に於ける武士

道の物語を一般的となし、通俗的となし、キーツの世人より閑却せられたるを推輓し、鼓吹し、文學に美術に多大なる効果を與へ、オーマーのフィッツ・ジェラルト譯を書店に漁りては、四句解の詩形を流布せしめ、ウィリアム・モリスに對しては、裝飾に關して大なる感化を與へ、且つ骨董に關する氏が性癖は遂に近世に於ける英國人の大なる趣味を誘起するに至れり。彼は實に驚くべき天才を備へたりし人なりき。或る評家の如きは、ロセッチが英吉利在來の繪畫の踏襲主義に反對して、ラファエル前派の盟社を起し、畫道革新の大旗幟を翻すに至りしは、これ沈滯を排し、清新を喜びたりし彼が反撥的素質に起因するものなりとなせしは、必ずしも失當の言ならじ。彼は又透徹せる眼光と創作の才能との外に、卓絶せる滑稽談話の資質あり。元よりロセッチの滑稽は、落想巧妙にして、奇想天外より落つる底のものにはあらねど、時としては無邪氣にして、可笑的素質を備へ、時としては辛辣なる諷刺的要素を交へたり。日常其繪畫の製作に従事し、又詩篇の推敲に耽る時に當りては、驚くべき狂熱と威嚴とを備へ、人をして容易に昵近ならしめざりしが、一度其勝れたる滑稽と談話とを弄ぶに至りては、洒落たる其風懷は座に人をして

呢れしむべく親しましむべきもの甚だ多かりき。
 ロセッチの宗教に關する見解の果して如何なるものなりしかは、吾人甚だ詳説する事能はず。抑、ロセッチの家は古より偉大なる信仰の念に富み、熱心なる基督教信者にして、其母及び二人の姉妹に於て、敬虔の念殊に勝れたるを見る。是より推して吾人はロセッチの幼年時代の家庭に於ける宗教的感化の如何なりしかを想像するに難からず。されど彼の素質は年を経るに順ひて、次第に其傾向を高め來れり。生來美術と文學とに多大の興味を有したりし彼は、ホルマン・ハントが聖書を以て宇宙の大經典となし、宗教的信念を以て之を尊重畏敬したりしとは、大に其趣を異にし、之を世界の偉大なる文學として愛讀推重したりきといふ。さればハントの繪畫が純宗教的にして教訓を帯び信仰を示すに反して、ロセッチが基督を描き宗教上の事實を畫題となすに當つても、宗教的、教訓的と云はんより、寧ろ文學的、詩歌的なりと呼べる。所以又茲に存す。彼は夙に宗教に關しては自由信仰の意志を存し、不可知の見地に立ち、且つ多少の迷信的資格を備へたりと云ふべく、其晩年に至りては、神と人との間に於ける靈の交通を認め、神及び

天國の存在を確信するに至れり。

抑、ロセッチが幼年の製作期は、已に述べたるが如く、マドックヌ・ブラウンの偉大なる感化の下に、ラファエル前派の主張を確立し、伊太利復興期に於けるラファエル以前の繪畫の復興を計り、以て英吉利畫界の大革新を企圖したりし時代にして、隨つて、其繪畫もラファエル前派の新主張に則り、精研細思驚くべき努力と苦心とを以て自然の活寫に勉め、如何にせば最美なる繪畫を描き得べきかの研究を捨て、如何にせば最真なる繪畫を描き得べきかの研究に熱中して、専ら自然の實寫に盡粹したりし時代なりき。詳言すれば初期の製作中、既に來るべき中年以後の唯美的、傳奇的繪畫も、幽玄神秘なる作風も、皆此時代に胚胎せられたるものにして、彼は一八五二年の頃、其畫題を古今の詩篇より取り、ダンテに、シェイクスピアに、キーツに、モリスに、ブラウンに、其材を仰ぐに至りてより以來、中年時代に於ける詩的、唯美的繪畫に移る傾向殊に著しくなり、一八五四年の作なる「ハウンド」に於けるが如く、其外形なる描寫に於ては、驚くべき努力と忍耐とを以て、自然の實寫に勉め、市場に賣らむとて、車上に繋がれたる牡牛の如きは、ブラウンが言へるが

如く、其毛は殆ど一本々々に描かれたるものにして、驚くべき彼が當年の自然研究の好例證を示せり。然れども其繪畫の内容に至りては、純ロマンチックの製作なりと云ふを得べく、彼が詩的、傳奇的の特徴は、之より以後益々其傾向を高むるに至れり。其中年以後殊に晩年に於ける神秘的傾向の淵源を示せる書は早く既に一八五一年の「自己遭遇」(How they met themselves)と稱する書に現れたり。

七、ロマンチストとしてのロセッチ

斯くの如く論證し來ればロセッチは早く一八五二年の頃より嚴密なる意義に於けるラフ、エル前派の立場を去りて、他の新しき傾向を示し、十九世紀の時代精神に反映して、中古主義の大潮流に没入し、同志の慘憺たる經營の下に成りたる主義を捨て、遂に自家特得の性格を發揮するに至れり。此問題に關しては、吾人は多少の論證を要するものあれば、後節に至りて論述する所あるべく、茲に吾人は論歩を進めて直ちにロセッチが繪畫を品騰せんとす。

初年の製作時代に於けるロセッチの繪畫は、殆ど幾多の小幀なる水彩畫を以て充

たされたりと云ふべく、皆其豊饒なる才藻と、曲麗なる色彩との表現なり。神聖なる家族中のバルソバ、バオロとフランチスカ、ピヤトリウス年忌に於けるダンテ、リストの前なる鐘樓、ガラハルド卿、ルクレリア、ボルジアの如きは、其主なるものにして、此時代に於ける彼の製作は、人物殊に其顔面の描寫に於て、未だ中年以後の作畫に於けるが如き、甚しきロセッチの特徴傾向を認むべきものなく、其唇は尋常に、其頸部及び手掌の描寫は、後年に於けるが如く甚しき誇大の跡を認めず、且つ其感覺的神秘的表彰に於ては、後年の製作に比して著しき軒輕を示せり。要するにロセッチが此期の作畫の多くは戯曲的性質を帯び、幾多の人物と許多の補助物とを借り來りて、畫幀中に現れたる事件を物語らむと務め、一面には衣服家具その他の器物を自己の新創案を以て淨寫することを喜び、他面には鳩、鶴、百合、薔薇等の類を以て象徴の意味を表現せむと勉めたり。一八五八年の作なる「ハムレットとオフィリア」の補助物として描かれたる奇異にして且つ華麗なる椅子と其後景とは、前者の最も好き例證にして、後者の適例としては別に好箇の繪畫あり。即ち彼が處女作「聖母マリアの幼時」の如き、一八五〇年の作なる「愛胎告示」の

繪畫の如きは其最も著しきものなり。彼は又其幼年の描寫に於ては空間及び濃淡の配合に困却して、只管に艷美なる色彩の研究に盡粹せり。されば此期に於ける幾多の水彩畫の小幀は新玉の如く美しく艷かににして、見る人の目を眩惑せしめ、失神せしめ、恍惚たらしめんとするものなれども、時としてはブロークンカラを點じて全く色彩の調和を閑却せるものもなきにあらず。

ロセッチが中年時代の製作は、初年の製作が重に水彩顔料を以て描かれたるに反して、此期の製作は油繪具を以て描かれしものにして、彼は初年の作畫に於けるが如き戯曲的テーマを取り來りて、畫面の上に物語を語ることを止め、今や唯一箇の婦人の肖像、殊に其半身像を描き、抽象的概念の表象として、又智力的概念の擬人的表象として、茲に其補助物を用ひ、或は彼の空想が創出せる豊艶なる後景を以て飾られたる美人を描き、神秘的魔力に富み、肉體的感覺的誘惑に充ち填ちたる婦人の容貌を寫すに至れり。アーサー・ヘル女史が、

彼が畫中の人物の相貌は、悲哀と疲勞と、抽象的表情とを有し、その人物の住する空氣は頗る重苦しくして、殆ど壓迫するが如く、神秘、多感、耽溺、且つ稀に心靈

的なる所あるは、其獨得の技能にして他に比類なく、又同時代の人の作中にも匹儔を見出すこと能はず。

と云へるは、誠にその當を得たる言にして、その畫中の人物の容貌が、皆神經的にして、多感、深く沈思に耽る趣あるは、これ實にラファエル以前の古大家の作に現れたる特色に一致するものにして、フアンペリコ、サントロ・ボッチェリ等、その他皆此眼光沈み、頬肉落ちたる神經的容貌に、中世紀的夢想の名残を止めざるはなし。歡樂の中に来るべき悲哀の觀念を豫想し餘哀を示す。ボッチェリの「春の如き畫を中世趣味のロセッチが渾成し來りたるは當然の事とす。此婦人のモデルに就て、ロセッチに一場の戀物語ありしは前に述べたるが如し。

ロセッチが繪畫の圓熟期に於ける好標本は、一八七四年の作なる「ゼピラッド」(The Beloved)にして、ロセッチ自らも、寶石の如く美しく描きたりと稱し、且つ彼が多年の親友たりしステイヴンも此作を評して、

「ゼピラッド」は一八六三年より描き始められたるものにして、畫幀に表れたる典麗と色彩と感情とを以てせば、之を十六世紀に於けるヴェニス派古大家の神

品と比較するも毫も遜色なし。と賞讃したり。而して此書題はソロモンの歌より取り、結婚席に列せんとするカントクテ (Canticles) の花嫁なり。畫の中央にはロセッチにして初めて想像し得るが如き華麗なる衣服と飾りとを附けたる盛装せる美人あり。其周圍に立てる黒髪を有する四人の婦女の顔面は枠となり後景となりて花嫁の顔面の周圍を圍み、其前方にありて美麗なる寶石の首輪及び頭環を着けたる黒人の少女は、薔薇の花瓶を提げて、茲に前者に對する好箇の對照を示せり。而して此畫幀は婦人の等身大なる半身像にして、色彩勝れて美しく、花嫁の上表は鮮麗なる綠に艶美なる花卉を以て縫箔せられたる長袖の深紅と黄金色とを以て描かれしものにて、實にロセッチが後年の傑作「プロセルピン」の如きを除きては、他に其類例を見ず。彼が圓熟せる技能と卓絶せる詩的才能とは、此繪畫に於て融和せり。其色彩調色の艶麗なるヴェニス派の古大家チチアノ、チントレット等の壘を摩し、優に是等先人の傑作と比肩するに足るものにて、或る評家の如きは英國の畫界に於けるロセッチの「ゼ・ピラヴド」は、スペインサーの典麗にして悲痛なるエビサラミオンの英國詩壇に

於けると同一なる地位を占むるものにて、前者は後者の如く甚しく狂熱的ならずとせば、華麗なる表出に於て、甚しく後者に傑出せりと云へり。以て其畫品を知るに足る。中年の佳作として記憶すべきは、「モンナ・ヴァンナ」(Monna Vanna, 一八六四年)「モンナ・ローザ」(Monna Rose, 一八六七年)「ダンテの夢」(Dante's Dream, 一八七三年)其他數葉あり。

ロセッチが晩年の製作期に至りて、彼が繪畫は漸次退歩の傾向著しくなり來り、中年時代にありて一世を驚倒したりし華麗なる色彩も、今や淪落頹廢の痕を止め、其頸部及び口唇の描寫は益増大せられて、甚しき不自然に陥り、癖を保持して頑堅生硬の弊に染み、著しく神祕的、肉感的の傾向を來せり。されど「ラベラ・マンヌ」(La Bella Mans)「成佛せる侍女」(The Blessed Danozel)の如きは、彼一流の癖なき佳作なれど、之を大觀ずれば、其晩年は萎靡不振たるを免れず。これ何人も免れざる命數なり。此次に至つてロセッチは太く健康を失したりき。蓋し一八七七年に於ける其大病後に於ける衰弱と、殆ど視力を失へる眼疾との結果に因る。而して此弊風短所を現したるは、一八八〇年の製作なる「ピアトリオスの敬禮」及び一八八一年の作

「ラ・ピエ」にして、晦澁奇性、中年時代の艶美は見るべからずして、肉感的にして其眼は狂者の夫れの如く、唇は大きく頸部の描寫は甚しく不自然に陥れり。要するにロセッチの畫は、着想嶄新、色彩華麗、構圖豊富にして、ロマンチック、激情多感の傾向殊に著しく、神秘幽玄の韻致は晩年の製作に現れたり。彼は實に自然美の切なる愛慕者にして、同時に之が熱心なる謳歌者なり。詩人ウィリアム・モリスが閑雅優美なる天地の風物を愛し、ブラウニングが人生に於ける動機の紛亂綱繆を好み、畫伯ホルマン・ハントが神の崇高と森嚴とを喜びたりしが如く、ロセッチは莊重神秘にして而も華麗なる婦人の顔面美に多大の興味を感じ、其他の自然及び天地の美に至りては、唯地上に於ける至美至純にして、最も神性に富める人間美の好補助物として之を愛用したりしなり。されど其肉體美と顔面美とは彼が要求の究極にあらずして、其内部に深く包藏せられたる精神美と神秘の愛とは、其生涯を貫きたる作品の精神にして、優しき愛憐の情と不可知の神秘の色と、多感的沈思的睥視とは、婦人の清く涼しき眼の裡に活躍せり。ゼ・ビラッドの花嫁の清明透徹せる緑の眼と、プロセルピンのアスタテの面に燃ゆる熱烈なる神秘の

色を帯びたる朧げなる眼とは、ロセッチの獨壇場なりと云ふべし。

八 調色家としてのロセッチ

ロセッチは又色彩に關して傑出せる技能を有したり。此點に於ては、彼は優に調色家たるを得べし。英國在來の調色法は、十八世紀古大家の遺法に則りて、主として煙脂色、土色、雫色等の顔料を用ひ、稀に明暗陰影を描くに、極めて少量の純粹なる綠華麗なる黄金色を用ひしものにして、コンステイブル、ターナーの如き、大家輩出するに至つて、漸く原色及び原色に近き、華かなる色を用ひ始めたり。而してラスキンは古畫の陳套なる顔料即ち土色又は煙脂色の着色を攻撃し、雫色は着色上、虚偽の甚しきものにて、ピチウムを用ふるは、即ち自然を黒の眼鏡を通じて見たるものなりと罵倒し、以て鮮麗なる色彩を鼓吹し、明暗と陰影とに注意すべき事を論ぜり。ロセッチも亦ターナー、ブラウン、ラスキンの言論作畫に見、太陽の七原色に近き純粹なる顔料のみを取りて、熱烈華麗なる色彩を採用せり。ロセッチ曰く、「余が嗜好に適する繪具は、第一、鮮綠、第二、黃、第三、一種の灰色、第四、銅青色、第五、赤褐

色第六、深紅にして、其他の色に至りては、其調和及び色の關係の如何に依りて、一種の面白味を生ずるものなりと。斯くしてロセッチはコンステイブル、ターナー等と共に、着色に關する一生面を開きたり。吾人は佛蘭西に於ける印象派の起源が大に英吉利畫家の色彩に負ふ所あるを見る。即ちウインフィールド、デーハーストが云へる如く、一八七〇年以前モチー、ピッサロ、及びシスレー等の繪畫を見るに、彼等が倫敦を訪はざる以前にありては、他の一般の佛國畫家と同じく、主としてコロアの畫風に從ひ、尚エドワール、マチー、ブーダン、及びクールベ等の調色と同じく、暗色の調子を以て描きたり。然るに彼等の倫敦に着するや、更に新天地を發見せり。ピッサロの手簡に曰く、其間屢、博物館に入出せり。而してターナー、コンステイブルの油繪及び水彩畫は、特に余等に感化を與へたり。何とならば彼等の繪は余等の空氣と光線並に之に關する種々の現象を研究する事業に裨益する所最も多かりしが故なり。近世の畫家にありては、ワッソ及びロセッチ等は最も余等に利益を與へたりと。ロセッチが愛用せる顏料と、一八七四年以後、モチー、ピッサロ、ルーアール等の印象派の畫家の用ひたる繪具の黄橙、黄、朱、紅、紫、藍、綠等に限られたる。

見ば、兩者の關係は思ひ半に過ぐるものあらん。

九 結論

詩人キーツは言はずや、ラファエル以前の繪畫は、以後の繪畫に優れりと。其故如何。案ふに古の畫は全く宗教的にして、近世の繪畫は犯聖的なり。何をか古の繪畫が宗教的なりと云ふ。曰く、古の作家は其一生を神に獻げ、聖經を書し、神の爲めに描きぬ。されば宗教を第一として、快樂と奢侈とは第二たり。前者は敬神的にして、後者は快樂的なり。吾人はフラアンゼリコが基督の一生を描き、ゴッソーがアブラハムの事蹟を寫し、ギランダジが處女を寫し、ジッソーが聖フランシスを描きしを、近世の畫家が裸體畫に恍惚となりて、瀟洒たる青年と妖婉なる美人とを描くに比し、若くは聖族と稱するものを描くに見て、新趣味の變遷に驚く。吾人は古代の繪畫を以て、敬神的、道德的、教訓的なりと云ふ。

蓋しラファエルが二十五歳の春、ヴァチカノ(Vaticano)の宮殿に描ける壁畫は、純宗教畫と近世的繪畫との中間なる唯美主義の繪畫なりしかば、唯美的なる近世畫の興

起を促せ、詳説すればラファエルの此繪畫は宗教畫の終にして、又犯聖畫の初なり。さればラファエル前派の同人はラファエル以前の古大家を理想として、第一、至純なる思想を以て描寫すべきこと、第二、如何にして自然を表現すべきかを知らんが爲めは深き注意を以て自然を研究すべき事、第三、前代の技術に於ける因循なる誇張なる、將た耳學問たる部分を除去去りて、其眞實なる將た感動すべき點に同情すべき事、第四、最も肝要なるは全然佳良なる繪畫及び彫像を出すにあり。斯くの如く論證し來れば、何人と雖、ロセッチの主張とその繪畫との間に、甚しき矛盾の存するものあるを認めむ。彼は古代の畫家に於けるが如く、純朴高雅なる精神を以て傑出せる繪畫を出し、眞理を主として、近世繪畫の特徴たる美及び快樂の追求を輕視すべしとせり。されどロセッチの繪畫は寧ろ唯美主義、藝術主義の爲めに描かれたり。其中年以後の作を見るもの誰か彼の製作を以て唯美的ならずと云はんや、リリスの肉感的治容と、ゼビラダとの妖婉なる顔面美とは、彼が自然主義的特徴を説明して餘あるべし。これ豈に近世唯美主義の生ける例證にあらずや。彼は又右代の畫家の如く、宗教及び基督の事蹟を畫題とせり。されど其之

を描くや、宗教的、道德的なりと云はんよりも、寧ろ詩的、傳奇的なり。中世的と云はんよりも、寧ろ近世的なり。聖母マリアの幼時、「受胎告示」の如き少壯期の作にありては、實にラファエル前派の主張畫なれど、其他の作品にありては、唯美主義にして自然主義に流れたるもの多し。ラスキン曰く、吾人が知識の及ぶ範圍を以てせば、ロセッチの名は、近世藝術の精神を發揮し變更したりし人名簿中に於て、第一位に置かるべきものにして、彼は繪畫の絶對的藝能を發揮し、其特性を變更せりと。知己の言と云ふべし。ロセッチの如きは、瀕死の英國畫壇を救濟せる一大國手と云ふべし。而して終始一貫、よく其主義を固守し奮闘せるは、ホルマン・ハント其人なり。ロセッチを傳ふるものは、又必ずハントを傳へざるべからず。

附

ハント

ハント(William Holman Hunt)一八五七年—一九一〇年)は一八三七年四月二日倫敦に生る。父の祖先はチャールズ一世に抗して和蘭に赴き、其處にて新教軍の爲めに戦ひたることあり。戦終りてウィリアム三世と共に歸朝したりしが、爲めに家財を

蕩盡して恢復すること能はざる否運に沈淪せり。ハントの父は市の倉庫の管理人なりしが、天資趣味深く、美術を愛好し、讀書に耽溺し、其子に教ふるに、美術は愛玩すべく、職業とすべからざるを以てせり。齡十二と半の星霜を経るや、彼は市役所の小吏となる。されど閑暇ある毎に讀書、圖畫、繪畫に耽り、齡十六にして、意を決して美術家となる。十八歳の頃彼はローヤルアカデミーに入學し、此處にて斷金の友ミレー(John Everett Millais)に遭逢せり。ミレー時に年十五。一八四六年、ハントは其處女作「聴け！」(Hark!)と題する者を出品し、翌年には「ドクトル・ロッチェクリフ」(Dr. Rochecliff performing Divine Service in the Cottage of Joceline Joliffe at Woodstock)を出品し、四八年には「メアデリンとボルフィリオとの駈落」と題するを公にせり。こはキーツが詩、セント・アグネスの連夜より着想を得たる者なり。此年は即ち彼がロセッチ及びミレー等とラファエル前派の同胞盟社を結びて、藝林に一新運動を開始せる時なり。此派の主張は前にも云へるが如く、精密に自然を摸倣し、以て藝術家たる眞摯なる態度を持し、兼ねて十五六世紀の古大家に師事するにあり。翌年のアカデミーに出陳せるミレーが「イサベラ」(Isabella)、ハントが「リエンチ幼弟の死に臨ん

て正義を持するを誓ふ圖」(Rienzi vowing to obtain Justice for the Death of his Young Brother)の如きは、此派の主張を實現せる作なり。ハントの此作は千五十圓にてギョッポンスの購ふ所となる。次て一八五〇年には「改宗せる英國の家族」(A Converted English Family Sheltering a Christian Missionary from the Persecution at the Druids)を描く。こは千五百圓にてオクスフォードのクラレンドン・プレスの人コムベーに購はる。而して一八五一年には「ワレンチン」(Valentine protecting Sylvia from Proteus)を描きぬ。此製作のアカデミーに出品せらるゝや、當代鑑賞家の巨人として評壇の主權を掌握せるラスキンは、ロンドン・タイムスに公開狀を送りて大に之を賞揚せり。作は「ヴェロナの二紳士」より畫題を得來りたるものなり。ラスキン曰く、服装と細目との描寫は、アルバート・デュレル以來、未だ嘗つて見ざる所なりと。この作はリヴァープールより賞牌を得、彼が少壯時代の一作と稱せらるゝに至れり。一八五二年には「雇はれたる牧者」(A Hiring Shepherd)を公にせり。この畫は麗かなる日に、英國の所謂「雇はれたる」羊飼が、牧場にて美しき村少女と戯れ、羊が殺物に亂入する圖なり。「タロイデオとイサベラ」(Claudio and Isabella)は沙翁が「メーシミア・ファン・メーシミア」より

落想を得たるものにて、同じ年の製作なり。又「ヘスチング近傍の廢趾」(Downs near Hasting)の華麗なる作も同年の作にて、目錄にては、我英國の海岸(Our English Coasts)と稱せらる。迷羊(Strayed Sheep)は同五三年に出づ。この三作にてハントは五百圓の賞金を得たり。而してリヴァプール及び、パーミンガムにては六百圓を得たり。されど一八五一年、その繪畫を賣ることの困難なるを見るや、彼は繪筆を折つて斷然外國に移住せんとせり。蓋し文學者にもあれ、美術家にもあれ、貧困と戦つて其天職に従ふや、必ず一度は此生活難に遭逢す。此難關を超えて頭角を社會に顯すや、甘んじて天職に従事するを得。古人曰く、貧賤は汝を玉にすと。斯るが故に名匠は身の貧しきを憂へずして、落想の貧しきを維れ懼る。斯かる困危の中にありて、ホルマン・ハントは一八五四年に一世の大作「世の光」(The Light of the World)を出せり。此畫は基督が復活し來りて、人間の戸を敲く圖にて、寓意畫なるが、十九世紀の宗教畫として優秀なるものなるは、世論の一致する所なり。ウィリアム・ベル・スコット(William Bell Scott)曰く、「開國以來英國にありて始めて津々浦々まで一繪畫は話柄に上り、又一般興味の主題となれり。而して實に永く數年間持續せり」と。ハント

たるもの此知己の言に瞑すべきにあらずや。又良心の覺醒(Awakening Conscience)も同時に展觀せられたり。こは一少女が彼女の無邪氣なりし幼時を追想しては、汚されたる罪深き今の身の上に及び愕然として醒め來り、忽然として情夫の膝より離るゝ罪惡生活上の一悲劇的瞬間を描破せるものなり。一八五四年五月、ラスキンは書翰を裁してタイムズ紙上に此二作の評論を試みたり。世の光はコムベールに購はれ、其妻之をオックスフォードのケーブル・カレッジ(Kable College)に寄附せり。

一八八五年一月、ハントは旅裝を調へ、結束してシリア及びパリスチナに向ふ。此行、必ず古猶太人及び猶太生活の真相を極めて聖書の史實を如實に畫布面に再現せんことを期せり。此思想の現れたるは先づ「替罪羊」(The Scapegoat)なり。こは人民の罪を負うて、山野に放たれたる羊なり。此畫は死海の沿岸、折しも夕暮の紫雲盤踞たる處、零丁なる替罪羊が悄然として佇み、遠くには模糊たる雲烟の間、遙にエドムの山々を望む圖なり。此繪は他の東洋の山水畫と共に、一八五六年、ロイヤルアカデミーにて展觀せられたり。次に描けるは、殿中に救世主を見出すの圖(The

「船」一八七八年作は夜中の客船にて、頗る寫實的なる圖なり。又その子の肖像（一八八〇年作）サー・リチャード・オーウエンの肖像（一八七八年作）ダンテ・ガブリエル・ロセッチの肖像（一八八四年作）等は留意すべきものなり。如上の諸畫はグロースヴェールの美術館に陳列せらる。此處には又「ベスレヘムの花嫁」一八八五年作「アメレトリス」及び其子が窓に倚りて書を撰寫し居たるを描きたるものあり。こは一八八六年の作。一八八〇年、ハントは美術家の材料準備論を美術協會にて演説せり。同年美術協會にて展覽に供せる作三十二葉の畫集を出版せり。

彼が晩年の作中にて有名なるものは「モーダレン塔下の五月」(May-Day, Magdalen Tower)なり。こは古より五月の日出時に、オックスフォードのモーダレン塔にて行はれたる歌の勤行の圖なり。此畫題は深く作者の感銘せるものありて、太く興味を覺え、無邪氣の勝利完成後、頂上よりの日出の光景を觀んとて、數週間樓上に昇り熱心に研究せるものなりとぞ。此短簡純潔なる一幅無聲の熱烈なる詩は、一八九一年、ゲインズボロ畫堂に陳列せられたり。畫堂はオールド・ボンド町にあり。ハントは又皇立水彩協會の展覽會に、屢その製作を出品し、新畫堂、新英國藝術俱樂部

部等に出陳せり。ハントが晩年の大作とも云ふべきは「聖火の不思議」(The Miracle of Sacred Fire in the Church of the Sepulchre, Jerusalem)なるべし。聖火は神社の圍の圓屋に、エースターの夕に起れるなり。

彼の個性の異ると作風の相違とは、彼をして美術家中に孤立せしむるものあり。一八五〇年以後にありても、彼は最初のラファエル前派の主義を標榜し固守して、毫も近代の藝術界の運動に動搖せらるることなかりき。彼の主義や方針や一定不變なり。彼は主觀的の藝術家なり。その一度宗教畫家として立つや、遠く聖經の古地を弔ひ、親しく聖地の人情風俗を視察して、一筆も苟くもせず、精勵の刻苦と描寫の細心なるとは、いたく觀者を感動せしめて、之が爲めに近世宗教畫界の大立物となるに至れり。その作物は宗教的情感に充ち、自然に忠實にして、寫實の筆法亦峻嚴なり。一葉一草も精細を極めたり。其作は勤勉の結果なりと云ふべし。其エルサレムにありて、殿堂中に發見せられたる基督を描くや、四年の歲月を費したるを見ても、其精勵と忠實とは想見し得べきにあらずや。されば勤勉の功は償へられて、死の影の如きは後に一萬弗に價せられたりといふ。ハント常に「高僧の

如くに勤め、造化の玄妙を發揮するを以て、己れの任務となしたり。一八五六年には詩宗テニスン作に六葉の挿畫を描き、又他の詩人の作の意匠をも凝らせり。ハントは又現代評論に「ラファエル前派同胞を、美術雜誌には「圖書の眞の態度と研究」とを、チャムパーの百科全書には「ラファエル前派主義を、一九〇一年には「ラファエル前派の歴史に従事し、近年世に公にせり。遮莫就中彼が代表的なるものとして傳ふべきは「死の影」「無邪氣の勝利」「世界の光」等にして、永く後昆に傳ふるべき傑作なりとす。一九一〇年十月歿す。齡八十四。

第二十五章 ホイツスラー

一 少壯時代及び倫敦夜景

ホイツスラー (James Abbotte McNeill Whistler) 一八三四年—一九〇五年は米國の
 なり。一八三四年七月十日マサチューセツ州のローヴェルに生る。父は土木工學家に
 て、又陸軍の武官たりしジョー・タブリュー・ホイツスラーにして、母はウィンナンスのバル
 チモリア家の一人なり。彼の生國に關して謬説傳はれり。そは佛國の一雜誌が誤
 りて彼をバルチモリアの産となしたるに基く。諸書此謬説を傳へたれど、ホイツ
 スラーは之を訂正せんともせず、嘗つて云へらく、世人若し余を以てバルチモリア
 の産となすを便とせば、それにもよし、何處に生るゝとも余は關せずと。又從兄
 妹のリバーモリア夫人に語りけらく、或る時一米國紳士が貴下もローヴェルの産
 なりと云ひ、余も亦ローヴェルの生れにして、而も貴下は六十七歳なりと云ふ、余は
 六十八歳なりと云へるに、彼は、そは甚だよし、六十八歳にしてローヴェルの生れ、洵
 に貴説の如く結構なり。されど余は何時何處に生るゝも可なり。敢てローヴェルに

て生れんとも思はず、又六十七歳など云ふ老人となるは、余の大に嫌ふ所なりと答へけるとなん、其感情鋭敏なりしを以て、言行往々人の意表に出て、冷笑痛罵を得意としき。されば彼は己れの好まざる人物を嫌ふこと蛇蝎の如くなりきと云ふ。

彼の父は嘗つて露帝ニコラス一世の寵を蒙り、招かれてモスクワ、ペテルブルグ間の鐵道布敷設計の顧問となる。父は妻及び幼兒ホイッスラーを携へて露都に到りしが、幾許もなくして父歿し、寡婦は孤兒を伴うて歸國せり。一八五一年、ホイッスラーはウエスト・ポイントの兵學校に入學せり。傳へて云ふ、此處はホイッスラーの父も勉學せる所なりと。當時ホイッスラーは單にジームス・ホイッスラーと稱したりしが、晩年自らジームス・マックチー・ル・ホイッスラーと號しき。こは英國にては珍らしき姓名にはあらねど、恣に先代の家名を變更する米國にありては稀有のことたり。

ホイッスラーはウエスト・ポイントに學ぶこと四年、シーグル(Siegel)に従へば、ホイッスラーが海軍大尉として南米の西岸に航せるは此頃なりしが如し。ケンシント博

物館なるジャスティス・デー(Justice Day)の所藏なる油繪はホイッスラーが近頃描けるものなるらし。畫題はヴァルパライソ・港(Valparaiso)にして巧に光線を現したるものなるが、實景を寫生したるものなり。ホイッスラーは中途退學する以前より、數學と兵學とを嫌ひ、漸々素描と繪畫とを好むに至れり。

兵學校を去りて巴里に遊學せるは一八五七年にして、爾來二ヶ年間はグレイール(Gleyre)に就きて勉學し、ブラクモン(Bracquembourg)、デガー(Degas)、フンタン・ラツール(Fantin-Latour)の諸氏と交はる。一八五九年、六〇年、六三年、サロンに出品せるも、毎に落選せり。殊に一八六〇年にはモネー、カザン、デガー、ブラクモン等も落選しき。同年「白少女」(White Girl)を落選展覽會(Salon des Refusés)に出品し、名聲漸く揚る。ホイッスラーが畫家としての經歷は全くこの一作より始まる。ホイッスラーは一八五九年倫敦に至り、後常に巴里と倫敦との間を往來し、居を二都にトしき。巴里にありてはバング町(Rue du Bac)の百十番地に住し、倫敦にありてはテート町のチェルシー(Chelsea in Tite Street)に住しき。前者には廣大なる花園ありき。

彼が最初の彫畫は「佛蘭西組」と稱するものにて、好事家の注意を惹きしものなれ

ども、晩年の彫畫と同じく、さまで必要ならざるもの多し。是等の作品より得る所の印象は概して少し、一八五九年倫敦に來りし後も、尙此業を繼續し、テームス河畔の建物及びテームス河の「下橋」に關する技巧の談話を其新聞記者に語りぬ。佛蘭西組はド・ホーホ風若くはニコラス・メイズ風の風俗畫なり。例へば「臺所」其他の如し。臺所は他日之に大修正をなし、二十五年の長日月間に完成せりと云ふ。十六葉のテームス河畔の風光は、重に一八五九年に成りしものにて、テームス河の新風光を表し、かの舳や快船や倉庫や埠頭や、水邊の酒樓や、其線條の輕快なる未だ匹儔を見ず。眞に工人的作品の上乗と稱すべし。就中最も有名なるは、「沼」テームス警察、「黒獅子埠頭」等なり。

ホイッスラーが英京に來りたる頃の英國畫壇の形勢如何を顧るに、當時ラファエル前派は既に衰へて、又昔日の威望なく、而も之に代はるべき新運動の生起せざる時代なりき。アカデミーの繪畫は、教訓澤山にして、而も甘たるき感情にして、恰も砂糖漬となりたる如く、主題は偉大なれども内容に乏しく、ホイッスラーが偉大なる主題の時代と蔑視しありたるは、頗る諷刺し得たるものなり。斯かる時代なり

しを以て、彼は時代に超然として自家の作風に精力を集中し、眞摯なる研究的態度を持續しつゝありき。

當時ホイッスラーは少時河岸の宿屋に住して、有名なるテームス彫畫を製作しき。此處は荒くれ者の寄合所にて、小船の船長、水夫等の常に集會せる所なり。近頃、ホイッスラー傳を著はせるペンネルの文にいふ。

彼は河を觀たり。而も彼以前の何人も試みざる態度を以て、杜の如く集まる巨船小舟より、際限なき舳の列、汚き倉庫、大なる船渠、小なる河岸の宿屋に至るまで、凡ゆる醜汚と美觀とを殘る限なく觀察し、而して其觀察の結果を獨創の筆を以てありの儘に描けり。斯くて此亞米利加の一青年が、倫敦の爲めにせし所は、レムブランドがアムステルダムの爲めになしたる所と同一なりき。此一年（一八五九年）だけにて、彼のテームス河に關する製作は十一葉を算するに至り、之を作らん爲めに、彼は幾度かグリッチよりウエストミンスターまでの間を彷徨せり。此十一枚中には「黒獅子埠頭」の如き彫畫もあり、これ絶好の傑作なり。其外倉庫、橋梁、船渠、船、及び凡ての河上生活の出來事は、驚くべき細密の技巧を以て

描かれたり。思ふに最も盛時のラファエル前派と雖、斯くまで自然に忠實なる研究をなせしものは之あらざるなり。況や斯かる製作が僅々二十五歳の青年畫家の事業なりと云ふに於ては、之を以て如何なる時代にも、其匹を見ざるものなりと稱するも決して過言にあらざるべきなり。

ホイッスラーは最初薄暗き日を選びて、テームスの光景を描きたるが、後には薄暮又は夜に入りて之を描けり。されど世間は彼の夜景の簡單なるものにも幾夜の彷徨と觀察と苦心と研究との存するを知らざりき。さもあれホイッスラーは、夜景に筆を染めたる先登第一の畫家にして、他の畫には見る能はざるほど巧に、苦心の痕を隠すを得たり。

ベンネル曰く、夜景は一筆一抹も増減するはざる傑作なり。天空を劃する船渠、建物の黒き陰影、一度水に落ちて、長く閃めき行く兩岸の燈物、凄き大河に薄れ行く小舟の影、仄かなる蒼空に落つる烽烟——凡て是等の自然を如實に描きて、而も之を透徹せる闇黒の中に包みつゝ、倫敦の夜の感じを與へんとするは、ホイッスラーの主眼にして、彼はチェルシーの小さき裏部屋に住みて、青色と銀色、青色と金色

灰色と銀色、蛋白色と銀色とにて之を描寫せり。而して後には夜景とし云へば、彼のノクターンを想起せしむるに至れりと。

是より先、即ちホイッスラーが佛京巴里を去るの前に、彼は金屬版を造り、校正摺をなすまでに進捗しき。而してこれ非常に珍奇なるものなり。こは、都の島、巴里 (Paris, Ile de la Cité) と題するものにして、筆致は晩年の作品の如く、特殊にして且つ奇異なる表彰なり。十六葉の彫畫を製作せる後數年にして、ホイッスラーは比較的小なる彫畫を試みたり。而して一八七〇年よりは所謂「レイランド時代」(Leyland period) に入る。

二 レイランド時代及びベネチア組

レイランド時代とはプリンス、ゲートの住人にして、富有なる船舶の持主なるレイランドが、ホイッスラーの保護者たりし時代を云ふ。レイランドは頗る好事家に、資性藝術を愛玩せる人なりき。彼は太くホイッスラーを愛し、一八七七年、彼をして其一室に孔雀を描かしめき。之ぞ、ホイッスラーの孔雀の間とて名高きものなる

が、この時代に於てホイッスラーは主として乾點を以て描寫せり。モデル・レスチング (Model Resting)、「フアン・ニー・ランド」(Fanny Leyland)の如きは、此時代の名畫と稱せらる。効果の一致が爾かく簡單なると、手段の爾かく經濟的なるを以て知られたる「倫敦橋」、「プライスの蠟燭製造」の如きも亦此時代の産物なり。次ては「アダムとイヴ」、「バッターシー」及び「ブトニー」の美しき木橋の光景あり。此木橋は其後撤去せられたり。

此以後は即ちヴェネチア時代と云はるゝものなり。何とならばホイッスラーは一八七九年にヴェネチアに漫遊し、「ヴェネチア組」と稱せらるゝものゝみならず、二十六葉の彫畫をも試みたればなり。此ヴェネチア組は全くヴェネチアの景色のみにあらざれども、概して斯く云ひならはしたるなり。

ホイッスラーが、ヴェネチアより歸京後に公にせる「二十六葉の彫畫」中なる英國の事物を主題とせる小品の畫風は、其後數年にして世に出てたる彫畫に於て、其傾向の著しきを見る。「菓物店」、「古衣店」、「魚屋」、「急はしきチェルシー」等はこの時代の製作なり。臨機應變の才あるホイッスラーは晩年に至りて全く異りたる方法を要する異り

たる題目を取りて、之を自家の藥籠中に收め、再び其畫風を變じたり。アムステルダムの散策、「舞踏會の夜景」等は即ち是にして、此舞踏會の夜景は其運動と光線の暗示とは、殆ど魔術的とも評すべし。又「ザ・リングダム」の風景畫の如きは頗る賞揚すべきものにて、氏の新作風を示して餘あるものなり。

ホイッスラーの彫畫を集めたるものに、「ホイッスラー氏彫畫集」(Whistler's Etching)といふあり。ウヰドモリアの編纂せる所中に三百の彫畫を收む。吾人は今ホイッスラーが彫畫より一轉して、他の美術に至るに際して、簡單に其特色を論評せざるべからず。其特色は精細と輕快とにあり。自在なると適應なるとにあり。無限なる技術的源泉たるにあり。其勤行に於ては常に最も警醒的にして、又理解的觀察を有したり。明暗の畫明的ならざると、線の集合の面白からざるとは、又決して看過すべからざる所、即ち其眼光は習俗性より覺醒し來りて、伽藍も、棧架も、チェルシーの商店も、嫺雅なる裸體も、フレミッシュ宮殿の正面も、ウエスト・ケンシントンの「大紡車」も凡て一樣に好意をもて眸裏に觀じ來るにあり。人心を誘引する重なる原因は、氏が心性の警醒的なると、自覺的なるとにあり。色彩と運筆との美又稱するに足る。

三 ホイッスラーの繪畫

而してホイッスラーが繪畫の傑作は概して少壯期の製作に多し。サラートは例外なり。アーチボルト・キヤムベル夫人、リム・レヂスの小き薔薇等は大概一八八五年の作品なるが多し。コンニ・ギルクリスト、アレキサンドル嬢、ローザ・コルダー、テームスの夜景等は少しく以前の作物なり。母の肖像、ルクサンブール博物館蔵、カライルの肖像、グラスゴ、美術館蔵、クレイモルンの園、ヴァルバライソ港の夜景、音楽堂、白少女等は更に其以前の作品なり。

右の中にて、母の肖像はホイッスラーが最も苦心の作なるが、こは一八七一年に完成せられたり。その力ある悲哀の趣と、深く愛慕の情とを認めたるは、獨りスウィンバーンのみならず、されど四面楚歌の聲中、余は故らに誤解の衣中に自ら包まるゝなり」と公言せる彼は、世間の好評を得んともせず、曰く、

先づ余の母の肖像を見よ。灰色と黒との調整として、王立書院に陳列せられたる彼の畫の如き唯それのみにして他に何物もなし。余には唯母の肖像畫とし

て面自しと云ふのみ。世人の此畫を見て、實物に肖たりとか又肖ずとか云ふの權利なきなり。

とハ、バーベニングトンは、彼が自ら全然其假面を取去りたる場合を告げて云ふ。

街の彼の書室にて、相共に、母を見たる時、余は其顔や姿の美點に就て、不圖或る事を言ひしに、ジンミー(ホイッスラーのこと)は暫らく余を熟視して、何事も言はずりき。彼は其時總を以て下唇を弄し居たりしが、二分許り經て、漸く口を開けり。然り何人も己れの木伊乃は出来るだけ奇麗にせんと欲するにあらずやと。さる程にカライルは、母の肖像に敬服して、己れの肖像の描寫を依頼し來れり。ホイッスラーが畫に對するや非常に眞面目にして、全力を之に集中せり。彼のチェルシーに於ける母との生活は、單純の度を過ぎて殆ど苛酷なるほどなりしが、彼の友人の大部分は女性なりき。されど彼が結婚せるは此時よりは久しき後の事なりき。されど人はバルブリンセップとの折合を怪みしが、實際家庭に於て母に仕ふるホイッスラーは從順にして善良に、又平生の強頑なる人の子にあらず。ホイッスラ

夫人は極めて頑迷なる長老派の信者にして、ホイッスラーを惱ましたること多きは疑なきも、彼は折々苦笑せるのみにて、敢て愚痴を言はず、極めて柔和なりしかば、家庭は頗る平和なりしが如し。

前に掲げたる「白少女」には日本畫の影響あり。ホイッスラーは日本に漫遊せる畫家なり。されば其作品に日本畫の影響あるは明らかし。大英百科全書に於けるホイッスラーの傳記家曰く、「白少女」には日本畫の影響あり、影響はあれども、元より主權的のものにあらずと。されど、日本美術の著者ストレンジの如きは、「カーライルの肖像」母の肖像等にも日本畫の影響あるを認めたり。此處に日本畫と云ふは浮世繪なり。マックスノルドはホイッスラーを論じて、ホイッスラーが花押として蝶を用ひたるは、W字の變なりと云ふ。案ずるにホイッスラーがレーランドの室に孔雀を描きたるは、四條派あたりの孔雀より暗示せられたるものなるべく、其、ティムスの夜景は廣重、北齋、其他の浮世繪畫家が得意の作なる隅田川の夜景等より思付きしなるべく、Wの如きは我國の紋所にある揚羽の蝶などより心付きしものかとも思はる。而してホイッスラーが作にはラファエル前派と日本風とを折衷せる畫あ

り。ホイッスラーは壯時ロセッチの感化を受けたり。此派後に至りて表れ、面貌はラファエル前派にして、衣服と調度とを日本風としたる美人畫是なり。又其作には狩野派的墨繪人物の皴法を利用せりとも見ゆるあり。親しくホイッスラーが原作を見れば、泰西の評家以外に獨創の品隘をなすを得べきも、ノルドを始め、泰西評家の言尙隔靴搔痒の感なき能はず。彼が交友のモネ、デカー等日本畫を愛好せる印象派なるを見よや。

四 バステル及び石版畫

ホイッスラーは又中年に於て僅少の水彩畫を試み、輕妙なる研究を試みたれど、世人の留意するもの少し。而して一般に愛玩せらるゝヴェネチアの風景を描きたるバステル、人物をものしたるバステル等も、亦中年の製作たり。バステルに於てもホイッスラーは油畫、水彩彫版等に於けるが如く、其使用する媒物の特別なる性質與へられたる畫題に、與へられたる媒物の適するや否やをも注意せず、漫然として揮灑し去りぬ。されば其結果や時としては勝利となり、時としては失敗となり、

或は「的中」し、或は「外る」事あるのみならず、其勝利の連続や、大なるあり、小なるあり。而してホイッスラーが石版畫を描きたることを忘るべからず。其數彫版に次ぐ。ウヰー之を編次して一百となす。其中二三の人物畫は稍佳なるものにて、テームスの夜景は最も優美なる作品たり。テームス河を主題とせるものの中には、ライムハウスに於ける夜景もあり。是等は實に奇想天外より落つる底のものにして、極めて詩的神祕に富みたり。サホー及びブルームスベレーに於けるジョージ王朝式の會堂の眞面目なる線などもあり。要するにホイッスラーは彼の時代の革新家として、種々なる繪畫を試み、種々なる畫題を描きて、悦樂せるが如きも、ホイッスラー的性癖には集注的中心なく、研鑽永續せず。これ明かに油畫家として立つ上に大なる障礙なりしなり。境遇異らば或は彼の爲めに得策なりしやも知るべからず。而して當來にありてはホイッスラーは油繪中の巨匠に數へられざるべからず。されど彫畫家としては其主題の多數なると多種なると、概念と熟練とに非常なる變化ある、之を銅版に試みたる力量等に至りては、巨匠中の巨匠となさざるべからず。彼の如きはレムブランド、ヴァンダイク、メーロヨン、クラウドの諸人に比肩接

踵するものなり

五 社交と著書

一八七四年頃より彼は倫敦有數の人士に數へらるゝ事となりぬ。其畫は未だ眞面目に鑑賞せられざりしが、其人格は夙に世人の承認する所となりて、一代の寵兒となり、二代の寵兒の家には必ずホイッスラーの英姿を見たりき。ホイッスラーは好んで友人を日曜日の朝餐に招待しき。斯かる事は此頃の外、前後に例なきことなり。ペンネルの實記に云ふ。

ホイッスラーは非常の苦心もて此事をなしぬ。彼は自ら招待狀の意匠を試み、自ら食卓を整へ、飾物に至るまで、一々己が嗜好に適ひたるものを選び、青き物又白き物は多年彼が蒐集せる所のものにて、銀又はリンネル、又は日本製の金魚鉢、花瓶などは中央に並べられたり。時としては我家の物のみにて間に合はざる折は、二軒置きて隣に住めるレデスガール卿より、或は弟が結婚せる後はウリアム・ホイッスラー夫人より、其秘藏の日本製陶器を借り來れり。彼は亞米利

加式と佛蘭西式とを折衷せる献立をなせしが、大なる肉を嚼る英國式には全然感服せざりしなり。彼の蕎麥粉菓子は今にてもなか／＼忘れ難き御馳走なりしが、對手が隔てぬ友人なる時は、ホイッスラーは之を手製せり。されど何人にもそを嫌ふものあらば、以來は口をも利かさざりきと云ふ、又恐しからずや。時としては十八人より二十人の客を招待せることもありしが、常には其半數にて、孰れもホイッスラーが逢はんと欲する人々、即ち辯論家、書家、作家、實業家、社交家等なりき。彼は湧くが如き頓智を有せり。或る時、貴君の運命は如何と云ふ奇問に對し、然り時々は非常に宜しと答へたることもありき。佛のデガーは豫め企てたる、落ちに談話を持ち行きしが、ホイッスラーは彼に比較せられたることあり。されどホイッスラーの機智は宛然爛の如くに閃き出づるを以て、豫め用意せるものにはあらず。加之彼は非常に談話を好み、又なか／＼に巧なりき。雜談にも熟達し、一種の優味あり、滑稽もありき。彼は空想的にも、大膽にも、惡意にも、真面目にも、大袈裟と薄野呂との外には何物にもなり得たりき。大袈裟、大風呂敷と云ふことは彼の最も恐れたる所にして、彼の敵人の外には何人も彼に少

しにても誇張疎大なる様子ありきとは言はざるなり。而して醜惡と不透明とは彼の蛇蝎視せる所なりき。

當時ホイッスラーの友人は、倫敦の名士を悉く網羅したりとも稱すべし。即ちロッセ、チ、スウインバーン、ヘンリー、ゴッス、ワイルド等是なり。彼が友人等と屢衝突せるは、一の藝術の神聖を保たんとする熱心と、一は不正直、偽善、好事家風を厭へるが爲めなり。彼とオスカ、ワイルドとの交際の如き、即ち其一例なり。暫時兩者の交際は蜜の如かりき。ワイルドはホイッスラーの畫室に數時間を費し、常に日曜日の朝餐にも來れり。而して彼は私の相談にも與れり。ホイッスラーも亦ワイルドの行く所は何處なりとも同行しぬ。社會上の事業も、一群の人々はホイッスラーを中心とし、他の群の人々はワイルドを中心とするに至れり。ホイッスラーは暫らくして、ワイルドが偉大なる天才なれども、根本的思想に缺けたるを知りぬ。彼は常に藝術に就て語れども、實際餘り多く藝術を知らざるものなるを斷言せり。或る偶然の光輝に眩惑せられて兩者は互に相交りしが、二人は實に別種類の人物なりき。ホイッスラーは真面目なる人なりき。即ち倫敦タイムスの一評家は、二人の差異を陳べ

て曰く、ワイルドはホイッスラーにも劣らざる鋭き心を有せしが、ホイッスラーが依つて以て世間の衆愚に對する如き高き自信を有せざりき。否、彼は世間を引着くる様子見ゆ。要するにホイッスラーは豫言者の如く、ワイルドは豫言者たらんとするものなりき云々と。ペンネルはホイッスラーが種々なる境遇種々なる争闘の中に、一定の理想を持したりと考ふるもの、如し。彼がスウィンバーンを侮辱せる起因は、各週評論紙上にて、スウィンバーンが戯談は機嫌よき人に向つて、何程まで用ひて差支なきかと厭味を言ひ、ホイッスラーは輕業師のチユリに似たりと暗刺せるを以てなり。彼がラスキンと争へるは、一八七七年、ラスキンが、ホイッスラーがグロースウエール美術館に出陳せる一夜景を評して、公衆の面に繪具の瓶を打掛けて、加之二百ギニーを取らんとする大騙りなりと侮辱せるより起りしなり。斯かる侮辱を加へられ、狷介なるホイッスラーの何條黙々たるべき、之を法廷に訴へて堂々黑白を争へり。蓋し彼は貧しくして奮闘せる畫家の爲めに戦へるなり。訴訟の結果ホイッスラーは唯一錢の損害賠償を得たるに過ぎざりき。

彼のラスキンと争ふや、ホイッスラー對ラスキン、藝術對藝術批評等の小冊子を公

にして、以て堂々の論陣を張り、ラスキンに抗したり。一八八五年、倫敦にて「十時講義(Ten O'Clock Lecture)」を試みたり。こは一八九〇年の著作敵柔術(The Gentle Art of Making Enemies)中に收めらる。此書は、藝術家は其見て以て正しとなす所をなすの自由を有し、公衆及び批評家は藝術の價値に就て毫も思考せずして、或る觀念を有することの困難なるを説破せり。作敵柔術は其奥底に於ては、十字軍の一勇士が生命にも換へ難き眞理の爲めに、全力を注いで戦へると同じ。ペンネル曰く、彼の書は藝術上の自叙傳と云ふべきものにて、ホイッスラー氏は或る一部分に「自叙傳」てふ小題目を附せるが、實は全部を爾か呼ばんとせるものなるやも計られず。半は眞面目に半は戯に、彼は之を我聖書と呼べり。聖書に書けるものは孰れも皆茲に書けるなり。卿は聖書を知らざるが如しとは、彼が畫家としての經驗又は製作に關して質問を受けたる時に答へし言なるが、彼の書にして果して彼の藝術に對する信仰、並に信仰に對する確乎たる操守を示すものならば、この言は正當なり。試作、小冊子、手簡目録等、整然として順序を遂うて出て来るは、離れ／＼の諷刺又は自家廣告的の文字の出で来るよりも遙に優れり。尤も、作敵柔術はその機

智ばかりにても面白きものなるが、勿論徒に戯談せるものにあらず。即ちその書は訴訟事件の書抜に始まり「ラスキン對ホイッスラー」藝術對藝術批評の二論文を含み、訴訟事件の真相を傳へんことを期したるものなり。其他短き一口文句も含まれたるが、これホイッスラーが獨得の力ある口調にて、彼の畫の技術上の原則を擧げたるものなり。手紙は其時々事情を明かにする爲めなるが、一として眞理を含まざるはなし。最後に「目錄」一八八三年の美術協會、彫畫展覽會目錄は、己れの口にて己れ自らを裁けて、彼の金言を實行せるに過ぎず。

六 ホイッスラーの人物

斯くの如くホイッスラーの人物は、其姿勢と服裝との調子外れなるは、其藝術的傲慢と結びて、舌鋒鋭利冷罵百出、倫敦市中交際場裏の話柄に登る第一の人にして、其機警の言は到る所に引用せられざるはなかりき。即ち其親友の見たるホイッスラーは、衝動的又ドンキホーテ的にして、頗る奇矯飄逸の趣あり。彼は二十有餘年間不運と戦ひたる天才的畫家にして、永く嘲罵の中に葬られたりしが、晩年に至り

ては勝利の榮譽を得たり。彼に對する部分的觀察は、新聞の議論に煽られたるものなるが、其人物の全體は觀察者の理解力なき爲め屢、曖昧になりぬ。されど彼が最も單純に眞率に世人に示せるは、彼が「十時講義」を公にせる時なり。何故に斯かる題目を撰びしぞと云ふに、彼は世間の人が恰も芝居などに行く心にて食卓より直ちに押かけ來らん事を恐れて、十時ならば未だ早きを以て斯く定めたるなり。

扱て其忘れ難き當夜に、倫敦のプリンス・ホールに集れる聴衆や批評家は早計にもホイッスラーの技術は最早發達の見込なしと速斷せる爲め大失敗をなしぬ。そは彼の技術は發達の見込なきにあらず、反つて反對に彼等を傍に呼び集めて、自己の生涯を支配する畫的信仰の標準を心底より傳へんとせるなり。ペンチルは此自白を左の如く記しぬ。

美術は悅樂なり。世界の大家畫家は改革家にあらず、宣教師にあらず、唯自己の周圍に満足して、到る處に美を發見する人間なり。美術上には全然過去を善しといひ、現在を惡しとするの區別なし。希臘の大理石も、日本の刺繡や扇も毫も異

ることなし。又美術的の時代、或は美術好の國民と云ふものなし。

美術は一の科學なり。畫家が美を目的として、自然界中の諸現象を取捨撰擇せるもの即ちこれ美術なり。換言すれば自然は殆ど誤謬を以て充たされたりと謂ひても可なるほど完全なるものは少し。されば彼は國家が美術を保護するを冷笑すらく、藝術の如きは自らの思ふ儘に何處にても發泡するものなり。バルテノンの建設者よりも、南京邊の阿片吞よりも、或はマドリットの畫家よりも、富士山麓に住みし北齋よりも、大作は出て來るなりと。彼の考にては、一時代が他の時代に優りて多くの畫家や鑑賞家を出すと云ふことなし。藝術は全く時處を超越せり。

ベンチル曰く、ホイッスラーが實際を描寫せるテムズ河は、空想に描かれたるエデンの花園よりも美しく、其處に出て來たる男女は、ヴェニス人若くは西班牙人の描きたる男女よりも立派なりと。

七 ホイッスラーの特長

マックスノルドは近代有数の批評家なり。併つてホイッスラーを論じたり。今其説を引いてホイッスラーの特長を述べんとす。

繪畫には截然區別せざるべからざる二要素あり。素描と色彩と即ち是なり。是等は等しく視覚中樞に訴り、唯其異なる所は各別様の感性に對應するの差あるのみ。光度の差を極めて鋭利に且つ極めて精細に識別し得る視覚中樞は、素描の適才なる定義に副ふものなり。換言すれば觸覺若くは筋肉覺の補助なくして、眼のみを以て輪廓或は形似の如きを覺知するは、即ち光度の識別なり。之に反して光波の漂蕩に特殊の感應を有する視覚中樞は、色彩感若くは色彩に關する能才たる原理に合ふものなり。素描の才と色彩の才とは、往々一方若くは他方に偏倚する事あれども、概ね共に併有せらるゝを常とす。何とならば視覚中樞の高度に發達し、若くは感受するものは、自然的に各種の視覚的印象を平準以上に受容すればなり。従つて光度と光波との受容に於ても、こは必ずしも常に然るにあらず、或は色彩感なき乾燥なる製圖家あり、或は形態上の觀念を有せず、若くはそを造形的

に翻出するの才なく、色彩上に活動するものあるなり。

視覚中樞の特に形態的、官能的、若くは感性的に發達せる腦にありては、腦の全官能は悉く其統ぶる所となり、就中記憶及び觀念連合に於て最も然りとす。思考的能力は凡て一の視覚性を形成す。そは視界に對して從屬的關係を有するなり。記憶は専ら視感の映象に憑依し、又觀念連合も此範疇なる映象と連合す。形態に於ける各種の知覺は、形態の表示を意識に思ひ浮べしむるにあり、想像とはアルペルト・チューレルが奇しくも亦驚くべき直覺を以て其日記に表示したる如く、腦裡に於て完全に組成せられたる形象に外ならず。此種の腦に於ける繪畫の世界は、常に精緻なる觀察に傾けるを以て、刺激的若くは鼓舞的ならず。光滑かなる寶石の簾材製作の如く、傑然として美しく輝く。腦の各版圖に於ける内面的結合は、悉く視覚中樞に統一せられ、而して意識の門戸に於ける腦の全活動、全情緒、全經過も亦等しく視覚中樞の活動に引率せらるゝなり。

ホイッスラーの傑作は現代に於ける凡ゆる藝術家よりも更に深遠なる有機素質を畫家たる彼の天分に具有せることを表示す。吾人は彼に於て心理學の講座に

於けるが如く、生れながらにして畫家たる者の心理に接することを得るなり。一度彼の花押を見たる者は、幻想に關する聯想の如き例證を認むるならむ。其製作に接せる人々の知れるが如く、彼の花押は平かに羽を張れる胡蝶を現せり。世人は其裏に表象せられたる何等かの意義を探らんと欲し、之に就て極めて疎慢にして且つ極めて迂遠なる解釋を加へぬ。若し何人か其説明を求むるものあらば、彼は笑つて説明に代ふるに戲謔なる身振を以てするならむ。彼は恐らくは此解釋に腐心せる是等の鑑賞家を見て大なる慰樂となしたるなるべし。實に彼等は眼なきなり、見ることも能はざるなり。知らずや、胡蝶はホイッスラーの頭字Wに過ぎざるを。兩側の二線と中央の幹線とを應用して成れるこの裝飾的ゴシック文字は、恰も圓筒狀の軀身に兩翼を張りて飛翔せむとする胡蝶と能く似たるにあらずや。此相似の聯想はホイッスラーをして花押を描くに方りて胡蝶を想起せしめ、而して爾後趣味なく意味なき原文字に代ふるに、此表白に富めず胡蝶章を以てするに至りしなり。胡蝶の益、成長するや、Wは漸く退化し、遂にホイッスラー自らさへも其出立點を忘るゝことゝなれるなり。

ホイッスラーは嘗つて自ら好んで形式上の圖案家として、一代の先頭に立たむとしたりき。グレイール學舎に於ける苦學の結果に依りて、彼は雙眼鏡的に見たる立體的輪廓を作るべく、圖案科の長となりぬ。以上の證蹟は其驚異すべき造形的肖像、其他彼の初期の製作に於て明かに認め得らる。然れども彼は自家の個性を覺識するに及び、遂に形式を拋棄して色彩に全力を傾注したり。其後半生に於ては物象の輪廓の如き、最早何等の興味をも感ぜざるに至りしが如し。彼は唯色彩の表出或は色調の融和と否とに苦心したり。これ即ち彼の視覺中樞に光度のそれよりも光波のそれに多大の感受性を有することを示すものなり。此結果は彼と常人との間に、腦組織の別異なるより來る救ふべからざる矛盾杆格を生ずるに至らしめぬ。色彩に關して特異の感性を有することホイッスラーの如きものにあらずんば、彼と等しく物象を洞見すること能はず。彼が視覺に由れる感性を以て、かの鼻を以て識別する動物の如く、印象を享受するが如きは、他の毫も想像し得ざる所なり。此故に色彩に關して痛ましきまで過感なるものと、素描の覺知者換言すれ光度に關して受容的なるものとを、互に諒解疏通せしめむとするも、其間

に不可解の疑惑を生ずるに至るは必然の勢にして、これ即ち彼とラスキンとの間に喜劇的、滑稽的に有名なる論争を惹起さしめたる所以なり。ラスキンは唯素描的描法のみを味ひ、其思想は決して界線以外に出づること能はざりき。彼にありては繪畫は思想感情を具象的形式に表示せしものに外ならず。彼の要求に曰く、繪畫は宜しく明白なる報道ならざるべからず。平易なる言語に翻譯し得べきものならざるべからず。話説ならざるべからず。旅行に於ける記憶ならざるべからず。自然科学に於ては論議ならざるべからずと。正確なる再現に遠へる繪畫は、恰も明瞭なる言語と同じからざる音樂の如し。黒色と黄金色との夜景に對するラスキンの批評は、鶴と狐とが互に招宴したりて、ふ童話を誹謗的に改修せしものと云ふべきなりき。畫家の第一義務として、地質學、植物學、若くは機械工學に精通せよと望める悪意の藝術検査官に對して、應答したるホイッスラーは、寧ろ兒戲的に公正を期するが如きは、初めより誤れるなり。此不朽の問題に關して、ジャッチ・ハッドレストンは善意を以て彼と次の如き會話を交へたり

「此畫の何れの邊が實際橋梁を示せりや。貴下は之を以てかの橋梁の適切なる描寫なりと言ひ得るか」此問答は「月夜のバターシー橋」に就てなしたるなり。

「余は橋梁の正確なる寫生をなさんと企てたるにあらず。」

「此方に塗布せられたる色彩は人間を現示したるものなるか。」

「そは貴下の解釋に任すべし。」

「其下部に見ゆるは小艇なりや。」

「和を成就せむとしたるにあり。」

「ハドレストンは斯くの如く色彩の調和に就て聞くを得たり。然れどもラスキンと同じく遂に其意を理解すること能はざり。」

ホイッスラーの長はノルドの言へるが如く、色彩感受性のいみじくも發達せるにあり。此特長は其佳作目録を一見するに至つて更に驚くものあるを見ん。レグルの「ホイッスラー傳」に目録あり。就いて見るべし。

ホイッスラーの作品には、灰色と黒色との調整、石竹色と灰色との調和、若くは白色に於ける和聲、灰色と銀色との夜曲など云ふ類頗る多し。これホイッスラーが常人に超えて色彩を感じることに鋭敏なるを以て、風景畫にては彼は自然の節奏を此色彩もて表現せんとせるなり。夜曲夜景は色彩の調和を以て夜の音樂の節奏を奏てんとせるなり。

現代英國の批評家として噴々の名あるアーサー・シモンズは、其著「七美術」中にマクナルの「十九世紀の美術」を批評して云へるが如く、自然の感じを表現せるは近世美術の特色なり。されば十九世紀の畫家に取りては、自然は生命たり、宗教たり、責任たり、誘惑たるものなり。而してホイッスラーの如きは此責任を正しく自覺し表現せる一人にして、吾人はマチーとホイッスラーの繪畫に於て始めて近世的の印象を發見すと云ふも決して溢美にあらざるなり。ホイッスラーは其慧眼を以て雑多なる自然の中に實相を見たり。外物を通して本然を見たり。換言すれば本然的實相を見たるなり。彼は日本畫及びヴェラスケースの畫より色彩及び圖案を學び、畫中の自然と人間とを遇すること、恰も紳士が淑女を遇するが如く、禮儀ある奇

才を發揮して繪畫の中に音樂を奏せり。之を要するにマックスノルドの道破せる如く「美術家としてのホイッスラーは愛らしくも温順なり。人としての彼は面白くも尊大なりき。吾人は歐洲近代の畫界に日本趣味を代表し、大言壯語して「美の物語は近世の歐羅巴の藝術に盡きずして、希臘のバルテノンの大理石彫刻、又は日本の富士山麓にて北齋の描きし扇面の畫に盡きたり」と唱破せるホイッスラー其人をば、日露戰役後全世界を驚倒せる日本の良友として記憶すべき一人なるを信ぜんと欲す。

第二十六章

ウエレンシユチャーギン

一 小傳

露西亞は歐洲の諸國中にありて其歴史と文明との最も新なる國民なり。従つて其繪畫の如きも極めて新なる發達に屬し、十九世紀以前に於ては、古拙なる宗教畫を除きては眞の意味に於て繪畫と稱すべきものなかりき。十九世紀に入りて初めて伊太利繪畫の影響の下にステドリン(Shtedrin)ブルロン(Buloff)フドストフ(Fudstov)等二三の畫家を出せしが、此世紀の後半に入りて眞に國民の氣象を代表せる二人の巨匠を出せり。戰爭畫家として將た旅順の殉難者として世界的名聲を博せるウエレンシユチャーギン、及び肖像畫家、風俗畫家、歴史畫家として露西亞畫壇の代表的天才と稱せらるゝレピン即ち是なり。

ワシリイ・ウエレンシユチャーギン(Vassili Vereshchagin)は一八四二年十月二十六日を以てノヴゴロド(Novgorod)のチェレポヴェツ(Tcherepovetz)に生る。初めベテルブルグの美術學校に學び、後一八六四年、巴里美術學校に移りて、ゼローム(Gérôme)の下に學

べり。一八六七年サマルカンド遠征隊に加はり、歸來暫らく巴里に滞留せしが、一八八九年、西比利亞に遊び、歸りて獨逸に入り、ミンヘンに留まること二年、次いで四年の間、中央亞細、支那、印度地方を漫遊し、歸りて再び巴里にあり、一八七七年には露土戰役に從軍してシプカ越(Shipka Pass)の攻撃及びプレヅナ(Plavna)の攻圍に加はり、サン・ステファノ(San Stefano)の平和會議にはスコベレフ將軍(Skobeleff)の秘書官として働きたり。此時より彼は深く戰爭の悲惨を感じ、繪畫によりて之を人口に鼓吹せんと欲し、爾來戰爭の恐怖を如實に現せる多くの繪畫を作りたり。日露兩國が干才の間に相見ゆるや、ウエレシユチャイギンは又例の如くに請ふて從軍し、マカロフ中將の麾下に屬し、ベトロバウロウスク艦上にありしが、一九〇四年四月十三日、旅順港外の戰に於て日本軍の敷設せし機械水雷に觸れ、提督と共に壯烈の死を遂げたり。

ウエレシユチャイギンの繪畫は自から數種の群をなし、露土戰役、ナポレオン戰役、米西戰爭等を題とせるもの、外、中央亞細亞にて成れるもの、印度を主題とせるもの等その數甚だ多く、その最も有名なるものは、多くモスコイなるトレチャコフ畫堂

(Tretyakoff Gallery)に藏せらるる「頭顱の塔」(Pyramid of Skulls)「忘れられたるもの」(Forgotten)「ソマナ戰後の路」(The Road after Plevna)「シプカに於けるスコベレフ」(Skobeleff in the Shipka)「サマルカンドのヘミール」が戰利品を見舞ふの圖等は其最も著しきものなり。

ウエレシユチャイギンの繪畫は其規模の雄大にして、構圖の警拔なるものと共に、繪畫としては往々美術的表現に於て缺くる所多しと稱せらる。又其技術が佛蘭西仕込なるにも拘らず、粗硬なる色彩と無造作なる人物の配列に於て飽くまでも露西亞的特色を發揮したりと評せらる。後年トルストイ伯の著戰事に平和に感化せらるゝ所ありて、其畫風に一新派を開けるが如し。

二 日露戰爭とウエレシユチャイギン

一九〇二年及び三年の頃、極東に於ける日露の關係の日に益々切迫するや、ウエレシユチャイギンは斷然日本に對して戰を挑むの不可なるを公言し、政府に勸むるに須らく滿州を撤兵し、支那よりして浦鹽と旅順とを連結せしむべき一帯の土地を

割くの代りに、東清鐵道を北京政府に與ふべきを以てしたりき。此種の議論は當時露國一部の有志の既に懷抱しつゝありし所なりしかど、廟堂に勢力を占むる多數の頑固黨は皆之に反對して、露國は決して之を賣らんが爲めに滿州鐵道を布きたるにはあらずと云へり。ウレシチャーギンは之に對して曰く、吾人は決して賣らんが爲めに鐵道を造りたるものにあらざるは論者の唱ふるが如し。されど之に就ては吾人は既に其先例を有するにあらずや。アレクサンドル二世がアラスカ半島の却つて吾人に向つて迷惑の根源たりしを見しや、彼は終に之を米人に賣拂ひし事實あるにあらずや。滿州鐵道の我露國に向つて損ありて益なきこと、恰もアラスカと異なることなきなり。吾人は須らく速に此紛擾の根源を斷ち去らざるべからずと。彼戦争前滿州及び日本に遊び、歸りて其意見をノーヴァスチ新聞紙上に掲ぐ。彼先づ曰く、支那は國として決して戦争に加はるが如きことなからべし。彼は戦争に加はるは其鐵道及び露兵の占領しつゝある領域を恢復し得べき希望を失ひ了るべき所以たるを知れり。唯日本の態度に至りては大に之に異なる所あり。余は此國を見て大なる印象を受けたり。其國土は山水明媚にして頗

る開化し、其人民は常に精力と巧才とに富むのみならず、又一の大なる智力と天賦の美術的趣味とを有せり。唯不幸なるかな、此國民は正しく己れの國力兵力を測度する事能はず。其一度支那に打ち勝ちてよりは、露國も亦斯くの如くに興し易かるべきを盲信したり。如何なる條理も彼等が此信仰を打破すること能はず。彼等の輿論は非常に激昂し、政府は民間の此激情を鎮定せんが爲め、終には進んで干才を握らざるを得ざるに迫れりと。ウレシチャーギンは日本民間の主戰論に關聯して對露同志會の事を述べ、該會は自費を投じて委員を旅順、滿洲浦、鹽等に派遣し、頻りに極東に於ける露國の内情を偵査せしめつゝある趣を語り、此同志會委員の報告なりと云ふ一二を載せて曰く、露國は現に石炭に缺乏せり。其有せる所は僅に六万五千噸のみ。而して鐵道のみにも其中一個月一万五千噸を要せるなり。露國は又日本の艦隊を攻撃するが如き冒險をなさざるべし。其海軍と陸軍とは能く之を知れり。其我に劣ること之によりて見るべし。彼の士官は良好なりと雖、其兵士は不訓練にして愛國心を缺けり。吾人は之を支那兵と同列に置き得べし。斯かる兵を以て露國たるもの果して何をか能くせんや。吾人は其欲す

るものを得ること難きにあらず。露國は日本の攻撃を避けんが爲めに、旅順を以て其艦船の避難所となす外、何事をもなすことなかるべし。之に加ふるに一旦開戦となりたりとも、其戦争の永きに互ること南阿戦争の如くなる憂あらざるべし。蓋し日本軍の進んで露都を衝くが如きことはあらざるべく、露國は日本が露國の勢力を滿洲より排斥するや否や、和を結ばんことを欲すべければなりと。ウエレシチュチヤギンは斯くて日本は正に偉人狂の妄想もて襲はれつゝあり、何物も此蒙を啓く能はずと陳べたり。彼は戦争の露國に向つて甚だ好ましきにあらざるを唱へながらも、日本上下の主戦論の旺盛なるを實見して、戦禍の到底避け難きを思ひ、而も戦争にして破裂するや、日本軍は直ちに朝鮮に上陸すべく、露軍は優に之が供給の道を斷ち、敵をして巨費を消費せしめて、奔命に疲れしめ、終に之を敗亡せしめ得べきを言へり。彼が戦争前に於ける此豫言は一も的中せずして、露軍は着々機宜を失し、彼自身も亦終に悲惨なる最期を遂ぐるに至りしこそ是非なけれ。嗚呼、畫人の筆長へにモスコイなるトレチヤコフ畫堂を飾るありと雖、其身旅順の海に没して、最期の悲劇徒に好個の畫題をなせるのみ。平和主義なる彼は

又其末路によりて戦争の慘毒如何に酷しきかを示したるか。

三 ウエレシチュチヤギンの寫實主義

今より二十年ばかり前の事なりき。ウエレシチュチヤギンは巴里の畫室を賣りて、モスコイに卜居し、之を終焉の地と定め、此處にて非常なる熱情を以て繪畫の研究を續けたり。モスコイに移りて、彼の著したる畫集あり。こは有名なる「ナポレオン畫集」にして、一八一二年、ナポレオンがモスコイに於ける戦役を主題とせるものなり。彼が畫家としての妙技は以前より認められたりしと雖、此畫集に至りて、其立場は益々明晰となり來りしなり。

第一、此作に現れたるは其寫實主義なり。彼は以前より寫實主義を持し、而も最も極端なる寫實家を以て自任せり。彼が所見は雜誌、美術家に出でたる「寫實主義」てふ論文に明かなり。曰く、

人は余を評して、タイプと服裝とを重んぜざるものなりと非難するか、然らずんば自然の真相を觀察せるものにあらずと云ふ。又或る時は余は作中の人物

と其周旋とを研究せざるものなりとして排斥せらるゝは是等の論評は果して是なるか否恐らくは非ならん。余が作物中に現れたる事實こそ大に其主義を發揮せるものにして、例へば最も明かなる太陽の光線の下に於ける實際を描くに當り、身はそれと反對せる畫室の闇然たる光線の内、筆を執る事を得べきか、又は北極の寒天の下に行はれたる事實を描くに狹隘なる畫室内に限られたるタイプを以てすと云へるの説を難ずるは如何ぞや、恐らく其論非なり。余は寫實主義の代表として、深く自任する權利を有す、而も此主義たるや、美術上の創作の凡ての方面に對する最も嚴格なる事實を要求しつゝありて、常に觀念を度外視せざるのみならず、却つて之を前置する寫實にあらずして何ぞや云々。

又他の一節に曰く、

南方に於ける歴史上の人物の氣質や性格や、又それに應ずる凡ての行爲は、若し此人物を育成し、且つ作りあげたる、其熱帯の透明なる大氣の内に於て、若くは其地方の太陽の光線の下にするにあらざれば、到底了解せらるべきものに

あらずと云ふ事に就ては、何人も異論を唱ふることなかるべし。さて古代の希臘の豪傑がアテーン市に在る圖とか、又はヨハンの曠野に佇める圖などをば、土地、人情、氣候を異にするベテルブルグの畫室に在つて描くに當つてや、先づ寫生の爲めに借るべき人物に、一般の黃味を多く加へ、光線を強くし、又は陰影を黒く描きたるだけにては、充分なるものにあらず、これ元より寫實主義と名づくるに足るものにあらざるや必せり。

彼が見解よりせる寫實主義の一面は斯くの如し、又其主義の他面に就きて談ずらく、

總括もなく、觀念もなく、唯赤裸々たる表現のみが描かれたる所に於ては、或は寫實主義の或る性質の現れたらんやも知れざれども、爰に全く其主義の現れつゝあるものにあらず。即ち觀察と通覺と事實とに基いて作り出さるゝ所の意識的寫實主義は茲にはなし。先天的に作り出されたる原則より組織せらるる理想主義とは正反對なるものなり。

美術に於ける理想主義と解釋するの言は、少しく極端なり。是に於て理想主義の

問題を提出すべき場合にあらざるべし。彼の文中に、況や佛國の諺に、退屈のある物を除くの外、美術は皆可しとするものなり云々といふ事あり。さらば彼の作を見れば、一として退屈するものなしとせば、彼の主義の極端なる寫實に傾けるを非難するにも當らざるべし。兎に角彼が諸作品は、非常に極端に一種の理論上の見解を現じたるものなれば、彼が作品を見る時は、孰れも多少其理論を徹めかすを見る。

さて彼が作品の凡てを便宜上二大別するを得べし。第一は風俗畫なり。こは印度畫集全體、トルキスタンに於ける作品の大半、戦役中の作の少數等を含む。此種の畫は一切觀念を現さんとせず、而して又取立て、注目に價するものもなし。第二、彼の繪畫は彼の獨立の觀念を現さんとして作りしものなれば、其極端なる主義と其議論の特別なる點とを現したり。此部類に屬するものは、戦役中に畫きたるもの、又は其後其戦役を題目として描ける大半、題を新約聖書に取りし小品、一八一二年のナポレオンのモスコイ敗戦の畫集全體なり。よしや繪畫の技術上に興味を有せざるものも、第二部の作物には、非常に興味を有せずんばあらず。此作

物には特殊の見解表れたり。彼は一般の觀念を成るべく圓滿に美術的に現さんと努めたるのみならず、彼が描き出す事柄に就て、自家の見解を發展せしめんとしき。例へば露土戦争中の作、又はナポレオン敗戦の畫などにては、觀者をして戦争の恐るべきことを曉らしむるやう努めて描き出せり。此主義は實に立派なる寫實主義なること言ふを俟たず。此觀者をして恐怖を抱かしめざるべからずといふ事が、必ずしも美術の範圍に屬するものなりや否やは疑問なり。且つ斯くの如き主義は美術の創作の範圍を狭むる不便あり。

彼は佛蘭西にありて、ジエロームに師事せるを以て、其主題を表現するに、一種の癖あり。癖とは多くは歴史上又は逸話的なる一事實を取りて、之に自家の色彩を帯びしめ、特種の議論に適用し、時としては偶然的なる一種の思想を此事柄に附加せんとすること是なり。此癖は例へば彼の作「シブカ河畔」包圍攻撃などに現れたり。前者は題目の示すが如く、シブカ河の或る岸邊に、一人の哨兵が零度以下二十度の嚴寒中に立てる圖なり。又後者は兵卒が半身は雪中に埋もれて、殆ど凍死せんとせる圖なり。凡て斯くの如く彼は實戰の裏面を表現せんと努力せり。この癖

は聖書を主題に取りし作物中にも現れたり。即ち彼は伊太利の文藝復興期より傳はりし宗教畫が、凡て歴史上の事實に符合せざるを主張せるを以て、聖書の事柄を描き出す事には、一種の特殊なる調子を有せり。言ひ換ふれば最も事實に近づけんとして、其時代を最も誠實に表現せんとせり。斯るが故に彼の作物は歴史畫と云ふよりも、バレスチナ地方の風俗畫と化し去りて、聖書中に記されたる内部の觀念も消滅せる譏は免れざるが如し。

彼はナポレオンが露西亞を征伐せる頃の種々なる出來事を描きたるが、其作にも屢、此非難あるを免れず。彼は今日まで非常に多くの歴史畫を描きたるにも拘らず、又其天才の非凡なるにも拘らず、其歴史畫は今日に到るまで世人を感動せしむるもの少し。こは大に彼の爲めに惜むべき點なり。されど其技術の精巧なるより云ふも、又其創造の優秀なるより云ふも、永く二十世紀初頭の戰爭畫家として、芳名畫史を照らすを疑ふ能はず。

附 レビン

ウクレシチュヤイギンよりも更に眞實の意味に於て現代露西亞の繪畫を代表するものは、イリア・エフイモイウイ・チ・レビン (Ilya Yefimovich Repin) なり。彼は一八四四年、ハリコフ (Harkov) のチュグン (Tschugun) に生れたり。貧しきコザクの一小吏の子なり。その地にて無名の一畫家に師事し、その一八六五年、二十二歳にして首都ペテルブルグに出で、アカデミーに入るまでは、聖者の肖像等を描きて糊口の料となしき。されど一度首都に入ると共に其天才は早く同輩を壓し、一八七一年、其作によりて金牌を得、且つ六年間遊學の資金を與へられたり。

當時露西亞は農奴開放によりて國民の感情に一大動搖を來せる時代にして、イワン・クラムスコイ (Ivan Kramskoi) の下に集れる一團の青年畫家は、當時の美術界に反旗を繯し、一八七〇年、新派の美術團體を組織して、アカデミー派の檢束を破らんと企てたり。レビンも亦クラムスコイの感化を受けたる一人なりき。

一八七二年、彼は外遊に先だち、露西亞、波蘭、及びチエックの音樂家の等身像をモス

コーの一樂堂に描き、其翌年には露國最大の名畫と稱せられし、ツァルガの曳船人夫(Buleki)の大作を維納にて展覽に供したり。

レピンは羅馬及び巴里に遊びて博大にして自由なる技術を學びしも、其着眼は常に故國を離れず、露西亞的色彩は、ウレシユチャイギンに於けるが如く、レピンに於ても其畫の一大特色たるを失はざりき。國民的傳説を材とせる「サドコ」(Sadko in the Wondrous Realm)の一作は彼が當年の傑作にして、彼は之によりて一八七六年、十三歳にしてアカデミーの一員に擧げられ、次て其美術學校の教授となれり。此時代のレピンは多く歴史傳説に筆を染め、次て風俗畫に轉じ、更に一八八六年以後肖像畫に於て一新生面を開けり。

The Czarevna Sofia at the Chapel-Window. (1879)

Return of the Dying Soldier. (1883)

Back from Siberia. (1884)

Ivan the Terrible and his Stain Son. (1885)

Saint Nicholas Staying an execution. (1889)

等は彼が歴史畫風俗畫に於ける傑作にして、肖像畫としては「リスト」(Liszt)「ルビンスタイン」(Rubinstein)「ガルシン」(Garshin)「ピセムスキー」(Pisemskii)「トルストイ」(Tolstoj)等の逸品あり。

レピンが初期の作には厭世苦悶の色著しく、多くの人々が黙々として生活の苦痛を忍びつゝある状態を描きて、之に無限の同情を寄せたる趣ありしが、其後期に入りては、陰鬱の氣稍薄れて、次第に幸福なる氣分を表せる趣あり。

レピンの畫は其前後を貫きて適勁なる筆力と自由なる手法とを示し、特に肖像畫に至りては、獨自一己の風格を帯びて、其人物の性格を躍出せしむ。鋤後に立てるトルストイの肖像の如きは、其最も著しきものなるべし。彼の作はモスコイのトレチャコフ畫堂(Tret'yakoff Gallery)に藏せらるゝものみにて既に五十を超ゆ。

第六編 彫刻家

第二十七章 トールワルドセン

一 無教育の少年生活

十九世紀の初年を飾りたる絶大の彫刻家トールワルドセン(Thorwaldsen)は、名をベ
ルテル(Bertel)と云ひ、一七七〇年十一月十九日を以て丁抹に生る。彼の生年月に
就ては異論紛々たり。或は一七七二年なりと云ひ、又或は一七七九年なりと云ふ
も、一七七〇年説はトールワルドセン自身の記せし所なり。又傳へて云ふものあ
り、彼は海上にて颯々の聲を揚げたるなりとされど、こは信を措き難し、彼は貧家
に生れて缺乏の中に生長したるものなれども、其家は素と名族にして、長くイヌ
ランド(氷洲)に住せしものなり。是等祖光の中に、十二世紀の頃、已に偶像を刻むの
妙技を以て優れしものありき。トールワルドセンの父の時に至り、終に住み慣れ
たるミクテパイ(Myktemose)を去りてユベシハーゲンに至り、木彫者として糊口の

途を求むることゝなれり。されど父は別段に此點に於て人に優るの技を有せしにはあらざりき。

少ベルテルは幼にして殆ど何等の教育をも受くるに至らざりき。彼は唯其母よりして僅に讀書を學びしのみなりければ、其年二十七にして羅馬に遊學するに當りては、改めて己れの國の文法を學ばざるべからざりしほどなりき。されば彼は至つて筆不精にて、晩年書信の要ありし時すら、尙且つ友の手助けを頼みとし、若し手傳ひを得ること能はず、兎に角己れの手にて之を認めざるべからざりし時には、三度も四度も草稿を更へて漸く一本の手紙をものしたりと云ふ。

書くこと讀むことに就ては、其教育の貧弱よりして彼は自から他に劣るの已むべからざりしかど、其美術の嗜好のみは實に其天分と云ふべく、彼の父は彼に教ふるに圖書を以てし、彼は早くも此方面に於て其英才を示したれば、廿一歳の時、美術學校の圖書の學級に生徒として入ることを許さるゝことゝなり、少年天才は學校に通ひながら尙其餘時を家業の爲めに費し、終には父が船首の飾を刻むに際しては、己れ先づ其下書を描きやるほどゝなれり。此木彫業は次第に其範圍

と數とを増加せり。トールワルドセンの父は其子の中々に役立つを見、之を學校に送りて有用の時間を消費せしむるを無益なりとし、家に引き止めて、一家の爲めに己れを助けしめんとせり。彼の郷人の記する所によれば、ベルテルは背高く色白き若者にて、弊衣を着け、頭髮を梳らず、日々父の道具を擔ひて船渠に赴き、之を助けたりとぞ。

一七八五年、ベルテルは進級して前途益々希望多き身となりたるに、彼の父は家業の爲めなりとて之をして廢學せしめれば、彼は之より一年の間、空しく父の許にありき。然るにトールワルドセンに取りて至幸なりしは、折しも彼と共に美術學校にありし友人輩が彼の天才を知りて、空しく之を陋巷に埋没せしむるは傷むべきなりとて、百方盡力して復校せしむるの運びとなせしことなりき。トールワルドセンは之より愉快に己れの技を磨くことを得て、十九歳の時には已に其作を以て賞を得るに至り、それより居ること二年にして、該校の小金牌の懸賞に應ずる事となれり。競技は各競争者をそれゝ一室に入れ置き之をして絶對に他よりの助力なしに與へられたる題材をものせしむるものなりき。この考試は

トールワルドセンの身に取られては苛しと思はれければ、彼は心頗る隠し、中途之を止めて去らんとし、階段を下りんとしたるに、教師の一人は之を發見し、早くもそれと察して彼を呼び止め、詞丁寧に其故を問ひて事實を得、その兼ねて彼に囑望しけるより、百方其短慮なるを諭して思ひ止まりしめ、再び試に應ぜしむる事としたり。トールワルドセンは是に復活せり。彼は斯くて四時間にして其作物を成就したるが、其疑懼の情を以て之に臨みつゝありしにも拘らず、彼は審査の結果、終に衆を壓倒して第一位を得るに至りき。これ、休みの戀愛と云ふものなりき。

二 希望に富める郷里の生活

此成功を贏ち得たるトールワルドセンが前途は輝けり。美術の保護者は皆彼に囑望し、彼は王廷の建築師の用ふる所となりて、今や多少の收入を有するに至れり。此外彼は尚色々の仕事をなして貨殖し、或は肖像を描き、或は圖畫の教授をもなせり。彼の希望は今ほ學生として無上の榮譽たる美術學校の大金牌を得んとするの外、他なかりき。

一七九〇年、彼は丁抹の一公主の彫像をものせり。これ其最初の傑作なり。素と肖像畫を摸寫せしものなれども、中々の出来なりき。續いて多少の成功を以て色々の作をものせしが、一七九三年に至りては、彼は進んで其生涯に一紀元を劃するほどに凸彫を成就したり。これ、聖ペテロの癩痺患者を療するの像にして、彼は之を以て其宿年の望たりし大金牌を握る事を得、其地位はこゝに俄然として高まれり。彼の收入は膨脹せり。彼は又國務大臣ペーテル・アンドレアス・ファン・ベルンストルフ (Bernstorff) の肖像をものしたるが、一七九八年、彼は之を更に羅馬にて大理石にてものしたり。大臣レウニントロフ伯 (Leventhal) は之を見て其技を嘆賞し、トールワルドセンに三年の遊學を許したれば、彼は一七九六年五月二十日を以て丁抹軍艦に投じて、コペンハーゲンを出帆し、翌年二月に至りて漸くナポリに着せり。

三 伊太利に遊學す

トールワルドセンが伊太利に於ける逗留は、初めの程は餘り幸多きものにはあ

らざりき。懷郷病の爲めに、彼は幾度か郷里丁抹に歸らんと思ひ立てり。されど一七九七年三月八日、彼の羅馬に轉ずるに及びて、彼は一切の斯かる妄念を征服するを得き。當時有名なるカノーヴァ(Canova)は羅馬にて正に其名譽の頂點にありたれば、トールワルドセンの之によりて鞭撻せられたるもの尠少ならず、且つ此地に考古學者ゾエガ(Zuegg)と交を結びたり。ゾエガはトールワルドセンの作物を遠慮なく批評し、之を鼓舞せり。

トールワルドセンは丁抹の美術院より受けたる四百クラウンの年金のみにては、固より生活に餘裕なかりしも、之より汲々として古人の大作の研究を始め、次て英國の畫家ウォーリス(Wallis)の依囑を受けて彼の風景畫中に人物を描き、之によりて米鹽の資を補ひ得たり。

彼は次にヤソン(Jason)の立像の爲めに努力すると一ヶ月にして、一旦此作を破壊し、更に一八〇二年を以て第二の作を試みたるが、こは其出來の頗る良かりしより、カノーヴァの如き之を讚美しけるも、買手なく、而して彼がコペンハーゲンの美術院より受けたる留學の期限も纏て盡き果てんとしければ、彼は不本意なが

らも、伊太利を去りて歸還せざるべからざるべきと思ひつゝあり。出發の期日も早や取り定められつゝありしに、一日英國の富める銀行家にて、兼ねて美術の保護者として知られしトーマス・ホープ(Thomas Hope)のトールワルドセンが作事室を訪ひ來るあり。此人ヤソンの模型を見て、痛く之に傾倒し、即座に其大理石像をものすべきを要求したれば、少年彫刻家は之によりて幸にも尙羅馬に滞在して其研究を持続するを得るに至れり。されど其不健康の爲め、彼は尙多くの創作に著手するの暇なかりしが、一八〇三年、丁抹公使の紹介にてフムボルト(Humboldt)男爵を知るに及びて、彼は男の邸にて當時の名流と交を結ぶことを得、之より成功の氣運は著々として此天才の身上に向ひ來れり。彼の作「バカス」(Bacchus)、キエーロ「ピド及びプシケ」(Cupid and Psyche)及び「アポロン」(Apollon)其他の多くの立像は皆これ當時の作品なり。彼は是等の成功によりて大に公衆の注目する所となり、一八〇四年十月十三日、フィレンツェ(Firenze)の學士院は彼に其教授の地位を捧げ續いて故郷コペンハーゲンの美術院の一員に推され、一八〇八年三月六日には、羅馬府聖ルカ美術院の名譽會員となり、彼は此際其入院の作物として「アゲニオル・メン

(A Genio Lumini)なる凸彫を出品したり。こは美術の士が手に書板を抑へて鼓吹の神靈の燈火に油注がんとて到るを待つ様の様を刻みしものなり。一八一〇年丁抹王はトールワルドセンを新にダネブログ(Danabrog)の士爵に叙したれば彼は後には羅馬にてカヴァリエアルベルト(Cavaliere Alberto)の名を以て知られたり。一八一二年、ナポレオン帝の命によりてアレクサンドルのバビロン入城を凸彫にてもせり。ナポレオンは之によりて自己の勝者として羅馬府に入りたるを寓意し、之を巴里のマドレーヌ(Madeline)堂に飾らん必底なりしが、トールワルドセンは初めは之を羅馬のキリナル宮(Quirinal)に据ゆるの考にてもしたり。ナポレオンは其勞として三十二萬法を與ふるの約なりしが、彼の敗れてエルヴァに流さるゝに及びて、此作は終に十萬法にて一私人の手に歸しぬ。

一八一二年二月十二日、トールワルドセンは維納の帝國美術院の一員に推選されたり。一八一五年には彼は多くの煩しき出來事の爲めに忙殺されき。其内彼自らの不素行の所産たるものも亦尠からざりき。彼は此時閏々一夜を不眠に過せしことありしが、翌朝床を蹴つて起つに及びて、神興に乗じ、一日にして、夜と朝の

美しき凸彫を造り上げたり。これ一八一五年の事なり。こは彼の第一等の作の一として公評せらるゝものにして、就中「夜」の方は一層に美なり。是には「睡眠」と「死」との二兒を伴ふ一婦人の像刻まれ、睡眠も死も共に休息の態度にあり。此作寶石貝殻の上にもものされたるが、後色々の材料を用ひて之を再刻せり。トールワルドセンは斯くて毀譽共に紛々の間に、羅馬に富貴の生活を營み、上流の教育ある社會と交際し、バルベリニ(Berberini)宮の近くに居を占めて、數多の書生助手の手傳ひを得つゝ、頻りに製作に従事せり。此頃希臘のエイギナ島(Aegina)にて古代の大理想彫刻が發掘され、パザリア公は十五萬法にて之を買ひ求めたるが、トールワルドセンは此作の修繕恢復を依頼せられて此業に従ふもの一ヶ年、之によりて其業の完きに及びて報酬の外に、羅馬なる考古美術院の一員に推選せらるゝの榮を得たり。一八一七年九月、ベルギア(Belgia)の美術院は彼に位記を授けたるが、彼は此年、又「三グレース」(Three Graces)の彫刻を以て其名譽に一段の光彩を添加したり。

四 名譽の歸國

トールワルドセンの名聲の籍甚なるに従ひて、郷里の人士は彼の如き天才を産出したるを名譽とし、之を迎へて聊か其敬意を致さんと歸國を勸むるもの頻々たりしが、彼は漸く一八一九年に至りて久々にて故郷の風月に親むべく決心し、同年七月十四日を以て羅馬を去りて先づ瑞西に至れり。時にルーツェルン(Luzern)にては一七九二年八月十日、佛王ルイ十六世及びチイルリイ宮殿を防護せんとて難に殉じたる勇敢なる瑞西傭兵の爲めに記念碑を建設するの舉あり。トールワルドセンは此大作の製作を託せられて、一八一八年、必死の重傷を負へる獅子の像を刻みき。初めこは銅像とせらるべき筈なりしが、トールワルドセンは花崗石に刻む方よかるべしと主張して此議を容れしめ、此目的を以てルーツェルンに該獅子を飾るべき三十二呎九吋の高き臺壁を造り上げさせたり。彼は元來獅子を目撃せしことなかりければ、之に就ての古き作物を摸し、斯くて事業の其功を竣へたるは一八二一年八月なりき。

一八一九年十月三日、コペンハーゲンなるシヤイロンテンボルグ宮殿にて凱旋の大藝術家トールワルドセンの爲めに一大歓迎會は開かれ、次て十月十五日には美術院にて更に之が爲めに宴會あり。此際コペンハーゲンの全市は之に参列したり。賀詞や萬歳の聲は、丁抹の美女、我トールワルドセンがグレイスの神なる喝采と共に起れり。尙又トールワルドセンをして王室の招待に應じて宮廷の儀禮を破るの虞なからしめん爲めに、故らに之を参議の高官に任ぜり、彼が丁抹にての第一の仕事は、國王、王妃、其他王族を刻する事なりき。斯くて一八二〇年八月十二日を以て、彼は郷里に別を告げ、道に露帝アレクサンドルをワルシヤウに見て又伊太利に歸れり。彼はワルシヤウにて自身の肩像をもせしが、去らんとするに臨みて露帝は彼に贈るに數多の金剛石を鑲めたる指環を以てし、且つ之を抱擁せり。彼は又波蘭にて此地生れの大理學士、大天文學者たるコペルニクス(Copernicus)の爲めに其立像を建つるの舉に賛成し、該像は一八三九年五月十一日を以て除幕式を行はれたるが、後終に破壊されたり。

一八二〇年十二月二十八日、彼は又もや羅馬にあり。羅馬の都人士は盛宴を張り

て彼を迎へたり。列するもの藝術家百五十人あり。丁抹の一親王の如きも亦其中にありき。

之より彼の従事せし大作甚だ多く、彼が一作を出す毎に、創作に又其模作に、各方よりの注文は續々として彼の許に飛來せり。彼は長く法皇ビオ七世の墓の製作に従事せし爲めに、大に加特力教徒の惡む所となれり。これ蓋し新教徒たる彼如きをして神聖なる聖ペテロの大殿堂を裝飾せしむべきにあらずと云ふに出でしなりき。彼は此製作の爲めに美麗なる法皇の法衣を借受して忠實に之を摸し、彼が此法衣を借り受けつゝあるの間は、何人も彼の仕事室に入るを許さずと介せられしほどなりき。彼は古き美術品を愛好するの情旺にして、立像や古錢や寶玉の珍貴なるもの數多を蒐集せり。會計を取扱ふ男の不埒の爲めに、是等の品の盗み取られしも亦尠からざりしと傳ふ。

彼は又皇后ジョセフィンが先夫の子ロイヒテンベルグ公ユージョーヌ・ポーハルチー(Eugène Beauharnais)の墓をものし、一八三〇年三月十二日を以て之を公衆に展示せり。ミンヘン市の聖ミハエル教會堂にあり。翌年五月一日、佛國政府は彼の此墓

及び凸彫アレクサンデルの凱旋の出來に對して彼に送るにレジオンドンヌルの勳章を以てせり。一八三一年、有名なる樂士メンデルズゾーン(Mendelssohn)は又羅馬に遊びて、トールワルドセンと交を結び、此大彫刻師に關し、其書簡中に嘆美の情を致せり。トールワルドセンは音樂をも愛好し、殊にギター(Guitar)に於て妙技を有しき。之と同時に英國の歴史小説家サ・ウォータ・スコットも亦トールワルドセンを訪ひ、彼等は交、其胸臆を吐露すべき何等共通の國語をも解せざりけるが、其會話は甚だ快活にして、トールワルドセンは終にスコットが肩像をものするに至りき。

五 再度の歸國 その死

之より先トールワルドセンの第一回到歸國せしや、彼は耶蘇及び十二使徒の立像を刻すべく囑託されければ、其羅馬に歸るに及びて之に着手し、此作漸く一八三八年に至りて大成したり。こは現に、コペンハーゲンのフリー教會堂(Freikirke)に安置せらるゝものなり。彼は此作の成就するや、再度の歸國を計畫して、八月十

三日、丁抹海軍の一軍艦に乗り、九月を以てエルシノール (Elsinore) に着せり。日曜の朝に丁抹の國寶として尊崇する大彫刻士の到來せることが世上に知れ渡りければ、コペンハーゲンの全市は動搖めきて之が歡迎にと奔命し、瑞典及び丁抹の代表員の一行は、樂隊を率ゐ、一汽艇に乗じて之を迎へんと出向し、市の商工業者各組合は、端艇にて出かけて、各艇にはトールワルドセンが傑作の模様を縫箔したる旗を樹て、老ひたる而も巖丈の巨匠の上陸するや、一齊に兼ねて作り設けたる歡迎歌を合唱して、彼の爲めに歡迎の辭を述べ、大彫刻士の風采を垣間見んとて路傍に集まれる群集は、如何なる空虚にも竄入して殆ど立錐の地なからしめたり。此有様は獨り彼が着府の一日のみならずして、其住家と撰定せられたるシャーロットンボルグの宮殿なる彼の居室の前には、連日訪ひ來る馬車の列を絶たず、宴會や觀覽にの招待は絶え間なく彼を忙殺したり。これ實に彼が最も得意の時なりき。

一八四一年五月二十一日、彼は羅馬に歸らんとコペンハーゲンを發せしが、氣候の嚴烈なるが爲めに、其旅行を徐々にして各市府を歴訪し、到る處歡迎せられて、

其羅馬に着せしは年の九月十二日なりき。彼は此地に止まること一年餘、一八四二年十月、又其地を去りて三度目の歸國の途に就くの時に至りき。其間彼は主として宗教上の作品に従事せり。バプテスマのヨハネが説教するの像の如き、其最も有名なるものゝ一に屬す。

彼は最後の瞬間に至るまでも孜々として其作に従ひしが、一八四四年三月廿四日、コペンハーゲンの劇場にて俄然死去し、其遺骸は三月三十日、盛大の葬儀を以て埋葬せられたり。コペンハーゲンの全市は此巨匠の長逝を傷みて、喪に服しぬ。彼の遺骸はシャーロットンボルグ城古代彫刻室の中に莊嚴に安置せられ、之を葬るに際しては、數年の美術家之に向つて別れの歌を歌ひ、其像を棺の蓋に刻し、人々の捧げし花の中には、丁抹の女王より贈られたる美しき花環もあり、四十人の藝術家は花の驟雨の間を之に付き添ひて、フリー教會なる埋葬地へと赴きたり。此フリー教會堂こそはトールワルドセンの遺骸の四年の間、安置せられし所なれ。コペンハーゲンの美術館は一八三八年を以て其建築を始めたものにして、こはトールワルドセンが一代の凡ゆる創作及び模作を陳列寶藏せんことを其目

的とするものなりき。トールワルドセンは其働き蓄へて巨富の大部分を此館の建設及び維持に投じ、其最後に歸國するや、此處にて歓迎せられたり。建物は一八四八年を以て竣工したれば、年の九月六日を以て、大彫刻士の遺骸はフリーデ教会堂の墓地よりして此美術館の中央なる新墓地にと移されき。彼の記念碑は羅馬なるバルベリン宮殿に一つあり。今一つはイスラランドなるライクヤウタ(Reikjavik)にあり。前者は門人エミール・ウォルフが作なり。

門人中の秀才として知られしは、丁抹人にはフロイインド(Freund)及びビッセン(Bissen)あり、獨逸人にエミール・ウォルフ(Emile Wolf)、シヴァンターマン(Schwantaler)、ノン・テ・ル・ラウニッツ(Von der Lannitz)あり、伊太利人にテネラニ(Tenerani)、ノナイメ(Bienaimé)あり。

六 その短評

トールワルドセンの作にして現存するもの二百有五種ありと云ふ。世界の大會にして彼の創作の模作を藏せざるものなきを以て之を見るも、彼の技の如何

に一般の評価する所たるかを推するに足りぬべし。彼は蓋し擬古的彫刻の模倣者の中確に最も成功せし者にして、其ものせる古代諸神の立像は多く構圖の幅と純潔とに於て古代美術の精神を攝受せり。之に比しては彼の耶蘇教關係の彫刻物は、聖ペテロ教會堂内のピオ七世の墓と云ひ、コーペンハーゲンなる耶蘇及び其十二使徒の立像と云ひ、稍劣りて、純乎擬古的なる作者の眞の同情に適應せざるものあるを認めざる能はず。彼は容貌秀美にして、舉止快爽、其巨富を以て自在に食しきものを賑恤もしたるがされど、彼の後半生に於ては彼は吝嗇にして其私行甚だ賞美すべきにあらざりき。

彼の製作に従ふや、時としては猛火の如くに之に熱することもありたれども、亦時ありては數月の久しきとを怠ることもありき。其良作の多くは英國の私人の手に歸し居れり。彼のものせるバイロン像はさほど成功せる作にあらず。こはウェストミンスター葬地に置くことを拒絶せらるゝに及びて、終にはケムブリヂなるツリニチーカレッジの圖書館に樹てらるゝこととなれり。彼の作中最も知らるゝものは多くは凸彫なり。夜と朝の如き是なり。

第二十八章 ローダン

一 現代藝術界に於けるローダンの地位

十九世紀の後半、文藝の野が新しき人の新しき型を以て耕されたるの例少からず、小説に於けるトルストイ、劇に於けるイブセン、詩に於けるワルト・ホイットマン、音楽に於けるワグネル、繪畫に於けるホイッスラー、其名の特に大なるもののみを採るも、皆藝術に新精神を齎らし、將た何等かの點に於て新形式を附與せるものなり。是等創造的精力の同じ類型の中に、我等は今やローダン(Auguste Rodin)の名を加へざるべからず。是等諸の藝術家の作品の傾向は、藝術をして在來縮の桎梏を破つて、理性を刺激するの力を與へ、其勢力の及ぶ所をして、常に藝術に意を致すの士のみならず、最も深遠なる意味に於て人生に留意するの人々にまでも至らしめんとしたるにあり。されば其勢力は凡ゆる方面に及びて論争の題目となりしこと、恰も人生の深遠なる問題が論争の題目となるを常としたりしが如し。そは人を魅し人を酔はしめんとせるが如き種類のものにあらず、訴ふる所實に

理智を通じたるの情緒にあり。故に人を魅し人を誘ふの所あらば、そは人間と宇宙との關係を叙する所に止まるのみ。

イブセンが朔風蕭條たる諾威の小さな町に起りたる事件を其劇の題材とする時、其藝術は化して小宇宙たるの趣を呈し、トルストイがアンナ・カレニナとレヴィンとを描くや、其處にある問題は露西亞の一階級の問題にあらずして、永遠に男子と女子との間に生起し、講究せられ、解決せらるべきの問題なり。而してローダンは彫刻の世界に之と相似たるものを齎らせる第一人者たらざらんや、彼が藝術は其表現する貌以上の何物かを摸索せしむ。不思議なるまでに哲學的なり。其昔希臘の生活が其藝術に表現されたるに似て、彼の藝術は近代生活の條件と思想との産出せるものに他ならず。而も彼の作品に表るゝ思想は、所謂希臘の清嚴と稱するものとは其選を異にす。明朗なる空氣と、規則ある生活と、體育堂と、神殿との間に概ね過されたるヘレンの住民の動靜は、其彫刻に現れ、人體を愛好する彼等は遂に自己ならぬ完全なる想像の人類を創り出せり。オリンピックの神族、數多の力士、何れか這般底のものならざる。されば希臘の彫塑家は即がて時代の思想

と感情とを忠實に翻譯せるものにして、わが近代の彫塑家が過去の遺物なる彫刻製作を模倣するを力むるよりも、斯くの如き點に於て古人の姿を續ぐは寧ろ悦ぶべき事にあらずや。此點に於てローダンは古典的精神を續ぐとも言はるべきか。

現代の彫塑家にして時代を反映するもの彼に超ゆる者ありとも覺えず。而して近代生活が少くとも劇的なるに於て古代生活より豊富なる以上、彼の作品が古代製作以上に出づるものあるは、又自から肯はるべきことなり。激甚なる商業上の競争、急激なる科學の進歩、思想界の活潑なる推移、之に應ずるに飽くなきの好奇心と、絶えせざる渴仰不安の念とが、最近の一世に瀾蔓せるの結果は、人性をして低徊踟躕せしむるを許さず。斯くの如き紛亂せる心意と重暗なる感情との中にありて、藝術は舊來の古典派、浪漫派、寫實派等の型式の中に分彙せらるべからざるの表現方法をとりぬ。そは既に希臘藝術の如く、抑制壓縮せられたる智慧を現すものにもあらず、伊太利文藝復興期の藝術の如く、宗教的感情に誘致されたる燦爛として抑ふべからざる活力を示すものにもあらず、實に内省的經驗的

神經的等の言葉を以て形容せらるべきものなりき。

ローダンは斯くの如き精神を藝術に現したるものなりき。心直く、力豊かにして、彼は自ら識らざるの裡に、神祕縹緲たるの境に漂ふ。ローダンの藝術を語るや、猶農夫が耕耘を語るが如し。彼は常に自然を語り、その秘密を説き、其美を讃ふ。而も問題は皆藝術に關する以上のことに出でず。彼が自然に近づくとや、豫め何等かの觀念を以て後に至るものにあらず。彼は自然を整ひ理めんと僭するものにあらず。蓋し自然は自からにして其形を整ひ、姿を理むるものなればなり。彼の語に曰く、自然は自から成ると。

彼の物を撰ぶは猶所謂リシボスの物を選ぶが如し。自然は彼を教ふるものたるなり。曰く、自然は美しき形式と計畫とに満ちたり。而も多數の人士は之を看過し去つて何物をも見ず、徒に舊態を描き、昔ながらの姿に之を見、之を作る。然るに此間常に自然は悦溢るゝ新しき形式に満ち誇る。之を花に見、蕾に見、手に見、足に見、將た街頭須臾にして過ぎ去るの事件に見ると。又曰く、我唯摸すべきものを永く觀る、其姿の如何にあるべきを求めず。譬へば放たれたる駒の如く、自由に其研究

室の中を歩むを許す。而して我は我觀たる所を寫すのみ。此耐忍によりてのみ我は時あつて、希臘のものに見る如きを造る。唯これ勞作によりて得るのみ。決して其像姿を摸して得るにあらずと。されば彼の藝術を考察せんには、先づ此自然觀に歸りてするを要すべく、而して此見地の決して寫實家がとる如きものにあらずして、詩人がとり、夢みる人がとり、哲學者がとる所のものたるを知る。自然は彼に於て常に抽象觀念の具體的感覺なり。膏土と大理石と銅とは、彼が其中にありて思考する所のものにして、彼の思想や徹頭徹尾軟土的なり。而して彼が勞作の形式は決して小逸話的のものにあらず、瑣末なる説明を放れ、些末なる人事を超越す。自然は彼を通じて其大計畫を語る。彼が其作品を數ふるは音樂家が其作曲を數ふるにも比ふべからんか。而も彫塑に於て雄辯ならんとせば、型を摸するの術に長ぜざるべからず、更に言ふを得べくば、稍誇張し、稍何物かを犠牲に供し去るを必要とす。彼が自然を描くや、其自由にして表情の著しき時のみを以てす。而も其自由の氣と、表情の溢るゝの意を現すは、其材料を藝術家として扱ふの技に待たざるべからず。これ素より藝術は自然にあらずして、其變ぜられたるものた

るの事實に歸す。畫家にして一樹を描いて悉く葉を畫んか、一屋を畫いて悉く瓦を描んか、其結果は知るべきのみ。レオポルド・アイドリッツの稱ふる所をして眞ならしめば、藝術は物質に表現せられたる觀念にして、藝術に於ける美は、表現せらるゝの物體に存せず、表現する方法に存す。ローダンは、自然に醜きものなしとする一人なり。然れども自然には人をして何等の快樂と觀照とを興へざるべきものあり。而もそは藝術に表されては美しきものとなる。斯くの如き理論は此彫刻家の作品に多くの興味を有する吾人にとりては頗る傾心に値せずとせず。

二 短き學窓生活

願ふに一人の藝術家の傳を記して、分割列序、如何に科學的なりと雖、遂に精髓のあるものを摘出するやは大に疑問に屬す。されど其血族、其日常生活、其周圍を語るは決して興味薄きものにあらず。斯くの如きことは、其創作的精力の發現せんとせし方向の上に幾分の燈光を點ずるの例なきにあらず。革命的、急進的なるロダンの如き人の場合にありては特に其然るを覺ゆ。ローダンは境遇と闘ひし

は比較的長期に失せるやの感あり。而も此間の修養が後年の大發展に資せしは言ふを須たず。ローダンが所謂公衆を得たるは中年を過ぎての頃なりき。而も其公衆たるや、多く彼にとりて敵意を有せしものなりしを奈何せん。鼻壞れたる人と青銅の時代との間には十五年の空隙を孕む。此全く相異なる人の手に成れるが如き二つの作品は、二十二歳の作者と三十七歳の作者の間に於ける徑庭を語る。彼はこれカリエペルース (Carlier Bellangé) 等の製作所の製作工として日々の賃銀を得て、衣食の資と、將來に資すべき研究費とを贏ち得たりしローダンにして、こは彫塑家として、夢見る人として、詩人として、永遠の生命と永遠の富とを嘗たと大理石とに託したるローダンなり。斯くの如きは彼が希臘の彫塑家と、文藝復興期の伊太利の彫塑家との至り得たる所と思惟せしものにして、遂に其十六世紀文明の根源地を訪ふて、ミケランジェロと、ドナテロと、ヴェロッキオと、他の古代藝術家の諸作を研究するに及びて、此秘密の本性は彼に明かなるに至りつ。青銅の時代は此發見の光輝を帯ぶるものにして、其陳列と共に、近代彫塑界に於ける文藝復興は燦爛たる曙光を地平線上に射出せるものといふべし。

ローダンはその師バリー (Barry) 或はフードン (Hudson) の如く民衆の兒なり。一八四〇年十一月十二日、巴里に生れぬ。父はノルマンディーの人にして、母はローレーヌの人、異境に相會ひたる二人は貧しき家庭を營みき。幼時暫らくボーヴェなる一親戚の許に日を送りしが、十四歳の折、ローダンは巴里に歸りて醫學校町五番地なる尋常工藝學校に送られつ。こは年少工手を養成せんが爲めの學校にして、此處に學びて後、純粹なる學士院風の作風より身を脱せるもの、フレミエ (Fremiet) あり、カルポ (Carpeaux) あり、ダルー (Dallou) あり、デュディスクラデル嬢の語る所によれば、ローダンは此處に動植物の寫生にいそしみ、模型を造るの道に進めり。彼は又ルーブルに赴きて古代藝術を圖取りし、帝室圖書館にてはミケランジェロ、ラファエロ等の複製帳を觀るを許されたり。彼が尋常工藝學校に於ける時日は彼に名譽を齎らざりしにあらず。鑄像寫生の爲めに銅牌を得、十七歳には初めて塑像の技に對する銅牌と、古代塑像の寫生の技に對する二等銀牌を得たり。而も美術院に於ける寫生と塑像との席を争うて敗れたりしが、これ後年彼をして彼たらしめし傾向の失敗なりしやも計るべからず。此他博物館に於けるバリーの

學級に籍を置いて、時々講義を聴きしこと、是等を彼が學窓生活の全軀となす。之より後は彼貧にして自ら生活の道を講ぜざるべからず、少くとも其生計に資するの何等かの策を企てざるべからず。硬膏を扼ね交へ、模型の粗材を造りて婢僕の職をなし、時ありては粗末なる裝飾を拵らへて、一日四十錢の豊富なる給料を得たりき。後さる厩を研究室の代りとして、一浮浪漢の頭を模型として、十八ヶ月の勞作の後、眞壞れたる人の面成りぬ。此早く已に熟せるもの、面影ありし藝術品は、一八六四年の展覽會の退くる所となりしが、十四年の後近代彫塑界の雄品の一と残すべく享け納められつ。此間ローダンは裝飾品製造業者の爲めに、寶玉商の爲めに、將た彼自らの爲めに、幾多の塑像を造りしが、これ又値計られざるものたり。マルセーユ、ストラスブルグ等に裝飾品の爲めに事に従ひしことありしが、其餘暇を獨創的の技能の陶冶に用ふることを忘れざりき。

一八六三年、ローダンはカリエ・ブルース(Carrier-Belleuse)と相關係するに至りぬ。ブルースは當時巴里にありて最も顧客多かりし彫塑家にして、兩者の關係は爾來二十餘年の間打ち續きたるが若き彫塑家は其時のことを回顧して曰く、余ブルースに至れるは極めて幸福なりき。そは裝飾製造人を去つて、塑像家の門に入れるものなればなりと。彼又曰く、勞作に關しては余曾つて悲まず、常に快樂を感じ。余が熱誠は甚しきものにして、常に研究を續け、研究は凡てを抱擁し了せり。余が作品を見たるものは凡て之を惡しと評し、余は曾つて獎勵の言葉の何たるかを知らざりき。余が店頭に飾り置ける頭形は一度も顧客を知らず。されば余は世と遠かりて、その余の爲めに何の用たり得べきかを思はざりき。余は屢々展覽會に至りてペローやその他の大彫塑家の諸作を讚嘆し、常に其大妙手たるを思ひしと雖、尙其寫生に於て必ずしも強からざるを見たり。彼等の手法を見ては、其美しきこと到底余の及ぶ能はざるを感じたり。此頃余は常に自然より學ぶ所ありしと雖、手法に於て遂に彼等に比すべくもあらず。其如何の故たるやに惑へり。然れども余が全く自然より手法を學び去るや、彼等の手法必ずしも良からざるを見、必ずしも眞ならざるを見たり。是等の彫塑家は自然より取られたる軟膏の鑄型より學びたるもの、余は余の模型を寫す事にのみ慮心せるなり。余は彼等が果して如何なるかこれ善く模型をとるものにして、如何なるかこれ善く模型をと

スに至れるは極めて幸福なりき。そは裝飾製造人を去つて、塑像家の門に入れるものなればなりと。彼又曰く、勞作に關しては余曾つて悲まず、常に快樂を感じ。余が熱誠は甚しきものにして、常に研究を續け、研究は凡てを抱擁し了せり。余が作品を見たるものは凡て之を惡しと評し、余は曾つて獎勵の言葉の何たるかを知らざりき。余が店頭に飾り置ける頭形は一度も顧客を知らず。されば余は世と遠かりて、その余の爲めに何の用たり得べきかを思はざりき。余は屢々展覽會に至りてペローやその他の大彫塑家の諸作を讚嘆し、常に其大妙手たるを思ひしと雖、尙其寫生に於て必ずしも強からざるを見たり。彼等の手法を見ては、其美しきこと到底余の及ぶ能はざるを感じたり。此頃余は常に自然より學ぶ所ありしと雖、手法に於て遂に彼等に比すべくもあらず。其如何の故たるやに惑へり。然れども余が全く自然より手法を學び去るや、彼等の手法必ずしも良からざるを見、必ずしも眞ならざるを見たり。是等の彫塑家は自然より取られたる軟膏の鑄型より學びたるもの、余は余の模型を寫す事にのみ慮心せるなり。余は彼等が果して如何なるかこれ善く模型をとるものにして、如何なるかこれ善く模型をと

るものにあらざるを知り、將た自然より其包含する凡てのものを捕へ得しやを疑はざるを得ず。余が記憶力強かりければ、其頃余はルーヴルにて心に副ひし繪畫を家に歸りて寫出しぬ。當時の作物は不注意の爲め何れへか失せしが、今其二三だに手に入るゝを得ば、幾千法の黄金も之と代ふるに厭ふ所にあらず。又其後余は良友の價值を知り來りたれど、其頃唯一人だにありたらんには、そは余にとりて一の世界を有するが如かりしならん。其頃余は余の作品が如何なる値あるやを知らざりきと。

普佛戰爭起るや、ローダン伍長として之に従ひ、馬肉と古麴麩とに饑うるの間に、機會だにあれば土を捏ねて物の型を造りぬ。この戰の終を告ぐるや、巴里にては生計の途にも苦むほどなりけるより、彼は去りてブリッセルにブルースに仕へ、將た學士院館に職を奉じたりしが、事を以てブルースの家を出て、ヴァンラスブルグ (Van Ransbourg) の保護によりたりしが、少時にして止みぬ。彼はラスブルグが許にては地の株式取引所の内外に飾りつくべき彫刻に手傳へり。此頃彼が其特色ある傾向に進轉し來れることは既に蔽ふべからず。一八七五年、彼は其作品の中

にミケランジェロが手法に似通ふものあるを見、錯愕踟躕稍久うして後、自ら其原由を査定すべく、伊太利に向つて旅立ちぬ。之までは彼が理論は彫刻の重んずべきは運動なるにありしが、一度此南歐の藝術の傑品を巡見するに至りて、彼は此原理が模型にあるを悟り、文藝復興期の彫刻の命の湧く處は人體の研究にありて、古代の摸倣にあらざるを知れり。

「神が世界を創造するに當りて先づ考へしは、我等をして神を思ふを得しめば、そは模型なり」とは、デュニスクラデルの言なるが、これ聽て文藝復興期が凡ての藝術に叫びし所にして、聽て又「自然に歸れ」の絶叫なりしなり。ローダンの初めて出づるや、恰もドラクロア (Delacroix) の出でしに似て、所謂「彫刻を塵殺するもの」(O'est la massere de la sculpture) なりき。斯くてミケランジェロ、ドナテロ等を研究して得る所ありし彼は、新興の勢を以て、今、青銅の時代の名の下に知らるゝ像の爲めに十八ヶ月の時日を費し、一八七七年一月、此像ブリッセルに陳列せらるゝや、毀譽相半せしとはいへ、彼が後年の運命の先驅は、此時を以て至れりといふも過言にあらざるべし。

三 「青銅の時代」

ローダン今や三十有七歳而も尙自ら表すの技を得たりと言ふべからず。彼が「鼻壞れたる人」を造つて後十四年、青銅の時代に於て初めて認められたりとせば、其社會に出づるの途は寧ろ遅きに過ぎたるやの觀ありと雖、こは根柢に於て抵抗すべからざるの強烈なる性格を有し、之を哲學的に發表せんとするの詩人でありては、往々免れざるの例にして、ダンデ、ミルトン、モリエール皆然りき。特にローダンにとりては、此時期に於て其最も大切なる醗酵期の多分を經過せしなれば、却つて先づ社會の空なる讚美の中に葬られ去らざりし幸福を思はずんばあらず。ローダンは斯くて尙一工人として其熟練に同僚を驚かし、自ら又工人として満足せしが、自らいふ、此年頃、自ら普通以上の能力あるを知らざりきと。これ驚くべき言に似たれども、偶、其標準の高くして、尋常の徒の比にあらず、飽くまで孜孜として研究せんとせし志を見るべく、恐らく時を同うせる人にして、彼の眼に所謂普通以上の能力を有するもの、果して幾人を數ふるを得たりしやは疑問

なるべし。彼がブリッセルの生活は、彼にとりて嬉しき思出の一つなりき。郊外に一室を借りて住みしが、其處に小廣き庭と一樹ありて、妻と共に暖き日に浴するを得べし。氣清く、景豊かにして、彼は幾多の瞑想と述作とに耽りたりけむ。

「青銅の時代」及び今は、某氏の肖像の名の下に知らるゝ鼻壞れたる人は一八七七年及び八年の展覽會に出品せられしが、爾來二十五星霜、青銅の時代は其名世界に轟くに至れり。初め此作を展覽會に出せし時は極めて冷遇せられ、批評壇又多く惡罵を逞うするのみなりしが、ローダンは毫も之を念頭に置かず、而も金なく友なき彼は、世人にとりてブルースが傭人たる一介の工手たりしのみなるを奈何せん。斯かりしかば、彼は思ふ所あり、自然には忠實ながら、實物よりは稍、大なる一像を造り、敵者をして其技に先づ信頼せしめんと計りぬ。これパプテスマのヨハネにて、一八八〇年の展覽會に出でたり。然るに其前年、内閣秘書補に任ぜられしエドモン・テュルク之を見て、作者の技の優れたるに驚き、ローダンに對する批難の何たるかを究めんとし、使者をブリッセルに送りて其模型を見せしめつ。加之藝術家の一團はテュルクに書を載して、其作の雄秀なるを讚へ、ローダンの大藝術

家たるべきを述べ、論議相亂るゝの態を致せしは、偶、此不遇の彫刻家をして世に紹介するの助けとなり、多くの味方を得しと共に敵をも發見したるは、却つて大に其獨特の技を發揮せんとの願を深からしむるに至りしが、此作遂に政府の購ふ所となり、最後の勝利を得つ。この作彼が三年前、シャルトル、レームスの邊の遺業を探りし影響を印して、ゴチック風の趣、在來の學士院の作風に反對せるものあるやの評あれど、素とロイダンより學士院反對の風趣を除かば何物も殘らざるべく、彼が學校の影響を受けず、學派の恩恵を蒙らずして孤行特立するの概は、雖て彼の生命たるなり、而も彼が一方よりゴチック風を加味すと言はるゝ又故なきにあらず。蓋し彼は不思議なる折衷派とも稱せられつべし。其常に曰ふ所を聽け、余は原始時代の人々、埃及人、希臘人、羅馬人等の中に在り。余は唯自然を寫さんとす。余は之を余の見るがまゝに翻譯す。そが余に起したる感情のまゝに翻譯す。余は之を整理せんことを求めず、之に構圖法を適應せんことを求めず、余は唯之を觀て、其あるがまゝの豊富とあるがまゝの生命とあるがまゝの諧調とを知るのみと。斯く自然に親近するを知らば、自から其折衷主義と見ゆるの所以も解せらる

べきか。蓋し自然は大なる折衷なればなり。此作、青銅の時代と共に八二年の展覽會に出て、國有とせられ、作者は三等賞牌を得たり。現にルクサンブールの庭園内に安置せらる。

一八七九年、カリエブルス、偶、セーヴル陶磁器製作所の友配人となるや、ロイダンをして花瓶に畫かしむ。ロイダンの畫ける花瓶一個、今國有となつてセーヴル博物館にあり。此頃普佛戰爭の餘波として舉行せられたる「國防」(La defense Nationale)の製作競争に加はる。彼は巴里の包圍の中にありし一人なれば、能く戰爭の慘害を知り、従つて其表現せるものは、殘忍慘毒なる戰魔の一群にして、他の人達の企てし如き雅趣ある裸身像等には似もつかぬものなりき。斯くて此競争に失敗し、「共和國」の製作競争にも作品を出せしが、これ將た成功せざりき。

四 官費研究 諸名作の續出

翌年ロイダンの生涯に一轉期を齎らすべき事は起りぬ。此事ロイダンをして顧眄の憂なく藝術にいそしましむると共に、其後年の作風に影響を與へたること

少からず。チルケは曾つて青銅の時代によりて此藝術家の友たるに至りしが、今や彼に裝飾美術博物館の爲めに大扉を造るべき任を委ねつ。此任命はローダンをして官費にて研究するを得しむると共に、其私の製作をなすの餘裕をも與へしものにして、爾來二十有餘年、彼未だ其製作を完成せず。此扉の高さは約十八尺、三個の幻之に現れ、全體として一個の完全なる思想を表現す。これ諸の動機の節奏にして、人の弱點と、人の運命と、人の望の僂さとを歌ふ一篇の叙事詩なるのみ。此作、意をダンテの地獄の卷に得たりと稱せらるると雖、其概念と瑣末の事象はさて措き、其落想に至りては決してダンテの流をのみ汲むものにあらず。此作に影響せるもの尙ボドレールあり、惡の華の著に於てダンテに似通ひたるものあるボドレールあり、而してローダンは端嚴なるダンテの宗教的見地より、遂に佛國頹廢派の病的なる異端主義に向つて叫を擧げんとするものにあらずや。彼はダンテを借り、ボドレールを借り、而も最後にローダン自らに到達せるものにして、されば此扉はローダンの流を出でざるものたるべし。扉未だ成らず。作者は常に詩人が詩句の上を逍遙するにも似て、此製作の上に徘徊佇望、一絲毫も其

表現の優らんことを望みつゝ努力すなり。

チルケが重要な任務をローダンに委ねしの日、雖て此不出世の彫塑家が、工手としての生活、カリエブルス等の思想を翻譯するに熟したる勞働者としての生活の終るべきの日なりき。斯くて之より二年ならずして、彼の作品は倫敦、維納に展覽せられ、一八八一年、人の創造陳列せられ、一年遅れてはローランヌ(Jean-Paul Laurens)、カリエブルス等の半身像は成りぬ。之に次てヘンレー、ロシュフォール、ピュヴィンヌ、ド・シャングランヌ、オクターヴ、ミラボー、ロージャール、マルクス、ヴィクトル、ユーゴ一等の半身像出てぬ。ローダンの天才は今や之を撓ますものなくして、盛に燦爛たる製作を續け、接吻、久遠の春、夕、カレールの街の人、バスチアン、ルバーデ、バルザック等の傑作あり。之に神祕的なる夜の霞、貧窶と疲勞、公園と少女、神の手等を加へて、饒々たる其藝術は公衆の興味と、而して多くの敵意とを引きぬ。

ローダンの政府者との關係、即ち文藝の局に當る士との間の關係、頗る好運なりしと雖、其民衆との關係に至りては必ずしも然らず。八三年、ローレーヌの首都ナンシーの町にて、畫家クロード、ゲルレの像を建てんとせしや、ローダンは選ばれて

其彫刻手となりしが、其活氣に溢れて天日に向つて立てる像を見たる地方官の一人は、此像非なり。拙なり。我等は獸にあらじの言を以て、其撤去を迫りしも、中間斡旋するものありて、此像今も尙其公園に見るべし。

ローダンの初めて藝をとるや自然と共にし、其之を措くや又自然と共にす。而も時代の推移は彼の自然觀にも推移を來し、自然は彼にとりて其昔とは全く異なる意味を齎らすものとなりつ。事實を研べ、現實當面の事象を究むれば、雖て其背後に横はる一味神祕の核心に觸接すべきは、思想の進轉する所より見て、當に然るべきのことなるべし。事實を現寫するは、其事自らに於ては一個完了せるの事象なるべしと雖、蓋し現寫の最も不完全なるものたるを免れじ。ローダン、其昔、作するに當りて事實を以て満足したりしを、青銅の時代に於て、バブテスマのヨハテに於て、クロード・デルレに於て、歴々として其跡を窺ふべしと雖、後年において、は、觀る所更に深く、彼が常に彫刻に於て新しく明かに見るを得しめんとするあるものゝ大に現れたるを見る。而して粗剛なる感情と空容なる知識とを以て、狼りに大感情と大知識とを迫害するを常とする滔々たる俗衆と、俗衆を出てたる

の聲と俗衆を去りたる衣の下に、俗衆の腐腸と俗衆の腐肉とを匿くせる比々たる所謂批評家とが、斯くの如き新しき感情の新しき表現を目標として歩を進むる藝術家を解するを得ざるは、素より其所のみ。果然彼が、バルザク像を造りて一八九六年の展覧會に出すや、遂にローダン躓きたりとは批評家の言にして、これ雪人形のみ、これ借金取を接見すべく寢床より起きたるバルザクなり、これ眼なき像なりとは公衆の嘲る所なりき。而も一方稍、觀る明を失はざるものあり。一製造業者の富有なるもの之を購はんとし、ブリュッセルと巴里とは同じ目的をもて組合すら起りしが、展覧會の終には、此像ローダンの研究室裡に再び來りぬ。而して沈黙の中に、此藝術品は其最後の勝利を得んとすなり。

ローダンの模型に對するや、注意力悉く之に集まり、鉛筆獨り紙を走り、時ありて頗る實物と合致せざるの結果に了ることあり。彼が其手帳に斯くの如くして自然を直現するの趣は、其象徴的作物にありて更に多く現る。文學特に散文學に於ける象徴主義は、饒々たるの思想が觀念となりて多く示さるゝの時に於て存す。而も彫刻の如きにありては、觀念は形象によりて暗示せられざるべからず。而し

て真理、希望、美德、春秋等は在來の所謂表徴主義が彫刻に於て古く現し來れる所なり。ローダンは之に一步を進めて、在來詩に於て多く發表されたる空想、作者其人の空想を荷土と大理石とに刻みつ、夢の草稿、影、愁ある女に語らんとす、雲、夜の霞、逃れたる戀、失望等は是なり

一九〇三年、佛國國會議員が英國の國會議員を招くや、其旅程の中、ローダンの研究室を參觀するの項掲げられたりき。後、數週間、ローダンはホイッスラーの後を續いて、國際藝術家協會の總裁たるべきを慫慂せられ、之を享けつ。其儀典に列する爲めに倫敦に在るや、王エドワード陛下は特に之と會見し給へり、斯くの如きは在來彫塑家に對して待遇其當を得ざりし社會を刺激する所少からざるべきを覺ゆ。

新しきものは勝つ、根柢あるものは勝つ。唯外形以外の何物をも見るを得ざるの徒の中にありて、學實なる努力を續けしのみは、微妙なる内性表現の燦爛たる勝利を齎らしぬ。我等は之を當に彫刻界のみの現象と見ず、一般思想界と藝術界とも意味あるの事實と信ずるが故に、此處にローダンを技工の人としての成功

を祝すると共に、思想の人としての成功をも祝せんとす。

五 ローダンの人となり

ローダンの人となり、其事務室、其邸宅に於て共通の特質と見做すべきは、其質素なるに在り。極端なる質朴なり。ローダン自らは其外貌より見るも誠實なる強き意志を包むの人にして、而も何人に對しても快活なり。彼が溫雅の風采、其懇篤の舉止は、彼の作物を非難する批評家をして、尙且つ彼の人物に傾倒せざる能はざらしむ。彼は高下に對して等しく鄭重なり。決して所謂天才膚の粗野なる所なし。曾つて一人の記者の彼を訪ひし事ありしに、其僕は一人の少女を其室に引き來れり。少女はハンケチもて包める物を手にし、ローダんに一掛して曰く、父は妾をして、之を貴下に齎らさしめたり。此中のもの或は貴下の要し給ふ所にあらざるべきやを慮りてと。ローダン之を受けて徐に開きたるに、中より裝飾石の一片出でたり。これ少女の父の掘り出せしものにして、彼は之によりて何ほどかを得んことを欲せしものならんも、實際は石は全く無價値のものなりければ、ローダンは

は懇に之を檢したる後、再び之を靜に包み、態々之を送りて示されたる好意を父君に謝し、呉れよと述べつゝ、別段に之を素氣なく拒否する底の身振りも一語もなくして歸しやり、又僕に命じて少女に菓子と橙とを贈らしめき。彼の文明紳士の禮貌を有すること例へば斯くの如し。

彼は船の高きを加ふると共に、八〇年代の寫真にて見受けしより、其風采も恰好も大に變りたり。短き頭髮は灰白となり、顎髭は長く、體軀は肥大し、頬も丸みて赤くなれり。彼の顔面は大にして、前額の皺波は益々深く、其表現も以前とは異れり。眼瞼の下には彼の哲學あり、思想はより深くなり、口の周圍に潜める談話も、徐々として語り出づる詞の力も、以前に増せり。彼は肥りて低く、其歩むや海員等に見るが如くに少しく波動を示す。彼嘗つて海濱にありしことあり、一夕、街上に彷徨せしに、醉漢あり、頻に彼の後より罵詈し來りき。後にて聞けば、醉漢は兼ねて使はれしことある船長を惡み、ローダンを以て此船長と見誤りしなりき。

ローダンの服裝も華美ならんよりも、身に適するを以て主となす。黒きフロックを着けて人を訪はんとする時の外は、其家庭にありては常に短きジャケットを着け、其

上に寒天には、緩く長き外套を羽織り、頭には頭巾を戴く。彼は又往々其ムードンの邸にては、木履を穿てり。常に粘土や石膏の間にあれば、其衣の白く汚るゝを見るも亦珍しからず。化粧としては、毎朝理髮師の來りて彼の頭髮と髭とに手入れする位が關の山なり。それすら彼は何事か手離し難き仕事ある時には、理髮師を追歸して、夫人の手入れに満足することも往々なり。彼の日常の生活は頗る其無雜作の性格と相適合せり。大抵、彼は毎朝早く床を起き出で、七時半には仕事に就く。朝食には牛乳を飲用するの習なれども、彼は食堂に赴きて之を飲むを忘るゝこと度々なる爲め、夫人は之を仕事場に持ち來る。晝食も皆質素なり。簡易なる菓子あり、水を混じたる葡萄酒あり。冬日の日曜日には、彼は八時過ぎ時には九時まで、も床より起き出でざることあり、此朝寢は前夜の來客に遅くまで接したりし爲めなり。

彼が客を接見するには、其書齋に於てす。彼は午後は此處にて仕事す。二室あり、前面は凡て玻璃窓にて張り詰められたれば、非常に明るし。但し別段に心を籠めたる裝飾品とはなし。畫人や彫刻師の仕事場は何れも一階建なれども、ローダンの

のは中にも最も飾少きものなり。床はアスファルトを敷き詰めたものにして、壁は白塗りに、少數の椅子あり、モデルを置く爲めに必要な装置あり。各室に最も質素なる暖爐一つあり、此處に来るは石や大理石や石膏や銅の見慣れたる色々の彫像を讚美し批評する舊友と、ローダンが名聲の世界に擴まるにつれて日に増加する外客なり。是等の外客には凡ゆる國籍のものあり、露國陶器製造所長の一行あり、カルネギーあり、主人は是等の客と打つれて小兒の如くに樂しげに逍遙し、作の由來苦心等に就て物語る。斯かる場合のローダンの顔面には最も鮮かなる得意の色閃めく、彼は大理石の小兒像を指しては云ふ、腕も足も皆出來よしと。アルケステスの死 (Alceste) を見ては、こは箱に納め置くべかりし。箱は墓場の用をなすべしなど興じて云ふ。一の像あり、アドメッスの妻は夫の膝の上にあり、彼女は今や夫の身代りとして死地に赴かんとし、夫の胸に顔を埋めつゝ之に別を告げて嘔り泣きすなり。ローダン之を見て曰く、マキキリは彼を地獄に引きつれ行かんとして彼等の身邊に待ちつゝあり、彼は此夫よりもよし。又泣けり。余は此作にグリュックが諧調を挿入せんと努めたるが、その成功せしや否やを

知らずと。

高名の人の困厄するは時間に於て自由を得ざることなり。ローダンは素より之に除外例たる能はざるなり。彼は仕事の時間を正しく守ること能はず、されど能く凡ての人に接し、忍び難きをも忍び、若し無邪氣なる斷りにて濟むことならば、稀には面會を謝せり。美術協會 (Société Nationale des Beaux Arts) の彫刻部の如く、彼自ら主宰するもの、爲めには、毎年の審査には必ず巴里に出府して執務す。彼は己れの藝術を評價するを得るの人に向つては殊に寛容なり。別して婦人に於て然り。彼自ら言ふ、一般に婦人は男子よりも能く余を理解す。彼等は男子よりもより注意すと。彼は時には音樂會を催して又之に傾聽す。

彼は巴里の社交界を超越して生活す。巴里に住する時にても之に頓着せざりしが、田舎に引き込みたる今は尙更に然り。これ別段に謹慎よりせるにも、將た己れの社交界に入るの不能なるを自覺せるが爲めにもあらず、彼が時俗の名士と伍して己れの之に秀抜するの自信あるが爲めなり。彼は雄辯なり。其會話の辭は精にして、意義豊富なり。彼は己れの藝術に就て語るを好むも、決して獨斷すること

なく、説服す。其説話の方法はソクラテス流義にして、別段に對手と議論を闘はすが如きことなくして、之をして知らず、眞理に到達せしむ。師としての仕事をなすをば拒みながらも、彼の教を乞ふの學生には忠言を與へ、其批評は簡なれども、能く弱點を抉出して之を警戒す。

ローダンが現在の棲家なるヴィラ・デ・ブリリアンツ(Villa des Brillants)はムードンの丘陵の上において、セーヴル及びサンクルーの方面に當りてセーヌ河を眼下に瞰下し、巴里西方の城壁を去ること二三基米なり。此處に至るの鐵道は少くとも三あり、其一は高地を走り、高き橋にて谷を横斷し、二つは谷間を横ぎる。ローダンの邸の最寄には馬車及び河流を外にしても三つの停車場あり。是等の交通機關の便宜の首都に向つて存在するにも拘らず、而して僅に三十分にして是に到り得べきにも拘らず、彼は巴里に赴くこと稀に、土地の高燥なる爲めに能く世間の喧囂を脱し、周囲の村里を隔絶して、只管其業に専事す。彼の宅は、取り出て、云ふほどの壯大なるものにあらず。本來は唯一個の前面を有せるルイ十三世式の赤煉瓦の建物にして、地床の上に二階あり。破風の端は入口の側面をなし、屋根は勾配急

に、最頂の窓は屋根の上より突出して、之にはそれ／＼又その破風と廂とあり、之に次ぎて煉瓦及び漆喰建の一翼が東方の側面に建て増さる。こは母家の第二階までの高さを有し、母屋の全長だけの長さの一大室の形をなす。その長さ外壁の上部には一列の大窓あり、其屋根は一部分は玻璃にて張り詰められ、正面は木造にして大なる戸を有す。これ畫人の仕事場たりしなるが、ローダンは之を女流畫家デュラン・ド・コル夫人の手より買ひ求めたるなり。厨房は階下において、庭の周圍には小屋あり、こは馬小屋として用ひらるべきなるも、ローダン夫人は此處に鳩やカナリア等の小鳥を飼ひ、又之を彫刻師の文書庫に充てたり。庭には多くの狗舎あり。犬は一家の愛者たるも、亦此淋しき田舎の警衛の爲めに飼はれしなり。訪客が入口の階段を昇れば、彼は左手に當りて一小室を見るべし。こは全體殆ど玻璃張りにて、東方の一翼と結合せり。此處には舊式の側柵及び戸柵あり、古き彫刻の數小片あり、中には又製圖卓あり。此處は色々の目的に使用せらる。

戸内の有様は以て主人の人格を想見せしむるに足る。近世式の裝飾をのみ見たらんものは、ローダンの宅に入りて先づ以て意外の感に打たれざるはなかるべ

し。此處には其床の上に毛氈なく、櫛の木の床は清潔に塗らる。右方の小き居間には白き中央卓子あり、一の書机あり、二三の白き椅子あり、二個の小き側机あり、四つの繪畫あり、是等の中二個は少くとも之をものせし畫人ユー・ジョース・カリエール及びクロード・モネーよりの贈物なり。之より墨戸によりて食堂に通ず。食堂は長く狭き大なる室にして、橢圓形の白き大なる食卓は室の全長に擴がり、白き藤の椅子數個其處に羅列せらる。卓布あり。この室の一端にあなる暖爐の上にはフェルギエールより送り越せし大なる繪あり。應接間は凡ての中にて最もハイカラにして、能き繪は大小數多其床の上に立ち、窓に向ひ合ひたる側面には、古き黒くなりたる寢台あり、其面には彫刻を施したり。又窓に沿ひては長く狭きマホガニ製の側棚ありて、古代藝術の珍品を載す。一隅に日本人その他の小立像を滿載せる戸棚あり。第二の隅には價貴き箆筒あり。背の壁に沿ひては、玻璃の絹にて縁とれる戸を付したる大なる高き書架ありて、其中に色々の書あり。是等の多くは有名なる文人よりの寄贈書にして、其英人の中には、ヘンレーより贈りし三書あり。第一には、ヘンレーより友人ローダンに贈る。一九九八年二月十八日と記しあ

り。他の二冊は著者の死の前年に贈りたるものにして、一は「ヴェー・エント・レヴェニス」なり。日付は一九〇二年五月五日とあり。今一は「ホイ・ソ・トンとラヴェンダ」にて、一九〇二年二月十三日と書きつけたり。此外一、二の卓子、椅子若干、ソファ、及び籠、是等が此室の道具の全體なり。室内の品物の雜然たる、其スバルタ流の質素なる、何れも主人公の意の寧ろ戸外の自然に其美を探るにあるを髣髴すべからざるにあらざるはなし。ローダン自ら曰く、余の應接間の斯くの如くなるを以て奇とする人ありと聞く。されど余は此處にて其好んで蒐集したりしものを何時にても手に取ることを得。余は歩を運んで自在に之を取上げ、之を己れの用に供せんと欲す。而して之が爲めには余は却つて秩序の整然たらざるを便とするものなりと。

然り、一度窓を開きて遠近を見渡したらんには、室内の贅澤なる家具も忽ちにして顔色を失はざるを得ざらん。遙に下方の谷間にはセースの河は遠きセーヴルの橋を過ぎて北へ北へと流れ行き、終にはサンクルーの小山にその前路を扼せられて東向す。谷間はムードンにて二つに分れてセーヴルの方のベルウーと巴

里の方のフリーリとの間に内陸に向つて走る。此處には天を突く樹木多く、赤き屋根に白き壁の美なる民家の數百が其間に點綴して、色彩の調合の佳麗に觀るもの、眼を奪ふ。

河の方家の前、東方に接して大博物館あり。こは一九〇〇年にブラース・ドラマの博覽會に用ひられしものにて、今はローダンの邸内に建てられたるなり。元來此地は初めローダンの之を購求せし時には中央に一軒の小屋あり、花園の一侧に接して低く長き夏の住家及び小さき小屋ありしなるが、今の博物館の恰も此地所の最も高き所を占むるに及びて、之に接近せる小屋は訪客の用に供せられ、夏の住家は一の古物貯藏所となりて少數の藝術品を藏むる所となり、此處にローダンは時として隠退して仕事し、又は友と遊ぶ。庭園の高き所には坐せる佛像あり、此處には果樹を植ふ、又薔薇の樹ありて、果花の落下するや花咲きて之に代り、新なる眺めを添ふ。この別荘に來る馬車はアヴェニュー・パウル・ベールに依らざるべからず。この小路の主なる門より入れば、兩側に樹を植ふたる路ありて、邸の入口に達す。この家の東即ち博物館の傍には別の工場あり、こは立像の荒造りに用ひ

らるゝ所にして、この建物と母家との間には更に一階赤煉瓦造りの一小建物あり、これ主人が澤山の小雛形を置く所として、又その隠れて休憩する室房として用ひらる。大博物館は大博覽會の時と外觀に於て少しも異なる所なし。其中には常置の大なる玻璃箱、戸棚及び机ありて、是には立像や彫刻の片々を載す。又大小色の像ありて、蔦色の麻布にて被はる。こは常に同一の個所にあらず、又常に同一物にあらず。其數も或は増し或は減じて一定せず。ムードンに行きし人にて又未だ知らざる他の陳列館あり。こは此別荘より西即ち谷間の底にある舊式の中形三階の建物にして、漆喰にて白く塗られ、廻らすに小庭園あり、庭は丘を上りて別荘のある所に近邇す。此新なる陳列館には主人公が旅行中に集め來りし、乃至は之を道樂とする人々より贈り越せしゴチック彫刻の斷片や、創作や、石膏の型や、ローダン自身の之までものせし鉛筆の畫を藏す。

ローダンは複雑なる性格を有する人なり。従つて人によりて彼に對する觀察は異なる。或人は彼を彫刻以外の事物には多く注意する所なく、彼は唯己れの彫刻によりてのみ生活するものなりと言ふ。若し世に此種の藝術家ありとすればロー

ダン は確に其列に入るべきものにあらず。愛なき生活は如何なる時期にありても、彼を以て之を見れば、價值少きものなり。彼は別して婦人の愛情を美とす。彼は引込み勝の人物なれども、さりとて交友を作ることに能はざるにもあらず。否、内氣なるものは實際に於て却つて友を要するの情切なるものなり。されど彼の斯くて友を得るに至らざりしや、彼は専心自然を耕し、不斷不倦の熟慮を以て之に近邁し行けり。彼の勇猛心は之に堪へたり。但し之には徳もあれども、亦同時に缺點もあり、往々にして苛烈と偏見とに陥るの虞なきにあらず。之を矯正するは増長及び變移に維れよる。尋常一般の人物ならんには、中年に達して少しく偏固になり、移り難くなるものなれども、ローダンは斯かる癖を脱却して發展しつゝ、今日に至れり。彼の智的及び倫理的の部分は中年の際よりも今日に於て却つて大に、其筋骨は往時よりも老ひたる現在に於て却つて剛健なり。彼は衰められたりとして己れを失して雀躍することなく、貶せられたりとして又毫も失望することなし。人或は言ふ、彼は餘に自己中心主義にして、ノルマン流の狡猾を有すと。彼には或は慧敏なる、巧智なる點はあらんも、彼の自己中心主義に見ゆるは、其絶えず敵の

攻撃に向つて備へざるべからざるの必要に起りたるものなるを察知せざるべからず。彼は之が爲めに多くの敵を作れり。若し美術大臣の特に彼を最負し、之に補助を與ふるにあらざりせば、此闘争は思ふに彼に取りては一層の苦戦たりしや疑を容るべきにあらず。一八八〇年代の末、親友のダルトと衝突の結果、絶交の不幸を見るに至りたるも、之が爲めなり。ローダンは後追懐して曰く、我等は永く友人なりき。不快の性質の何事が吾人の間に起りたらんとも、友情の記憶や舊き感情は如何てか一朝にして之を抹殺すべけんや。ダルトは病の床にありて、余の彼を訪はんことを欲する旨を語れりと聞きたれども、當時は既に時遅かりき。余は彼を見ずして死別したるを思ひて痛恨の情に堪へずと。さはれ彼は今や普く其價値を認められて第一流の彫刻家となれり。有名なる藝術の士も皆一度彼の門に入りたるを以て誇りとし、二流三流のものは又彼に教を受くるを得たるを幸とす。最も多くローダンを助けて之に寄與したりしマテ・ミル(Milne)は語りて曰く、何故に余は現在の境遇を變移するの必要あらんや。余にして自主し自獨の作をものせんとせんか、利得するよりも損失すべし。彼の爲めに仕事するは如何に

余の愉快ぞやと。これローダンの今日の地位なり。

第七編 音楽家

第二十九章 ビートルフェン

一 彼の先代

ビートルフェン

ルードウィッヒ・ファン・ビートルフェン (Ludwig van Beethoven) は文學に於けるシェークスピアの如く音楽界最大の人物なり。彼は音楽の歴史上に於て一時期の終に其地歩を占め、正に其發達の頂點に位すると同時に、彼の事業は進歩の新經路を示し、近代音楽の偉なるものにして殆ど一として彼に其源を發せざるはあらず。この意味に於て彼は實に十九世紀の樂界を代表するに足るべき天才の士と云ふべきなり。彼の作曲には壯大にて悲哀の調子の之を一貫せるものあり。これ蓋し彼自身の衷心の苦痛の表現なり。彼自身偉人なりしが故に、而して彼自身悲觀の人なりしが故に、彼は偉大なる藝術家たるを得しなりき。

ビートルフェンの家系は遠く十七世紀の頃に溯りて之を穿鑿するを得。彼の家は

舊と白耳義のローウエン(Lowen)附近の二村にありしものにして、一六五〇年と云ふなるに、其直系の祖は此村を去りてアントウエルプに轉任せり。大樂士の祖父なるルードウィヒに至り、此人己れの一家と和せざるの事あり、又もや白耳義を去りて獨逸に赴き、一七三二年には流れくつてボン市(Bonn)に至れり。彼の樂才、彼の天成的美聲は此地にて土人の注目する所となり、時のキールン市(Kiel)の大監督が極めて美術を嗜みたりしより、之を迎へて己が宮廷の樂士に任じたり。ルードウィヒの子ヨハン(Johann)即ち本傳の主人公の父なる人も、父の業を襲ひて宮廷樂士となり、マリア・マゲダレナ・ケフェリヒ(Maria Magdalena Keverich)といふ一婦人を聚れり。マリアは料理人の一女にてトリエル(Trieh)なる選舉侯の扈從の寡婦なりき。我大樂士の誕生日は明かならず、彼が洗禮を受けたるは一七七〇年十二月十七日の事にして、此時父方の祖父ルードウィヒの名を命じたる事のみは明かなり。ピートロフンは自ら此年の十二月十六日を以て己れの誕生日としたれども、官文書の之を證示するに足るべきものなし。彼は時ありては一七七二年の生れなりとしたる事もありき。誕生日のみならず、其誕生の地も亦詳かならず。ボン市の家

にて彼の出産所なりとせらるゝもの今ニケ所あり。何れの正しきかは今之を確かむるに由なし。

二 少年樂士

ピートロフンの少年時代は決して多幸なるものにあらずき。彼の父は飲酒の癖あり、搗て加へて一家は至つて貧しかりければ、其性質甚だ粗野猛烈にして、其主として望む所は、樂才ある愛子を利用し、之を利して少許にても生計を補はんとすることに外ならざりき。されば彼は五歳のルードウィヒにヴァイオリンの嚴肅なる教授を施したるが、ピートロフンは父の亂雜なる教授によりて別段の利益も得ざりしかど、少時にしてブアイフェル(Heller)と云ふ呼べる樂士に就きてピアノを稽古する事になりたれば、茲に初めて幾分か正則なる斯道の教育を受くるを得たり。當時ピートロフンの師事したるはブアイフェルの外に二人あり、ファンデル・エルデン(Van der Eiden)及びネーデル(Neeler)にして、彼の技は是等の師によりて殊にピアノ及び風琴に於て著しき進歩を遂げ、其音樂理論の理解に於ても、亦常人に

絶せしを示せり。彼が一七八三年に出版せし一進行曲の如き是なり。此曲は其表題紙に於て、生年十歳の少年素人ルイ・フラン・ビートル・フン著 (Par un jeune amateur Louis van Beethoven, âgé dix ans) と記しありき。

一七八五年、ビートル・フンは宮廷樂師ネーフェの助手となれり。大監督の宮廷附屬の樂士名簿中には、彼は中々に腕あり、若く、その性善にして物靜なり。且つ貧なりと誌されしとぞ。當時のキートルンの選舉候は、地地利帝ヨセフの弟なるマクス・フランツ (Max Franz) にして、彼はこの内氣にして物數少き少年に天才の閃きあるをや看破しけん、殊に彼を最負して、一七八七年、暫らく之を維納に遣はし、モツァルト (Mozart) の下に學ばしめたり。モツァルトは已に此少年新入門者に於て大なる未來の存するを洞觀せり。ビートル・フンは間もなくボン市に歸り、此處にて宮廷樂士の職を續くること五年、彼の此修學時代には取り出て、言ふべきほどの事もあらず。

ビートル・フンは専念其技を磨きたり。彼は又心進まぬながらも人に教へて貧家の生計を助けざるを得ざりき。彼が藝術を賣りて己れの利とすることを蛇蝎の

如く嫌忌せるは彼の一生を通ずる特質なりき。此時代の彼の作物にして今日に残存するもの一つだもなし。彼を以てモツァルトやヘンデル (Handel) 等の少年時代に比すれば、その作物の量も質も共に是等の樂士に劣れり。ボン在留中、彼の交りし人の中に、ワルドスタイン伯 (Waldstein) なるものあり。これ實にビートル・フンが最初の友人にして、且つ其保護者たり。彼を選舉候の宮廷に薦めしも、亦彼をして維納に遊學せしめしも、皆此人の力なりき。

一七九二年、此少年大樂士は其研究を完うせんが爲めに再び維納に赴きて、ハイドン (Haydn) の下に學べり。ハイドンは當時生存せる最大の樂士にして、兼ねてピートル・フンが洋琴家としても將た作曲家としても、優れたる能を有するを知りしものなりき。されど是等二人の交は何れの爲めにも、効益なく亦不愉快なるものにして、ハイドンの溫柔和易の樂風は火の如き熱情を有する少年樂士の同情を喚起すること能はざりき。ピートル・フン自らも亦之を認めて、後年述懐して曰く、余はハイドンよびして一も學び得たる所なしと。彼はハイドンが自己を教ふるの術を解し居らざりしもの、如くに思念したりき。彼は乾燥の誹は免れざり

しも、ハイドンよりも寧ろアルブレヒツベルゲル (Albrechtsberger) を信頼したり。されど彼が如き我意強き學生に取りては、師に受けたる教は爾かく大なる利益を齎らすべくもあらざりければ、彼は専ら自身の辛苦経験によりて己れが技術の缺陷を補はんとせり。これ彼が思想、彼が之を表現する方法の發展に於て最も重要な事なりしなり。

少年樂士の俗世的成功の道は次第に開けたり。大監督とワルドスタイン伯との紹介によりて、彼は今や塊地利の貴族社會に出入するを得るに至れり。當時塊地利の貴族は歐洲の何れの國よりも藝術の嗜み深く、別して音樂を愛好するものにして、近頃までモツァルトは維納に於てその妙技を専らにしたりき。ピートルフェンは洋琴家として此地に打つて出てたるが、その様式の如何にも嶄新なりし爲めに維納の素人音樂連は先づ之に動かされ、ハイドンの如きも、彼の創始的才能よりも、其彈奏上の技術に大に其望を囑したり。

三 永き維納の生活

ピートルフェンが作曲家として維納に出現したりしは一七九五年にあり。此年彼がものせるピアノ及び絃樂器の三部合奏曲公刊せられたり。彼自らは此作を稱して自己の第一曲 (Opus 1) と呼びたるが、其意蓋し此作以前の作をば修養未熟時代の拙作にして、殊に記するに足らずと思念せしによりしならん。時に彼年二十五と云へばモツァルトが早くも其最大の傑作をものしたりし年にてあるなり。されどピートルフェンはモツァルト其他彼の先輩の大樂士の如くに早熟の天才にあらず。従つて其作は天來の神興に乗じて無意義に作りなしたる底のものにはあらで、彼の之をものすや其思想を練り、其神慮を苦むること甚しく、其苦慮懊惱頗る慘憺たるものありき。

彼が功業は外より打ち見たる所にては至つて單純にして、別段に細説すべきほどのこともなきが如し。ピートルフェンの藝術に惚れて之を讚嘆せし人々維納に多かりしが、彼の友人にして門下なるルートルフ (Rudolf) 大公の如き亦其一人なりき。彼等は皆一様に師に勸むるに、其維納を以て常住の地となさんことを以てし、ピートルフェンも此求めを容れて此地を去りしこと至つて稀に、僅に其近在な

るバーデン(Baden)やミュードリング(Müdling)其他に遠足せしことありしに過ぎざりき。彼が作曲の上に於て新なる衝動を受けたりしは此府の逍遙に大自然との直接の交際の場合によるもの多かりき。音樂演奏の漫遊として、二七九六年、北部獨逸に赴きたりし外には、彼が久しく維納にあらざりしことは嘗つて之あらず。倫敦なるフルハルモニイ會よりの懇切なる招待を受けて夙に英國に渡らん心算なりしかど、之とて其不健康の許さざりしが爲めに終に見合せられたりき。されど彼が作曲家としての名聲は忽ちにして國外にまでも廣まりたり。勿論此間に彼を排するの批評も之なきにあらずしが、其非凡の技術天才は到底之を無視し得べくもあらずして、彼の名譽は一八一五年に於て正に其頂點に達したり。これ彼のシンフォニーをもつて、同盟列強の爲めに其佛國の暴主ナポレオンを倒破し得たるを祝賀し、之によりて維納公會の爲めに集まり來りし各國君主の歡呼する所となりし得意の際なりしなり。此年彼は維納市より自由市民權を享受したり。此後彼の聲望は幾分か衰頽したるが如く、彼はかの恩知らずなる同時代の好尚に阿ねるよりも、寧ろ知己を後世に待たんとせしが、而も其稀に隱遁の

生活より社交界に出て、其妙技を揮ふや、彼が衆庶を壓するの天才の尙依然として閃めき出づるを見き。此點に於て殊に此處に記せざるべからざるは、一八二四年の有名なる音樂會の折にあり。彼は此際其第九シンフォニー及び莊嚴祈禱曲(Missa Solemnis)の諸部を演じて雷の如き拍手喝采を受けたりき。されど傷むべし、此際彼は耳聾し居りて之を聞くこと能はず、纔に聽衆の感に得堪へて其手巾や帽子を振り亂す狂態を見たるのみ。

四 聲となる

吾人はビートルフェンの終に弊者となりたることを記したり。記事は是に至りて吾人をして彼が悲惨の一生涯に及ばしめずんばあらず。運命の戯れとも云はんか、音の藝術によりて巨萬の民衆に歡喜を興へ、其心情を昂上すべく努力したる我樂聖は、不幸にして己れ自らは音樂を聞くこと能はざるの人となれり。この兆候の初めて現れしは已に一七九七年の頃にあり。之を知り得たる彼は非常に失望して取り敢ず醫師に協りて療治に其手を盡したるが、彼の性の不屈我執なる

ことも少からず病勢の進歩を促したりけん、一向に効驗なくして病は日にまし高ずるのみなりき。伯林の王室圖書館に今も耳筒や其他同種類の機械數多あり、其一部は確にピート・フォンが弱き聴覺を助けん爲めにとて造られしものなりしが、是等も更に其効を奏するに至らざりき。末年には彼は會話するに筆談の方法のみによれり。此境遇にあり、最も聴覺を要するの業に従ひながら、其不自由にも拘らず、能く之を制して己れの天才を發揮し得たりて、ふ事は實に驚くべきにあらずや。彼は聾となりて自ら社會と隔絶するに至りたるが、こは疑もなく藝術家としての彼をして、其全心を斯業に傾注するを得しむるの好都合もありたるべしと雖、其代りには一個の人間として其生活の苦痛は之が爲めに却つて増したり。彼は元來語氣至つて粗野なりしが、彼とて木石にあらず、友誼をも感じ、戀愛をも感じ得るものなりしなり。一八〇二年、重患に際して認めたる遺言狀を見れば、大樂聖の優しき心情其中に流露せられて、讀むものをして覺えず同情の涙を灑ぐに至らしむ。彼曰く、余を以て敵意あり、粗野にして人間嫌ひなりと信じ、若くは言ふの人々は、其目にも見ゆる現象の奥底に潜む秘密の原因を知らざるの

徒なり。余は素と猛烈なる活潑なる性情を以て生れ、一般社會の娛樂に動かされ易きの人物なり。されど余は終に夙に衆庶より隔絶し、寂しき孤獨の生活を營むの止むべからざるに至りき。余は屢、此孤獨の生活より脱却せんと努めたり。されど余の惡聽覺の爲めに社交は却つて苦痛となれり。斯くて余は終に引込思案に歸れり。一層聲高く語れよ。余は聾なればと一々人々に告げんこと余の不能とする所なればなりと。彼亦同じ遺言書の中に金錢主義を斥けて曰く、汝の子等に徳を勧めよ。決して金錢を勧むる勿れ。何となれば彼等は徳によりてのみ幸福なるを得べければなり。これ余の經驗より言ふ所なり。余を貧窮の中より拯ひたるは實に徳なりき。余は余の技術に謝すると共に、余が遂に自殺を以て余の一生を終らざりしことを余の徳義に感謝せざるを得ざるなりと。彼は實に眼中金錢なき眞の藝術家なりき。

ピート・フォンが家庭の煩累や不快は亦彼の身體上の病患に伴ひて彼の不幸を増大せり。彼は素より全く婦人の美を感じ得ざる所謂女嫌ひの變物にあらず。若干の貴女と交りては其高雅と秀美とに我を忘れたる事もありたれど、終に一度

も結婚せずして其一生を終りたり。されば彼には品格高き女性の世話にて補はるべき家庭の感情及び快樂と云ふもの全く缺如するに至りしも、已むを得ざるの勢なりき。彼の全く世事を解せざる迂濶の人なりし爲めに、亦彼を助くる人のなかりし爲めに、彼は全くその召使へる奴僕の虐待する所となれり。思ふに彼の病的猜疑心と小言とは大に此有様を助長するに力ありしならん。或る時の如きは我樂聖は己れの僕の一人に引掻かれて其顔より出血し居たりき。彼は斯かる境遇にありながら、尙且つ其崇高の作物「ミッサンレムニス」や第九シンフォニー(Phonic)ものしたり。されど彼の心の傷の中に、最も痛手なりしは、奴僕の様暴亂の従の徒に課せしものならで、彼のより親しきより密なる縁戚の者のなせし所業にてありき。彼に一人の甥あり、悪しき心の男にて、幾度となく困苦の中より叔父に救ひ出され、叔父も亦其父にも増して之を愛し、其教育の如きも絶えず注意して厄介せしなるが、それにも拘らず、甥は叔父の僅少の収入を踏み倒し、終には自殺をまでも企て、此大恩ある叔父の顔に泥を塗るにぞ至りし。

ビートルフェンの死せしは一八二七年三月二十七日の事にして、折しも戶外には

大ナポレオンの死の時の如く大嵐ありしと云ふ。英國倫敦なるフィルハルモニー會は、大樂聖の貧にして寂しき病床を慰めんとして、義捐金を募りて之を彼の許に贈りたるが、ビートルフェンは死に瀕しつゝ之に感激し、臨終まで英國に於ける未見の友人及び同情者の厚き心根を謝せしとぞ。

五 彼が第一期の作曲

ビートルフェンの作はソナタ(Sonata)よりシンフォニー(Symphonie)、單歌よりオペラ及び聖樂(Oratorio)に至るまで、聲樂も器樂も凡ての種類に亘りて存す。其數凡て百三十八あり。是等の形式の何れにありても、彼の深き感情其天才の力の表現せられざるはなし。其中には彼の先人乃至彼の先進の終に企及し得ざりし偉大を極めたるの神作もなきにあらず。彼の洋琴のソナタによりて洋琴樂は正に今日あるの基を作れり。彼の九個のシンフォニーは十六世紀を以て伊國に起りたるシンフォニーをして、而して又ハイドン(Haydn)によりて管絃合奏樂の名に用ひられしシンフォニーをして全く大成するに至らしめたり。中にも有名なる第九シンフォ

ニイに至りては殆ど樂の極致に迫れり。彼の劇曲にはオペラの「フィデリオ」(Fidelio)あり、エグモント及びコロオラーヌス(Egmont und Coriolanus)の序樂あり、何れも劇的性質の力と哀情の深刻とを表現す。彼が短小の歌曲、其洋琴の小曲の如きに至るまでも、一として愛至り、永遠を懐るゝの-high 想感を反映するものにあらざるはなし。

ベートーフェンが作曲家としての經歷は其進歩の跡を辿りて自ら三期に分たる。今彼が主なる作物をば其著作の年代によりて紹介すれば左の如し。

第一期は一八〇〇年に至るまでの期間なり。此初めの間はベートーフェンは其偉大なる先輩ハイドンやモツァルトの感化の下にありしと雖、次第に獨特の能を發揮して摸倣より創作に、と向ひ、その思想も技術も共に急激に自主的となれり。此時代の作品としては洋琴及び絃器の三つの三部合奏曲、即ち第一曲あり、洋琴ソナタ即ち第七曲あり、洋琴及び絃器の三部合奏曲第十一曲あり、熱情ソナタ(Sonata pathétique) (これ一七九九年の作なり)あり、管絃合奏の第十五曲あり、一七九七年作のアデレーダ(Adelaide)あり、管絃の七部合奏曲第二十曲あり、第二十一曲た

る第一シンフォニーあり。此最後の二者は一八〇〇年を以て公刊せられたり。ソナタ樂は全くベートーフェンに在りて完全せり。ハイドン及びモツァルトの時まではソナタは三樂段(Movements)より成りたりしが、ベートーフェンは之に今一段を加へて四樂段となせり。第一段は全曲の思想を披瀝するものにして、其進行急なり。第二段に至りて緩となり、第三段更に輕快の形式に移り、第四段再び快速となる。但しベートーフェンが晩年の作は必ずしも四段に限らずして、中には三樂段なるあり、又五樂段なるもあり。此ソナタこそは、實に器樂の最も發達したる形式なりと稱せられ、ベートーフェン以後の樂師は、一に先人のなせる事業を摸倣しつゝあるのみなり。

六 第二期及び第三期の作物

第二期は一八〇〇年より一八一四年に至るの時期にして、此時に至りてベートーフェンの樂は其形式的完成に到達したり。この時代の作物は音樂が獨立の藝術として窮め得べき最高の度に至り得たるものにして、其中には第八十六曲あり、

ビートルフェンが唯一の歌劇、フィデリオあり、こは至純至美なる夫婦の愛を讃美せし高雅の曲なり。總じて、ビートルフェンには器楽曲の作多くして、聲楽曲の作少きが、該歌劇は此少き聲楽曲の一なり。この外ゲーテが「エグモント」の序樂あり。ヴァイオリンの第六十一曲あり、プロメテウス (Prometheus)、「コロオラヌス」(Coriolanus)、「フィデリオ」(Fidelio)及びスチーヴン王 (King Stephen)等の序樂あり、尙洋琴の無數のソナタ樂、四部合奏曲、五部合奏曲、其他の作あり。就中此時代の作物として著しきは第三より第八に至るシンフォニーなり。シンフォニーの形式は略、ソナタの形式と等しと雖、唯後者の唯一個の樂器によるものなるに代へて、前者は管器絃器共に多くを合奏せるものなれば、異なる音色を交へ、潤澤なる音量によりてハルモニイ、メロヂーの妙を發揮し、思想感情を自在に露出し得るの點に於て、後者は到底前者に企及し得べくもあらず。第二より第八に至るシンフォニー中にて著しきは第三の「エロイカ」(Eroica)(愛)及び第六の「パストーラル」(Pastoral)等なり。「エロイカ」は統領時代のナポレオンを頌せんが爲めにものされしものにして、一八〇五年四月七日、維納に於てビートルフェン指導の下に公演せられき。こは初めは題して「ボナ

パルテ」(Bonaparte)と稱せしが、ナポレオンの潜して帝號を稱するや、ビートルフェンは怒りて之を破り、其題號を改めたり。「パストーラル」即ち田園シンフォニーは一名「田舎生活の回想」とも云ふ。

ビートルフェンが此時期の作物に有名なる「月光ソナタ」(Moonlight Sonata)あり。こは彼の第二十七曲をなせる二曲の一にして、一八〇二年を以て公にされたり。其由來に就ては、彼が月の夕の逍遙に未知の某の家に入り、神興に來じて之を彈奏せしものなりて、ふ名高き逸話の存せるあれど、こは信を措くに足らず。こは其序曲に於て悲哀の調を帶ぶるものにして、中曲に至り初めは稍、輕快なりしが、繼て再び暗鬱となり、終に發奮努力の表情を以て曲に終を告ぐるものにして、月光と何等の交渉あるにあらず。其全名を「ソナタ・クォ・シ・ウナ・ファンタジア」(Sonata quasi una fantasia)と云ふ。

第三期は一八一五年以後、大樂聖の死に至るまでの間にあり。これ又詩的音樂の時期と稱せらる。全體の樂風を貫徹する調子は詩的なればなり。此時代の作物は空前絶後の名ある第九シンフォニー、一名「詩風交響樂」(ミッサ・ソレムニス) (莊嚴祈禱

曲(Missa Solennis)第百〇一曲第百〇二曲第百〇六曲第百〇九曲第百十曲第百十一曲等の洋琴ソナタ樂第百二十七第百三十第百三十二第百三十五曲等の絃器四部合奏曲等なり。

ベートーフェンが公演の最後は一八一六年四月二十日にして、此後彼は退隱して世に出でず、一八二四年に至り有名なる第九シンフォニーを世に問へり。こは四曲部より成り、第一曲部に於て憂愁の状態を表せしものが、第二曲部に至りて稍、歡喜に近づき來り、第三曲部に於て緩なる平和の界に逍遙し、第四曲部即ち最終曲部にてシラー(Schiller)の歡喜の歌を用ひて之を結ぶ。ベートーフェンは此最終曲部にて聲樂を用ひたり。

ベートーフェンの後、彼の樂風を繼承して之を發揮すべく努力せしは、埃地利の樂士ラランツ・ペーテル・シーベルト(Franz Peter Schubert 一七九七年—一八二八年)なりき。

七 ビートーフェンの藝術を論ず

ベートーフェンが藝術の基礎は、ワグネルも言ひたりし如くに、其大なる無邪氣無心にあり。彼が藝術の天真は小兒の無意識なる自然なる天真たり、將た聖者の修養ある天真たり。思ふにベートーフェンは凡ゆる音樂者の中の最も小兒らしきものか。凡ゆる藝術の士の中にも、小兒らしき樂士は最も自然的なり。

ベートーフェンは通常樂界のシェイクスピアを以て目せらる。されど彼は果して如何なる意味に於てか劇曲家たりや。吾人にして若し文學上の術語を用ひんとせんか、彼はシェイクスピアに似たりと云はんよりも、寧ろホメロスやミルトンに似たる叙事詩人を以て目すべきものにはあらざるか。彼の樂にはホメロス流の古英雄や、ミルトンがサタンや、ダンテの調子あれども、ソリアやハムレットやオセロに比すべきものあるなきなり。

ショペンハウエル(Schopenhauer)は言へり、音樂は世界の表象ならで、其直接の音聲なり。樂士は世界の實在を披瀝し、彼の理性にては了解し能はぬ詞もて最高の理を表現す。吾人は知覺し得べき世界及び音樂をば同一物の二つの異なる表現なりと見得べし。されば世界は具象の音樂なり。音樂は此點に於て他の藝術と異れ

り。音樂は現象の現出ならで、凡ての皮相の下に横はるなる物それ自らを現すものなりと。實に然り。ビートルフェンの取扱ひしも亦實に此内在の物それ自らの一世界にてありき。音樂は吾人の理性にては解し得ぬ詞もて最も高尚の道理を吾人に語る。何となれば樂の詞は吾人の理性よりも吾人に向つては一層古く、一層深く且つ密なるものなればなり。彼は吾人の心から吾人に語るの聲なり。之を耳にするは一の回想なり。吾人の飽かざる記憶の回顧なり。ワグネル曰く、音樂の我全文明を抹消すること、宛ら太陽の燈光をして光なからしむるが如しと。藝術にして吾人をして凡てを意識の外に置かしめ、唯人生の根柢に横はるなる無我入神の境をのみ思念せしむるもの、音樂の唯一藝術を措きて他にあらんや。此境こそは吾人が神聖なる昏迷の状態なり。ビートルフェンが第十シンフォニーは酒の神ディオニソス(Dionysos)に捧げられたる頌歌なりき。これゲーテが其「ファウスト」の第二編にて試みたりし異端世界と耶蘇教世界との融合を其目的となししものなり。

ビートルフェンは其生涯に於て二度作を中止したり。初回は一八〇八年より一八

一一年までの三年間にして、これ恰も彼がテレオズマルフマチー(Mhérese Malfatti)を戀しつゝありし時なり。次回は彼が其兄弟を失ひたりし後の一八一五年より一八一八年に至る間なりき。是等の二の期間の彼の作物は寡小なり。これ個人的の感情に捕はれて之を脱却すること能はざりしによる。其他に於ては、彼は如何なる戀愛、如何なる疾病、如何なる親戚友人、殊に不肖の甥に對する病心の存せしとも、嘗つて著作に耽るの手を休めざりき。眞面目にして敬虔なる彼は徳に向ひ、又世界の節奏的秩序に向ひては戯ること能はざりき。彼の藝術は彼の宗教なり。彼は深き信神の念を、懷き、之が爲めにホメロスやシェイクスピアの詩を誦し、プルタルコス(Putarchos)の英雄傳を讀めり。彼は餘り高尚ならぬ衝動よりものせられたりと見ゆる著作を讀みて、己れの慰樂となすこと能はざるものなりき。彼の病篤くして死せんとするや、彼の知人は彼の不撓多苦の心神を聊かにても慰めんとてスコット(Scott)の小説を彼が許に齎らせしに、彼はその一二頁を瞥見したるのみにて、其書を傍に推しやりて曰く、この作者は金儲けの爲めに之をものしたるが如しと。

吾人がピートルフンに聖者及び小兒の無邪氣ありと云へるは、幾部は彼の自然を愛好するの情あるを以てなり。自然の愛は彼にありては恰も一の宗教の如し。彼テレーズに書いて曰く、地上の何人も余の如く郷土を愛するものあらざらん。木も森も岩石も、一として余が思想の反響を余に齎らざるはなしと。彼は戸外に出て、恰も家内にあるが如き思ひせり。彼に向つては其貧苦の家は屋蓋や扉もて其居を限りて窮屈耐へ得べくもあらざりしなり。書人クリューベル(Klüber)の吾人に告ぐる所によれば、ピートルフンの田舎にあるや、常に其手に樂譜の紙片を握り、宛ら何ものかを默聴するが如くに靜に立ちて、上又は下を眺め、次で之に書き附くるが例なりきと云ふ。ピートルフンは又仰向けに寝轉び、青空を凝視するを好み、野にありては、彼は自在に其心を奔放し、之をして其辭興を専らにせしむるを得しなり。此處には彼と太陽との間には何物もなし、メーナー(Münner)によれば、此太陽こそは實に神たるなれ。

慾の動物的叫聲は、吾人の更にピートルフンが音樂に於て聞くを得ざる所なり。彼の所謂、辭興は古代希臘人に於て見たりし宗教的放進にして、此處には一の罪

惡だも迎るべくもあらず。ツグネルがウエヌベルヒ(Venusberg)の樂の中には惡となりたる自然の聲が聞ゆれども、ピートルフンを以てすれば、自然は未だ惡ならずして健康なりき。彼は自然を好み、神を愛し、是等と同一程度の愛を以て亦徳に對す。彼は斯かる凡ての嘆稱の情よりして偉大なる歡喜を創造し、其歡喜や廣くして正に人間界の喜悲を超絶したり。

ピートルフンは別段に新しき形式を發明せし譯にはあらざりき。彼は唯己れの企畫に應じて在來の形式を擴張し、之をして己れの欲する所のものを包容せしめたるのみなり。されど吾人にして試に彼が作物を一々追及し行かんか、ソナタにてもシンフォニーにても、吾人は常に發展の其處に存し、新なるは古きよりも一層著しきを發見するに至らずんばあらず。凡てのシンフォニーは何れも前回のシンフォニーより發展せるものにして、正しく進歩せり。その凡ては前作よりも更に大なりとは言はざるも、兎に角其處には何等か新奇なるものあり、藝術上の獲物のあるを見るなり。斯くの如きは藝術家の生産物としては正しく稀有の事と云ふべく、之をして第二流の人士の手に成らしめば、彼は必ずや前作を踏襲し、之を

繰り返す事に止まるべしと雖、流石は非凡のピートフォンなり。彼は嘗て前に歸ることなし。彼獨り進みて聴衆は進歩せざれば、此處に彼の終に世俗の解する所とならざるの時到来。されば大藝術の士は其餘りに時流を抜くの大なるが爲めに多く逆境に沈淪し、凡俗の非議する所となるなり。ピートフォンも亦此運命を免れざりき。彼は名譽に向つて淡然たるものなるも、其初期の作品は中々に評判好く、之を出版せし時にも報酬は高かりき。彼自ら當時の事情を記して言ふ、出版元は互に余が作を得んものと競争したり。余は依りて余自身代價を一定したりと。されど彼の眞價は其眞にあるが儘に評價せられざりき。人々は彼に向つて彼の作り度しと思ふものを丁度能く注文し來ることなかりき。一八一六年、フィルハルモニー會にて彼の許にその會員の一人を差遣して新シンフォニーの製作を乞ひ、之に向つて一千圓を支拂はんことを申し出でしことあり。彼亦之を諾せんとせしが、彼は此時恰も第八シンフォニーの作を卒へたるのみの時なりしかば、新作が前作の風を踏襲せざるべからざるものなりて、先方の條件を聞くに及び、怒つて之を辭し、斯くて倫敦市は有名なる第九シンフォニーを得るの名譽を永遠に

矢ふに至りき。

音樂の起原は身體の運動にあり。凡て器樂は舞踊に發源す。ピートフォンも亦此最も簡易にして最も根本的なるものを採りたればこそ、最も深く人生に觸れ、其樂をして永遠ならしめたるにあらざらんや。彼は彼自身其音樂を作するの前に於て自然の一部分なり。彼の田園シンフォニーを見よ。吾人は其處に青空、清氣、悠々たる田舎の氣質、及び日光もて満たされたる田園を見ん。此處には一々の描寫ならで、全體を彩色せる感情の表現あり。ピートフォンが其第九シンフォニーの終に言語及び音聲を藉りたるに就ては、世上色々の議論あり。或は言ふ、これ音樂の發展してワグネルに至るべきを暗示するものなりと。音樂が何ものも此上語ること能はずして言語が音の意味を傳ふるに至るべきの時あらんとは、果してピートフォンの自白する所たりしか。果して然らんには、音樂を以て吾人の内界が外界の實在を合致するものなりとするの考は、終に倒滅せざるべからず。吾人を以て之を見るに、ピートフォンが器樂に聲樂を加へたるは、管絃合奏樂に、他の精巧に感想を表現し得べき力ある器樂を添加したりと云ふに過ぎず。この器樂を加ふる

の際彼は之に言語を付せり。これ恰もヴァイオリンを支ふるに肩の入用なる如くに、聲音を支ふるに詞の入用なればなり。されど又再考するに、第九シンフォニーの第四曲部なる、シラーの歡喜の歌の如きは、その詞章に代ふるに意味なき子音や母音を以てしたりたりとて、第四曲部全體の効果には何等の異變あるべしとも思はれざるなり。思ふに此際のビートルフェンの眞意を付るに、彼は其企てしなる心神の興奮昂上は此上の所却つて音聲の合唱、即ち器樂と見做されたる音聲の合唱を以てすること最も相應しと思せしものならんか。即ち彼は聲樂を此處に添付して管絃合奏樂を豊かにせしに過ぎず。而して此發意を現したるは實にワグネル其人なりき。彼は光の世界のシエルクスピアと音の世界のビートルフェンとを融合して茲に新藝術を創造したり。

ビートルフェンは其晩年の作に於て一定の形式の内に己れの想感を發露せんことを努めたりしが如し。ワグネルは彼を評して言ふ、自家の悲しき生涯に伴ひてビートルフェンが心の中には、其個人的感情を明述したしてふ望み起れり。彼は次第に徒に音樂を作るとか、漫然面白き作をものすとか云ふ如きことをば得せて

て、己れの思想感情に確然たる表現を與ふべく彼の藝術を利用せんてふ彼が內的實在の必要に驅逐せらるゝに至れり。彼の深愁の始まりたるは正に此時よりなりと。ビートルフェンに取りては、彼の音樂に於て獨り個人的なる事物を叙するに止まらて之をしてそれ自身の秘密を語らしむるの努力は、所謂その深愁なりき言語を以てする至深の詩や至深の哲學は、大概は之に對して答を得難きの問題なりき。ハムレットの獨語やヨブ記の第三十八章の如き是ならずや。ビートルフェンが技の神に入れるの時には、彼の音樂は言語なき音聲にて語る。これ其心靈の横溢流露したるものにして正に言語の形式を絶したるなり。彼は其晩年の作殊に其終の四部合奏樂に於ては、音それ自らをも少くしたり。此處にては形式は充分に使ひこなされて消亡し、其調和の旺なるや、喜も悲も和聲も然らざるも、盡く渾然として合致せり。

獨逸にはホルバイン(Holbein)やディレル(Direr)やクラナハ(Cranach)の如き畫人出て、又石造の建築家、鐵の鑄造家も出てたれども、造形美術の方面に於ては、未だ達人を産出したりと云はれず。獨逸には又大業をなしたる詩人及び哲學家出て

たりされど最高の事業は音樂の外に於ては嘗つてなされざりき。音樂に於ては英國のパーセル(Purcell)以來、獨逸以外に於て何等最高の事業は演ぜられざりき。然り、アルブレヒト・デューレルは獨逸流の美を描き出したり。哲學家も亦カントよりニーチェに至るまで皆それ、前人の遺趾の上に其建物を築きて哲學の新系統を立したり。ゲーテ(Goethe)は獨逸に起りて世界に明智を給したり。されどゲーテは何事にも秀出するにも拘らず、終に何れの方面に於ても至上の地位を得るには至らざりき。獨逸にて美とする所のもの、世界の美とする所にあらず。然るにピート・フンに至りては如何。彼によりて音樂は世界の語となりたるならずや。勿論彼の音樂の國民的なること、夫れダンテやシェイクスピアの詩の國民的なること異なることなしと雖、獨逸がダンテを生じたる伊太利と肩を並べ、シェイクスピアを産したる英國と比較せらるゝを得るに至りしは、ピート・フンの獨逸に生れ出でたりしより後の事なるを記せざるべからず。獨逸人のみ獨り共同文明に寄與せざるの恩知らずにあらざること、一ピート・フンの出づるに及びて初めて明かなるを得たり。

第三十章 ワグネル

一 悲惨なる幼時

ワグネル(Richard Wagner)一八一三年—一八八三年(一八一三年五月二十二日、獨逸ライプチヒに生る。父をカール・フリートドリヒ・ウィルヘルム・ワグネル(Carl Friedrich Wilhelm Wagner)とて、詩文の嗜みあり、演劇の趣味を解し、時としては素人芝居の顔役なりしが如し。母をヨハンナ・ロシナ・ベルツ(Johanna Rosina Beretz)といふ。一七九八年、ウィルヘルムと結婚してより、九人の子女を生む。ワグネルは實に其季子なり。ワグネルの父は小官吏にして、月給もさまで多からずして、九人の小女を養育することなれば、一家の生計も困難にて、かゝる貧家の家政を司りたるベルツが心勞は並々ならぬこと多かりけむ。而してワグネルの生後一年ならずして、獨逸はナポレオンの馬蹄に蹂躪せられ、ライプチヒにても亦佛軍に敗北し、戦後悪疫流行して頗る猖獗を極め、ワグネルの父も遂に歸らぬ旅路に入りぬ。ワグネルは生後六ヶ月、なほ襁褓にあり、母の温き懷に抱かれつゝありて、一家の慘事も知らざ

りしが、新に夫に別れて未亡人となり、九人の子女を抱へたる母の悲や如何なりけむ。

突如として人生の慘事に遭ひぬるヨハンナは、獨り淋しき空閨を守りつゝ三年の歲月を送りしが、家に遺産もなく、又頼るべき人もなければ、止むなく再醮することとなりぬ。一八一五年、ヨハンナはワグネルを携へてゲーエルに嫁しぬ。

ゲーエル (Ludwig Geyer) は多能なる人にて、詩家たり、樂人たり、狂言作者たり、將た俳優たる人なり。當時ドレスデンにありて、王立演劇場に關係しき。當時ワグネルは三歳の小兒なりしが、父に抱かれて屢、劇場に赴き、又は父が同好の座談する席に列り、早く既に演劇の趣味を悟りぬ。子を知る親に若かずと云へど、父も天才たるワグネルの當來を卜すること能はざりけむ。先づワグネルをして繪畫を學ばしめんとせり。されど果さざりき。八九歳の頃初めてピアノを學び、頗る得る所あるものゝ如し。これ其性質に愜ひたればなり。されば第二の父ゲーエルの死に垂んとするや、父の病苦を癒せんとして新曲ウーベルの「乙女の花冠 (Kingofkronz)」を奏せる際、父をしてワグネルの樂才を認めしめ、彼に樂才あるかと嗟嘆せしめたり。

これ一八二一年の出來事なりとす。當時ワグネルは大に戯曲を愛好せり、而して兼ねて樂才あり、彼が樂劇は此時に芽ざしたりと云ふべく、其將來は刮目にせずと云ふべからず。

ヨハンナは再び夫に別れて、又も運命の定めなきに驚き且つ泣きしが、ワグネルは、繼父に別れて後初めてドレスデンなる十字學校に入學しけるが、世豈に伯樂なからんや、千里の名馬は忽ちにして知られ、異材ワグネルはシールリッヒ教授の知遇を受くることとなりぬ。ワグネルは常に音樂の成績宜しからず、何等の進歩なかりき。傳ふる者いふ、これ自らワグネルが故意に進歩せしめざりしなりと。ワグネルは希臘語、拉丁語神話學、古代史等の諸課に心を奪はれ、音樂を二の町となせしならん。ワグネルが古典研究の熱心は驚くべきものあり、彼はホーマーがオデッセー十二卷を譯して、同人を心服せしめ、又韻文をも作りぬ。是より先、ワグネル十一歳の折、亡友を吊ふ詩を賦して、その詩材を現したる事ありき。爾來ワグネルは、作詩に耽り、希臘の悲劇を案じ、又シェイクスピアの諸作を涉獵し、或はロミオの獨語を韻文に譯し、或は二年の歲月を以て、「ハムレット」、「リア王」を打つて一團となせ

る一悲劇を作為せんとせりとも云はる。されど後の計畫は財政上の困難と、長姉ロザリーがライプチヒの一劇場に出演すべく故郷に歸省するに際し、ドレスデンを去ることとなり、遂に完成せられざりきといふ。

一八二八年、ワグネル十五歳の折、ライプチヒのニコライ・シューレ(Nicolai Schule)に入學し、優等の成績を以て上級に編入せられ、哲學研究の門に入りて、その生涯の一回轉をなせり。一回轉とは何ぞや、他なし、彼がゲウン・ハウスの學堂に至り、初めて樂聖ベートーフェンが神韻の曲を聴くに及び心に秘めたる悲劇も、此妙音を伴はしむれば益、觀客をして、恍惚たらしむるを得べきを感じ、四部合奏曲、ソナタ、アリリア等の作曲を試み、又は諸多の音樂研究に多大の興味を加へたること是なり。

翌年ニコライ・シューレを退きて、トマス・シューレに轉じたり。轉校の原因は學校の正課を修めざるにありて、校長シューレに譴責せられたるにあり、然るにワグネルはこの學校に移りても、亦同じく正課に熱中せず、ウヘルム・ホフマンが諸傳記、殊にワルトブルヒに於ける樂人の話を記したるセラピオンの兄弟(Die Serrapionsbrü-

der)「音樂師(Meistersinger)ニコルン・ムルヒの極匠樂師マルチン(Meistersinger Martin der Kifer von Nürnberg)乃至ルドルフ・ウーベ・チーグ(Ludwig Tieck)が「タンホイゼル」(Tannhäuser)等を愛讀し、是等諸作者の神祕主義に勵まされて、音樂趣味を甚大ならしめたり。他日ハインリヒ・ドルンの演じたる「ペー平調八分六時の序樂は、實に此時代の作物なりとす。

此校に在ること三年、一八三〇年此校を去つてライプチヒ大學に入る。ワグネルが此大學に入りしは、他の學生の如く、職業を得んとする爲めにあらで、唯哲學及び美學の講義を聴かんとてなり。されど一度宿儒の講筵に待して、玄妙の哲理を聞くや、究理の學も興味津々たるものあり、孜孜汲々として斯學を研究せり。當時彼が師宗とせるはモツルト(Mozart)、ベートーフェン(Beethoven)の二大家なり。殊に前者はワグネルが理想の樂聖にして、是等諸先進の樂風を參酌して編述せるソナタ、ホロネーズ等頗る多し。一八三二年、ベートーフェンに倣ひて作れるシンフォニーの完成は大に見るべきものあり。其完成後、ワグネルは樂界の景況を視察せんとて、維納に遊びぬ。されど得る所なくして歸る。蓋し當時同市に流行せるものは、佛

國の作曲家たりしヘロルドの作、喜劇的歌劇「ツァムパン」(Zampa)なりしを以てなり。斯かる世俗的歌劇は如何ぞワグネルを喜ばしむるを得べき。彼は冷然として之を看過し去りぬ。路にブラーグに滞在し、同市の音楽獎勵會を督せしデオニー・ウーペルと相知り、ウーペルの爲めに、或は歌劇の語集を誌し、又は「新婚の日」(Die Hochzeit)と呼べる一悲曲を草し、ウーペルはワグネルの爲めに其作品を獎勵會の演奏會に紹介し、交情實に温かなるものなりき。

樂都維納の意外に荒涼たるに驚き、其作シンフォニーの比較的に歡迎せらるゝを見るや、ワグネルは斷然決意して樂人を以て世に立ちんとせり。決意一度成るや、前途の光明奕々たるものあり。是に於て精研益勉め、希臘の悲劇を初めとし、北歐の神話等を研讀し、斯くて乗ずべき風雲の至るを待ちぬ。

ワグネルは貧賤に生れ、困厄の間に人となり、今や校門を出て、浮世の活舞臺に生存の競争を試みざるべからずなりぬ。斯くして悲慘なるワグネルの運命は來る。

彼は長兄アルベルト・ワグネル(Albert Wagner)の盡力にて、ウルツブルヒの劇場に、

合奏の演奏師に備はるゝ事となりぬ。初め其俸給は十フロリンにして、凡そ我八圓五十錢程なりきと云ふ。十九世紀の樂聖も斯かる薄給に甘んじたることのあるを見れば、世の就職難を訴へつゝある新卒業生の如きは多くは皆薄志弱行の徒なるを思ふ。何ぞ薄給に甘んじて風雲の來るを待たざる。されどワグネルも亦一箇の煩悶兒なりき。彼はこの職業の己れに適せざることを見るや、忽ちにして辭職し、再び放浪の身となりて、作曲に従事し、一八三二年、伊太利ヴェネチアの狂言作者カルロ・ゴッチ(Gozzi)の作「蛇の女」(La Donna Serpente)の題目に倣ひ、「妖女」(Die Fee)と云ふ三齣の樂劇を作れり。こは晩年の作たる「トリスタンとイゾルデ」(Tristan und Isolde)等に現れたるものと同じく、材を古代の北歐神話に取りたるものにして、措辭の優婉なる、凡庸の青年輩が決して企及すべきものにあらず。されど其曲譜は後年用ひたるものとは、甚しく異れりと云ふ。此他ワグネルは長兄の爲めに種々なる曲譜を作り、又は其作曲を演奏する音樂會の事業を補助し居たり。

一八三四年、長姉ロザリー(Rosali)がライプツヒの劇場にありて勢力を得たるを以て、故山に歸りて、その劇場の座元リンゲルハルトに紹介せられ、その作「妖女」を